

栃木県埋蔵文化財調査報告第310集

下 陰 遺 跡 I

－北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告X－

2008.3

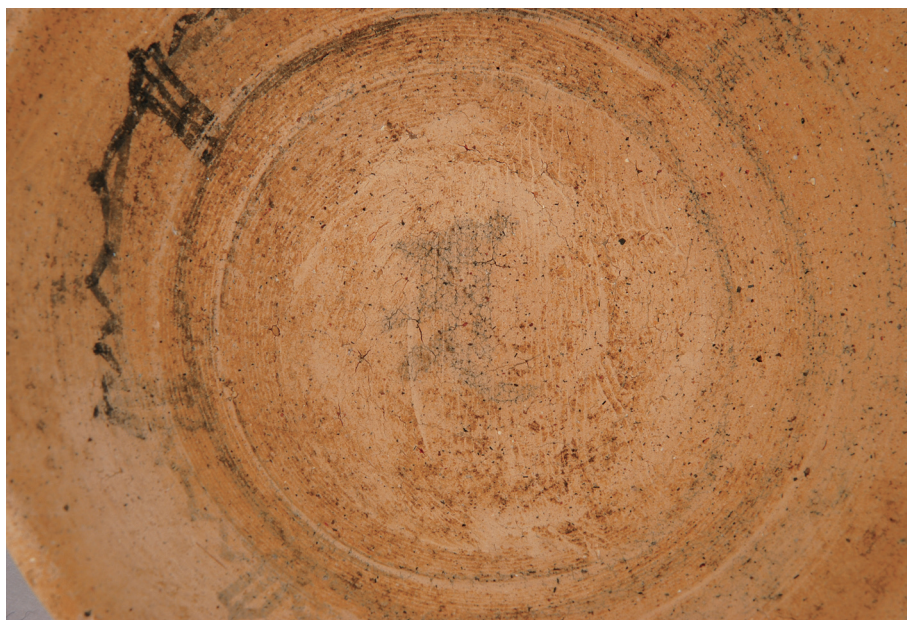
栃 木 県 教 育 委 員 会
(財)とちぎ生涯学習文化財団

しも かげ 下 陰 遺 跡 I

－北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告X－

2008.3

栃 木 県 教 育 委 員 会
(財)とちぎ生涯学習文化財団



SK-5027 出土輪宝墨書土器（内面。種子アップ）



SK-5027 出土輪宝墨書土器（内面）



SK-5027 出土輪宝墨書土器（内面）

序

北関東自動車道は群馬・栃木・茨城の3県を東西に結ぶ高速道路で、北関東の産業・文化の大動脈として計画されました。路線内に所在する遺跡については、関係機関と協議のうえ、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなりました。

栃木県南東部に位置する真岡市は、古代には芳賀郡衙と考えられる中村遺跡・堂法田遺跡や、古代寺院跡である大内廃寺、中世には芳賀氏一族の城館跡、近世には天領支配のために真岡陣屋が営まれるなど、芳賀地方の政治・文化の中心地として知られています。また、五行川沿いに「真岡木綿」を集荷・輸送するために町屋が形成され水上・陸上交通の要衝として栄えております。

今回の下陰遺跡発掘調査においても中世後期の溝跡や土坑、土師質土器・内耳土器・陶磁器・石製品などが発見され、当地域の歴史を考えていく上で貴重な成果が得られました。

本報告書は、発掘調査の記録をまとめたものです。本書が県民の皆様にとりまして郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、多くのご協力をいただきました東日本高速道路株式会社、真岡市教育委員会、栃木県県土整備部をはじめとする関係機関、並びに関係各位に、厚くお礼申し上げます。

平成 20 年 3 月

栃木県教育委員会

教育長 平間 幸男

例 言

1. 本書は、下陰遺跡（真岡市八木岡地内所在）の平成 18 年度分発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、東日本高速道路株式会社関東支社（旧・日本道路公団東京建設局）と真岡市との「真岡市道（八木岡地区）建設事業と高速自動車国道北関東自動車道建設事業との施行に関する協定」による事前発掘調査である（以下、本文中では真岡市道部分と略称する）。
3. 発掘調査は、東日本高速道路株式会社関東支社（旧・日本道路公団東京建設局）の委託事業であり、栃木県教育委員会事務局文化財課の指導のもと、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
4. 発掘調査及び整理・報告書作成作業の担当は下記の通りである。

発掘調査	平成 19 年 1 月 4 日～平成 19 年 3 月 31 日	椎名 聡・今平昌子・田村雅樹
整理・編集作業	平成 19 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日	池田敏宏・田村雅樹
5. 本書の執筆・編集は池田・田村が行った。なお執筆分担は以下の通りである。

池田敏宏	I - [1]、II - [1]・[2]、III - [2]、IV
田村雅樹	I - [2]・[3]、II - [2]（歴史的背景）の一部、III - [1]、IVの一部（遺構関係）
6. 本遺跡の測量座標は日本測地第Ⅸ系を用いている。なお座標の移設および航空写真撮影は中央航業株式会社に委託した。
7. 発掘調査ならびに本書作成に至る過程で次の方々や機関から御指導・御協力を賜った。

東日本高速道路株式会社関東第二支社宇都宮工事事務所（旧・日本道路公団東京建設局宇都宮工事事務所）、栃木県教育委員会事務局文化財課、栃木県県土整備部（旧・土木部）交通政策課高速道路対策室、栃木県土地開発公社、真岡市教育委員会

青木 敬・赤井博之・石津輝真・井上雅孝・桐生直彦・児玉義隆・小林和美・小林謙一・小林義孝・斎藤慎一・斎藤 弘・塩谷慎介・高橋典子・中村信博・馬籠和哉・水野正好・道上 文・向井隆健・村上弘子・茂木孝行・梁瀬裕一・矢野 茂
8. 調査・整理参加者

発掘調査参加者

飯島征夫・飯山四郎・石崎正則・大福地時治・木城末夫・小池正昭・児玉祐美子・小堀里子・小堀不二夫・古谷野安子・関口由紀子・篠崎節夫・高橋阿佐美・直井恵子・中山智夫・野沢 勇・村上桂子・柳すみ子・山内愛子・山崎正夫

整理・編集作業参加者

市川貴子・大峯尚子・管 智子・広瀬裕美・村田沙織・矢島早苗・和田恵美・渡辺（旧姓 野口） 貞
10. 本遺跡の調査成果は、一部公表されているが、本書をもって正式報告とする。
11. 本遺跡の出土遺物・資料類は、栃木県埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

1. 遺跡の略号は、MO-SK を用いている。
2. 地図の縮尺は各図中に示した。
3. 挿図中の北の矢印は、グリッド北「地図上の北」を示す。
4. 「第3図 周辺の主な縄文時代遺跡」「第5図 周辺の主な中世遺跡」は、栃木県教育委員会 1982『栃木県の中世城館』、真岡市 1984『真岡市史 第1巻 考古資料編』、栃木県教育委員会 1997『栃木県埋蔵文化財地図』、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2007『市ノ塚遺跡(第1分冊)』、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2007『峰高前遺跡』に掲載されている遺跡一覧を底本に作成した。
5. 遺構の種別については次の略号を用いている。なお種別については、「第2～6表 遺構一覧表」の「備考」欄に記載した。
SD：溝跡 SE：井戸跡 SA：Pit（小穴）列 SK：土坑、小穴（pit）
6. 遺構図の縮尺は次を原則とした。
調査区全測図 1/140
調査区平面図兼遺構平面図 1/80、1/100
遺構土層断面図 1/60・1/80
7. 遺構実測図に示した断面水準は、海拔標高（m）である。
8. 遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。
土器・陶磁器（小型品）1/3 土器（大型品）1/4 砥石 1/3 石白 1/4 古銭 1/1
9. 遺物観察表に記した遺物番号は、図版の遺物番号に対応する。
10. 遺構・遺物の写真図版の縮尺は不統一である。

本文目次

I. 調査経過

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の方法	4
3. 調査経緯	5

II. 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境と立地	7
2. 歴史的環境	
〔1〕縄文時代の遺跡	8
〔2〕中世の遺跡	10
a. 歴史的背景	11
b. 下陰遺跡の調査概要	12
c. 周辺の中世遺跡	14

III. 調査成果

1. 基本層序	23
2. 調査の概要	25
3. 遺 構	26
4. 遺 物	55
〔1〕縄文時代の遺物	55
〔2〕平安時代以降の遺物	63

IV. まとめ

1. 中世以前の遺構・遺物について	77
2. 中世の遺構について	77
3. 中世の遺物について	78

挿 図 目 次

第 1 図	北関東自動車道（上三川～二宮間）関連の遺跡	2
第 2 図	下陰遺跡Ⅵ-2 区グリッド配置図	5
第 3 図	周辺の主な縄文時代遺跡	9
第 4 図	宇都宮氏・芳賀氏略系図	10
第 5 図	下陰遺跡全体図	13
第 6 図	周辺の主な中世遺跡①	15
第 7 図	周辺の主な中世遺跡②	17
第 8 図	参考図	21
第 9 図	基本層序堆積状況図	24
第 10 図	遺構確認面における基本層序分布図	24
第 11 図	Ⅵ-2（東）区平面図①	41
第 12 図	土層断面図（溝跡・井戸跡）①	42
第 13 図	遺構断面図（溝跡・井戸跡）	43
第 14 図	Ⅵ-2（東）区平面図②	44
第 15 図	土層断面図（ピット列）②	45
第 16 図	土層断面図（ピット列・溝跡・土坑・ピット）③	46
第 17 図	Ⅵ-2（東）区平面図③	47
第 18 図	土層断面図（土坑）④	48
第 19 図	Ⅵ-2（東）区平面図④	49
第 20 図	土層断面図（井戸跡）⑤	49
第 21 図	土層断面図（土坑・ピット）⑥	50
第 22 図	Ⅵ-2（東）区平面図⑤	51・52
第 23 図	SX-5082 遺物出土状況図	51・52
第 24 図	土層断面図（井戸跡・土坑）⑦	53
第 25 図	土層断面図（ピット）⑧	54
第 26 図	縄文土器①	56
第 27 図	縄文土器②	57
第 28 図	縄文土器③	61
第 29 図	縄文土器④	62
第 30 図	中世遺物①	64
第 31 図	中世遺物②	65
第 32 図	中世遺物③	66
第 33 図	中世遺物④	67
第 34 図	中世遺物⑤	68
第 35 図	土師質土器小皿関係	76

第 36 図	内耳土器関係	80
第 37 図	輪宝部位と主な梵字・種子	83

表 目 次

第 1 表	北関東自動車道（上三川～二宮間）埋蔵文化財発掘調査箇所一覧	3
第 2 表	遺構一覧表（1）	36
第 3 表	遺構一覧表（2）	37
第 4 表	遺構一覧表（3）	38
第 5 表	遺構一覧表（4）	39
第 6 表	遺構一覧表（5）	40
第 7 表	遺物観察表（1）	69
第 8 表	遺物観察表（2）	70
第 9 表	遺物観察表（3）	71
第 10 表	遺物観察表（4）	72
第 11 表	中世土器破片（不掲載資料）一覧（1）	74
第 12 表	中世土器破片（不掲載資料）一覧（2）	75
第 13 表	縄文土器破片（不掲載資料）一覧	76
第 14 表	輪宝墨書土器出土地（1）	82
第 15 表	輪宝墨書土器出土地（2）	83

図 版 目 次

図版 1 下陰遺跡遠景及び周辺状況（北西上空から）、下陰遺跡（Ⅵ-2 区）全景（上空から）

図版 2 調査区Ⅵ-2（東）区全景（南東から）、SD-5001・5002 周辺（南西から）、SA-5009 周辺（南西から）、SK-5025 周辺（南から）、Ⅵ-2（東）区南東部全景（北西から）、SE-5064・5086・SK-5027 周辺（西から）、SK-5075 周辺（南西から）、SK-5091 周辺（南西から）

図版 3 Ⅵ-2（東）区南半分全景（北西から）、調査区Ⅵ-2（東）区全景（北西から）、SD-5001 完掘（北東から）、SD-5001 遺物（1）出土状況（南東から）、SD-5001 遺物（75）出土状況（北東から）、SD-5002 完掘（北東から）、SD-5002 遺物出土状況（南東から）、SD-5002 遺物（2・67）出土状況（北西から）

図版 4 SE-5031・5032・5033 完掘（東から）、SE-5034・5035 完掘（北東から）、SE-5036 遺物（60・61）出土状況（北西から）、SE-5036 完掘状況（南西から）、SE-5031～5036 完掘（SE-5088 断ち割り前）（北西から）、SE-5088 断ち割りセクション（南東から）、SE-5088 断ち割り完掘（南東から）、SE-5031～5036・5088 完掘（南西から）

図版 5 SA-5007・5008 完掘（東から）、SA-5009 完掘（南西から）、SK-5014 遺物（8・9・83）出土状況（南東から）、SK-5014 完掘（南西から）、SD-5004 完掘（北東から）、SK-5005 完掘（南西から）、SK - 5010 完掘（南から）、SK-5016 ～ 5020 完掘（西から）

図版 6 SK-5021 完掘（南から）、SK-5025 完掘（南東から）、SK-5028 完掘（北東から）、SK-5029 完掘（南西から）、SK-5040 完掘（南から）、SK-5044・5120 ～ 5123 完掘（北西から）、SE-5064・5086 遺物（26・70）出土状況（西から）、SE-5064・5086 完掘（南東から）

図版 7 SK-5015・5027 遺物出土状況（南西から）、SK-5027 遺物（13）出土状況（北西から）、SK-5027 遺物（古銭）出土状況（北西から）、SK-5015・5024・5027・5046 完掘（西から）、SK-5059 遺物（27）出土状況（南西から）、SK-5059 完掘（南西から）、SK-5054 ～ 5058・S-5130 完掘（北西から）、S-5130 遺物（36）出土状況（北西から）

図版 8 SK-5061 遺物出土状況（南西から）、SK-5061 完掘（南東から）、S-5167 遺物（38）出土状況（南西から）、S-5167 完掘（南から）、S-5168 完掘（北東から）、S-5170 完掘（南西から）、SE-5080 完掘（南西から）、SE-5092・SK-5093 完掘（南から）

図版 9 SK-5065 完掘（南東から）、SK-5066 完掘（南西から）、S-5067・5068 完掘（南西から）、SK-5075・5090 完掘（南西から）、SK-5072・5073 完掘（南西から）、SK-5076 ～ 5078 完掘（南東から）、SK-5081 完掘（南西から）、SK-5091 完掘（南東から）

図版 10 SK-5015 出土縄文土器①、SK-5015 出土縄文土器②、SK-5015 出土縄文土器③

図版 11 SX-5082 出土縄文土器①、SX-5082 出土縄文土器②

図版 12 調査区出土縄文土器①、調査区出土縄文土器②、調査区出土縄文土器③

図版 13 調査区出土縄文土器④、調査区出土縄文土器⑤、調査区出土黒曜石剥片

図版 14 中世遺物①（1・6・8・9・12・13・15・16・23・26）

図版 15 中世遺物②（27・38・4・5・7・10・14・15・18・20・21・22・25・28・29・30・35・37・39・41・42・43・44・45・48・49）

図版 16 中世遺物③（50・51・52・53・54・55・56・57・58・60・61・62・63・64・65・66・68・69）

図版 17 中世遺物④（67・70・71・72・73・74・75・76・77・78・79・80・81）

図版 18 中世遺物⑤（82・83・84・85・86・87・88・89・90・91）

I 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

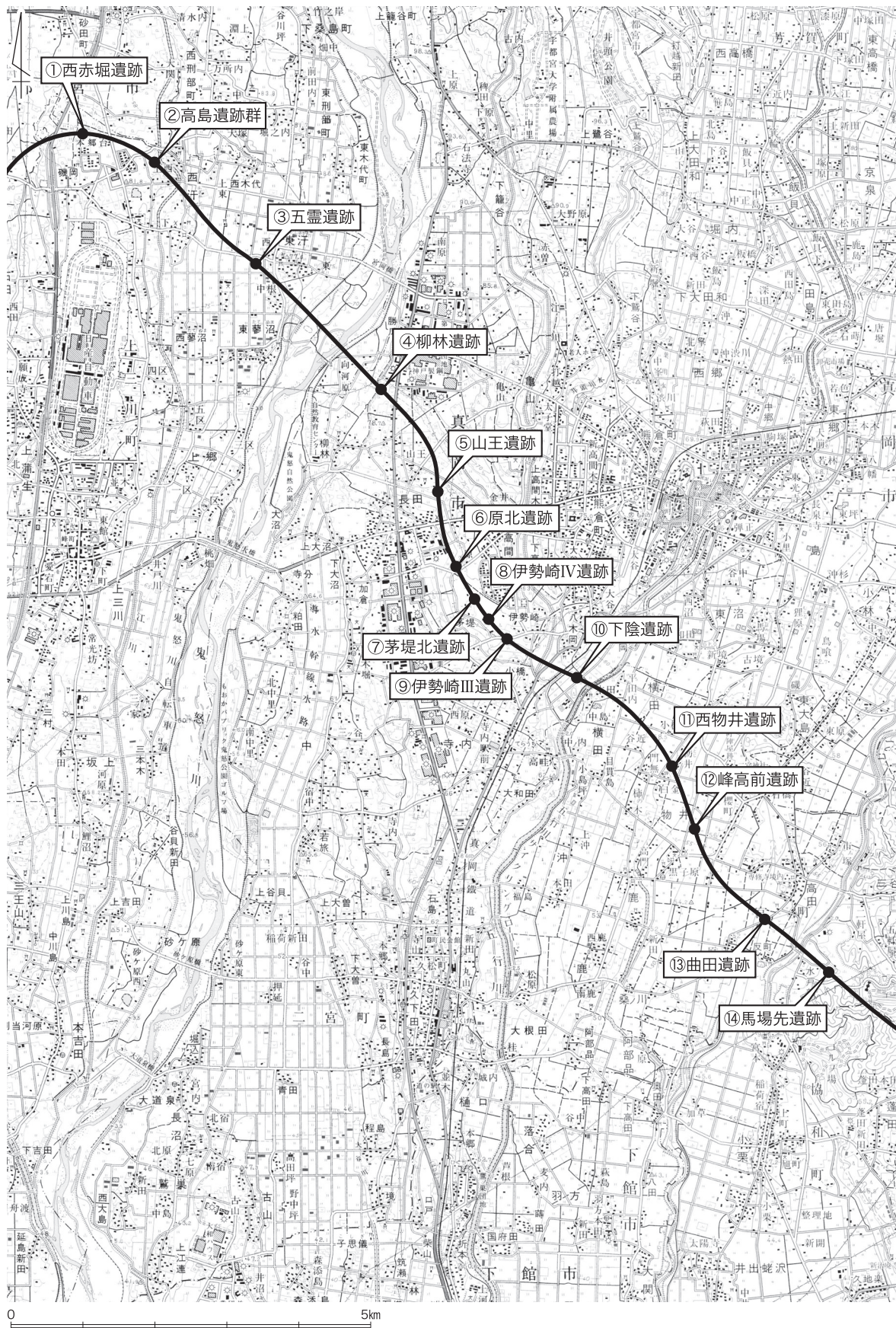
北関東自動車道（路線名「北関東自動車道高崎水戸線」）は、群馬県高崎市から茨城県ひたちなか市に至る延長約 150 km の国土開発幹線自動車である。群馬、栃木、茨城 3 県の主要都市並びに国際港常陸那珂港を結ぶとともに、上信越自動車道や中部横断自動車道と一体となり、東京から 100 ～ 150 km 圏を環状に結ぶ「関東環状道路」を形成する高速道路である。関東地方における高速道路網の強化により各主要都市の交流の促進や地域の総合的発展の基盤施設としての役割が期待されている。栃木県内は足利市、佐野市、岩舟町、栃木市、都賀町、壬生町、下野市、宇都宮市、上三川町、真岡市、二宮町の 6 市 5 町、約 58 km を通過する。このうち、東北自動車道（栃木都賀 J.C.T）から新 4 号国道（宇都宮上三川 I.C）までの約 19 km は優先着工区間とされ、平成 12 年 7 月 27 日に開通している。東北自動車道重複区間及び優先着工区間の両側に位置する上三川～二宮間、足利～岩舟間においては平成 3 年 2 月 8 日都市計画決定、平成 3 年 12 月 3 日基本計画決定、平成 8 年 12 月 27 日整備計画決定をへて、群馬県境～足利は平成 9 年 12 月 25 日、真岡～茨城県境は平成 10 年 4 月 8 日にそれぞれ施行命令が出されている。

日本道路公団東京建設局（当時、以下公団）長は施行命令を受け、平成 9 年 7 月 1 日、栃木県土木部高速道路対策室（当時、以下高対室）を經由し県教育長あて路線内の埋蔵文化財について照会した。そこで栃木県教育委員会事務局文化課（以下県文化課、平成 11 年度より県文化財課）は、平成 9 年 7 月 8 日から 18 日にかけて所在調査を実施した。この調査により周知の埋蔵文化財包蔵地を中心に上三川～二宮間で 14 箇所、岩舟～足利間で 18 箇所の調査必要箇所が確認された。結果は平成 13 年 3 月 18 日付で公団長あて回答され、あわせて県高対室長あて報告された。

これら調査必要箇所の取扱いについて、県文化課、公団、県高対室による協議の結果、工事の影響を免れない範囲について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。そのため平成 13 年 1 月 15 日、公団局長、県教育長及び発掘主体者の財団法人とちぎ生涯学習文化財団（以下財団）理事長により「北関東自動車道（足利～岩舟、上三川～二宮）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」（以下協定書）が締結された。この協定書において、上記の箇所について現地発掘調査機関は平成 18 年 3 月まで、整理作業・報告書作成期間は平成 19 年 3 月まで、費用概算は 2,167,967,000 円とされた。平成 12 年度は上三川～二宮間の柳林遺跡、西物井遺跡、峰高前遺跡について調査を着手することとなり、協定書に基づき公団局長及び財団理事間で「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」が締結され、北関東自動車道上三川～二宮間及び足利～岩舟間の発掘調査が開始された。

その後、財団は文化財課の指導にもとづき発掘調査業務を実施してきたところ、工事予定の変更や新たな埋蔵文化財包蔵地の確認等により協定書中全体実施計画書等の見直しが必要となった。そのため、平成 18 年 3 月 29 日付、東日本高速道路株式会社（平成 17 年 10 月 1 日、日本道路公団の民営化に伴い設立：以下東日本高速（株）関東支社宇都宮工事事務所長、県教育長及び財団理事長により「北関東自動車道（足利～岩舟、上三川～二宮）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する変更協定書（第 1 回変更）」が締結された。この協定においては新たに 4 箇所を加えた 36 箇所（壬生 P.A 新規建設に伴う都賀～上三川間の谷向遺跡を含む）について、現地発掘調査は平成 23 年 3 月まで、また整理作業、報告書作成は平成 24 年 3 月までの期間、費用概算は 3,302,692,000 円と変更された。

I. 調査の経緯



第1図 北関東自動車道（上三川～二宮間）関連の遺跡（S = 1/80,000）

なお、平成19年3月には、上三川～二宮間における14箇所の現地発掘調査が全て終了した。また、平成20年3月までに足利～岩舟間及び都賀～上三川間における22箇所の現地発掘調査も終了する予定である。整理報告書作成作業においては、全ての遺跡について平成23年度までに報告書を刊行する予定である。

下陰遺跡は平成9年に実施された路線内の所在調査により新規に確認された埋蔵文化財包蔵地で、八木岡地内に所在する。平成13年度上半期の確認調査に続き発掘調査は平成13年度下半期から18年度にかけて実施した。ただし路線内に所在する他遺跡発掘調査と併せて断続的に行われたため、実際の調査期間は1年9ヶ月である。整理・報告書作成作業は、発掘調査に引き続いて平成14年度上半期から平成21年度まで断続的に実施する予定である。

第1表 北関東自動車道（上三川～二宮間）埋蔵文化財発掘調査箇所一覧

No.	遺跡名	所在地	当初調査 対象面積 (㎡)	調査区分	調査 面積 (㎡)	遺 跡 の 概 要
1	西赤堀遺跡 (18年度報告)	河内郡上三川町 西汗	27,100	発掘	24,260	平成13～15年度本調査。縄文時代住居跡1軒・古墳時代住居跡59軒・古墳2基など。
				確認	730	対象面積：5,000㎡
2	高島遺跡群 (19年度報告)	河内郡上三川町 西汗	29,000	発掘	10,500	平成13・14年度本調査。古墳～平安時代住居跡18軒・掘立柱建物跡19棟など。
				確認	930	対象面積：8,300㎡
				試掘	1,085	対象面積：17,100㎡
3	五霊遺跡	河内郡上三川町 東汗	10,400	発掘	9,385	平成14・15年度本調査。古墳～平安時代住居跡19軒・溝跡30条など。
				試掘	1,266	対象面積：10,400㎡
4	柳林遺跡	真岡市 柳林・亀山	9,200	試掘	369	平成12年度試掘調査（対象面積：9,200㎡） 遺構なし。
5	山王遺跡	真岡市長田	11,000	試掘	1,018	平成14・16年度試掘調査（対象面積：11,000㎡） 遺構なし。
6	原北遺跡	真岡市西高間木	6,600	発掘	1,500	平成15年度本調査。時期不明の溝2条。
				試掘	570	対象面積：5,900㎡
7	茅堤北遺跡	真岡市伊勢崎	3,300	試掘	804	平成14年度試掘調査（対象面積：3,300㎡） 遺構なし。
8	伊勢崎Ⅳ遺跡	真岡市伊勢崎	7,900	試掘	620	平成14年度試掘調査（対象面積：7,900㎡） 遺構なし。
9	伊勢崎Ⅲ遺跡	真岡市伊勢崎	10,500	発掘	8,100	平成15年度本調査。旧石器時代遺物ブロック・古墳～平安時代住居跡3軒など。
				確認	404	対象面積：2,700㎡
10	下陰遺跡 (当報告書)	真岡市八木岡	64,700	発掘	41,183	平成13・14・17・18年度本調査。縄文時代住居跡5軒・古墳～平安時代住居跡8軒・古墳2基・中世遺構約5,000基など。
				試掘	2,822	対象面積：37,476㎡
11	西物井遺跡	芳賀郡二宮町 物井	26,800	発掘	26,350	平成13～17年度本調査。古墳～平安時代住居跡73軒・方形周溝遺構9基・中近世土坑等約320基・溝104条・ピット約1500基など。
				確認	1,047	対象面積：6,900㎡
12	峰高前遺跡 (19年度報告書)	芳賀郡二宮町 物井	17,600	発掘	13,780	平成13～15・17年度本調査。古墳～平安時代住居跡105軒・掘立柱建物跡22棟・溝27条・井戸状遺構47基など。
				確認	2,097	対象面積：22,900㎡
13	曲田遺跡	芳賀郡二宮町 高田	22,150	発掘	28,310	平成13～16年度本調査。古墳時代住居跡34軒・古墳2基など。
				確認	2,592	対象面積：22,150㎡
14	馬場先遺跡	芳賀郡二宮町 水戸部	10,600	発掘	10,600	平成15年度本調査。奈良・平安時代住居跡5軒など。
				試掘	530	対象面積：9,000㎡

I. 調査の経緯

2. 調査の方法

① 下陰遺跡は、(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターにより平成13～18年度に断続的に発掘調査が実施されている（各々の調査概要についてはp.12～14を参照）。

② VI区は部分的に調査が実施されている（平成17年度に139㎡、平成18年度に1,530㎡）。このため枝番を付し、平成17年度調査箇所をVI-1区、平成18年度調査箇所をVI-2区と、呼称している。なおVI-2区は東西に長く、かつ農業用水路により調査区が2ブロックに分断される。このため便宜的に東区・西区に細分した（第2図）。

③ 下陰遺跡は平成13年度の調査開始時以来、日本測地第Ⅸ系方眼のX = 46,370、Y = 14,000の交点を起点とし、調査対象範囲にグリッドを設定している。それゆえ今回調査においても日本測地第Ⅸ系座標値に基づきグリッドの設定を行った。

グリッドは、X軸は数字にて、Y軸はアルファベットを付10m×10mに割り付けを行った。平成13年度以来の調査区に対応させてグリッド名称を施した（第2図）。

例. X=46,190 Y=14,480を交点とするグリッドは「R-48」として呼称する。

④ 表土除去は重機掘削によりVI-2区東区から開始した。表土除去開始段階で溝跡（SD-5001・5002）を検出したため、これを目安に遺構が確認できる深さ（表土-0.5m前後）まで掘削した。なお廃土は、VI-2区南西調査区外に置いた。

⑤ 表土除去終了後、人力により遺構確認作業を実施。その結果は下記の通りである（遺構の確認密度が少ない箇所は、現行確認面下の遺構・遺物存否を確認する意味で重機により深掘り調査（A～E）を施した）。

東区 溝跡と多数の土坑群を検出した。また深掘りA地点では基本層序V層（砂礫層）下に砂層を確認した。深掘りB地点では基本層序V層（砂礫層）上層の基本層序IV層（砂層）とは異なる自然堆積層（礫（川原石）、粘質土を少量含むきめ細かい層）が落ち込む状態を確認した。

西区 遺構は確認されなかった。深掘りC・D・E地点において近現代の攪乱層（コンクリート片・瓦礫片を混入）を確認した。

⑥ 平成17年度以前の発掘調査で発番した遺構番号と重複しないようするため、今回調査は5001番から遺構番号を付し、種別（SA・SD・SE・SK等）-番号の書式で表現した（例. SD-5001）。同一遺構内で遺構重複がある場合、新旧関係の新しいものからアルファベット小文字を付した（例. SA-5008p3a）。なお調査の結果、遺構と判別できなかったものについては、調査時番号を欠番とした。

⑦ 出土遺物は時間的制約上、遺構・グリッド内一括取り上げを基本とした。ただし、遺存状態が比較的良好なものや遺構の時期比定が可能と思われる遺物は、遺構単位で遺物番号を発番し、出土位置・高さを記録・図化した。

⑧ 土層断面図、遺物出土状況図ならびに遺構完掘平面図はS = 1/20にて現場作図をおこない（遺物出土状況図のうち一部はS = 1/10で作図したものも存する）、これを整理作業時、編集した。

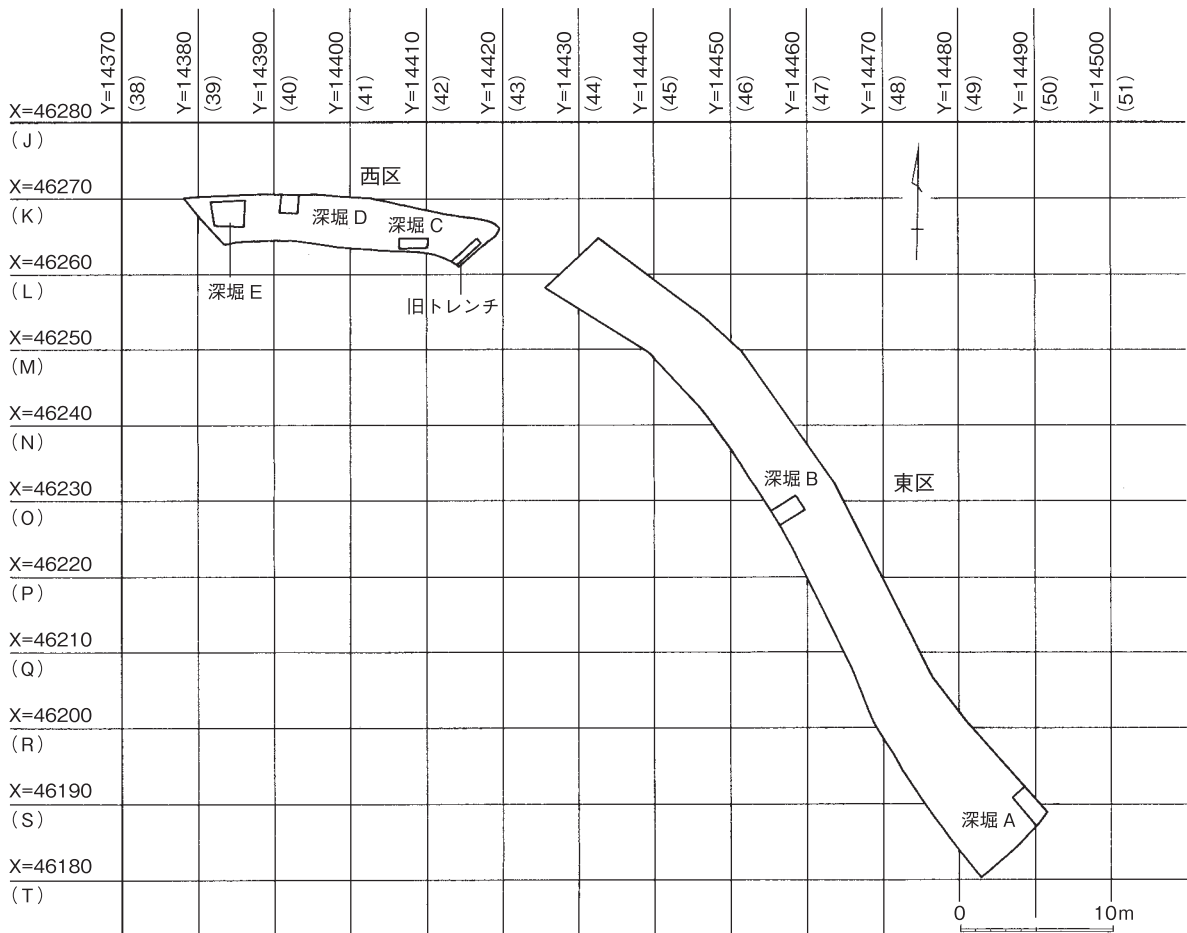
3. 調査の経過

発掘調査

2007 年 1 月中～下旬	発掘調査準備。
1 月 26 日（金）～1 月 31 日（水）	ユニット・ハウス設置。発掘調査機材・用具搬入。
2 月 1 日（木）～2 月 9 日（木）	重機による表土除去。遺構確認作業。グリッド杭設置。
2 月 9 日（木）	遺構調査開始。
3 月 7 日（水）	ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影（第 1 回目）。
3 月 8 日（木）	SE-5088 断ち割り調査終了後、R グリッドライン（X=46,200）以南の調査区を引き渡す。
3 月 15 日（木）	セスナ機による航空写真撮影（第 2 回目）。
3 月 23 日（金）～3 月 26 日（月）	出土遺物及び発掘調査機材・用具搬出。ユニット・ハウス撤収。

整理作業

2007 年 10 月上旬～下旬	調査記録（図面・写真等）の整理。遺物水洗い・注記。遺物接合
10 月下旬～11 月下旬	遺物実測図・拓本作成作業。遺物観察表作成。
11 月下旬～12 月下旬	トレース作業。図版作成作業。
12 月上旬～2008 年 2 月上旬	原稿執筆。報告書編集作業。
2 月上旬～3 月下旬	報告書印刷・製本。



第 2 図 下陰遺跡 VI-2 区グリッド配置図 (S=1/1,000)

I. 調査の経緯



深掘り A 地点土層堆積状況（南西から）



深掘り B 地点土層堆積状況（北西から）



深掘り D 地点土層堆積状況（南西から）



深掘り E 地点土層堆積状況（北西から）



表土除去状況（東から）



グリッド杭設置状況（東から）



整理作業風景（図版作成）



整理作業風景（原稿執筆）

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境と立地

真岡市は栃木県南東部にあり、北は宇都宮市・芳賀町、東は市貝町・益子町、南は二宮町、西は上三川町と接している。地形的に見ると、県央平地部に位置する。この県央平地部は台地と低地から成っている。台地は地形面の高度、浸食度、表部に堆積している関東ローム層の層序関係等によって高位のものから宝積寺面、宝木面、田原面、絹島面に区分される。台地と台地の間を田川・鬼怒川・五行川・小貝川などの河川が流下し、細長い沖積低地をつくっている。

真岡市域の大半は真岡台地（宝積寺面）が占めており、鬼怒川・五行川に流下する小河川（行屋川・江川など）浸食谷によって開析された小島状の段丘が発達する。加えて台地の西側は鬼怒川低地、台地東側には五行川低地が広がる。真岡台地の標高は北部で約 100 m、南部は約 70 m で南に向かって緩やかに傾斜する。一方、低地部は、圃場整備が進み旧地形はあまり残っていないものの、集落は自然堤防上や微高地上に点在する傾向にある。また真岡市東部では五行川の曲流旧河道が認められる（註 1）。下陰遺跡は真岡台地が五行川低地に向かって落ちる緩斜面に広がる（註 2）。標高は約 56 ～ 58 m。位置的には真岡市街地から南西へ約 1 km の地点にある。

〈註〉

註 1 「この地帯は火山灰を母材とする水積の水田が多く、乾田の割合が高いが台地沿いや地形的にやや凹地であったところには湿田や半湿田が分布している。しかし、圃場整備の進行に伴い乾田化が進んでいる」（栃木県企画部編 1990。p 18）。

註 2 真岡台地の東側には五行川低地が広がるが、台地・低地境は明瞭な崖線で接する傾向が強い。しかし遺跡西縁で江川が五行川に注ぐこともあり、近辺は窪地状に開析谷が広がっている。加えて、遺跡東縁は五行川の曲流旧河道ならびに後背湿地にあたる。これらに挟まれたローム面（真岡台地）突端部分に本遺跡は形成されている。

〔参考文献〕

栃木県企画部資源対策課編 1990『土地分類基本調査 真岡』栃木県

真岡市史編さん委員会編 1987『真岡市史』第 6 巻 原始古代中世通史編 真岡市



真岡台地・五行川低地の崖線（真岡市西沼より南西方向を望む）

2. 歴史的環境

〔1〕縄文時代の遺跡（第3図）

下陰遺跡Ⅵ-2区では縄文時代（中期後葉～後期後半を主体）の遺構・遺物が検出されている。以下では、今回調査成果を考えていく上で参考となる周辺遺跡・遺物散布地の概要を記してみたい。

於宮遺跡（10）は本遺跡の北西約0.4kmに位置する。中期中葉～後期前葉の土器、石器（打製石斧・石皿など）が多数採集されている（真岡市1984）。本遺跡と同一台地上に立地し至近にあること、出土土器の時期等が本遺跡とほぼ同じであること、から両遺跡は同一遺跡群の可能性が推定できそうである。

熊倉A遺跡（1）・上り戸遺跡（本遺跡の北約8kmに位置）も本遺跡と同一台地上に立地する遺跡である。熊倉A遺跡は中期前半から後期初頭の土器が多量に採集されている。真岡農業高校（現・真岡工業高校）北側の道路工事等の際、袋状土坑数基が確認されている（真岡市1984）。上り戸遺跡は2002年に発掘調査が行われ、縄文時代の竪穴住居跡18軒、埋甕11基、土坑・pit1050基、配石遺構2基、人為的削平部1箇所、中期後葉～後期後葉の土器、土製品（土偶・耳飾・蓋）、石器（石鏃・打製石斧・磨製石斧・石皿・磨石）・石製品（石棒）などが検出されている（江原2005）。

真岡市街地がのる台地上は丸山遺跡（6）（前期初頭・中期後葉の土器が散布）、城内遺跡（5）（中期中葉～後期の集落。芳賀城跡の遺構群と重複する）が、台地縁辺の沖積地には城内北A遺跡（2）・城内北B遺跡（3）（ともに中期中葉の土器が散布）、城内東遺跡（4）（後期後葉の土器が散布）が立地する（真岡市1984）。

本遺跡北西の台地上には山王遺跡（7）（中期中葉の土器が散布）、山王薬師堂遺跡（8）（前期前半および後期前半の土器が散布）、稲荷山遺跡（9）（草創期・早期前葉・前期後半・中期前半の土器が散布）が存在する（真岡市1984）。

なお1993・1994・1997年に発掘調査が行われた伊勢崎Ⅱ遺跡（11）は、本遺跡の北西約1km、江川の右岸台地上にある。縄文時代の竪穴住居跡1軒、袋状土坑4基、土坑4基、性格不明遺構1基、早期・前期・中期中葉～後期の土器、石器（石鏃・磨製石斧・打製石斧）等が検出されている（吉田ほか2000）。

他方、五行川低地では、曲田遺跡（16）〔陥し穴状土坑数基、草創期の石鎗、前期後半・中期後半の土器などを検出。（財）とちぎ生涯学習文化財団2003・2004・2005。二宮町2006〕、市ノ塚遺跡（本遺跡の南東約5kmに位置。早期前半・中期後半の土器が出土。藤田2007）、高畦遺跡（12）（中期中葉～後葉の土器が散布。二宮町2006）、中内遺跡（13）（中期中葉の土器が散布。二宮町2006）、西物井遺跡（15）〔後期前半の遺物集中箇所を検出。（財）とちぎ生涯学習文化財団2004。二宮町2006〕などが微高地上に点在する。なかでも一ツ橋遺跡（14）に近接する二宮町横田（小沼尻）からは後期前半～後半の土器が多数採集されている（二宮町2006）。

〔参考文献〕

江原 英 2005『上り戸遺跡』栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団

（財）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2003・2004・2005『埋蔵文化財センター年報』第13・14・15号

二宮町 2006『二宮町史』史料編Ⅰ 考古・古代中世

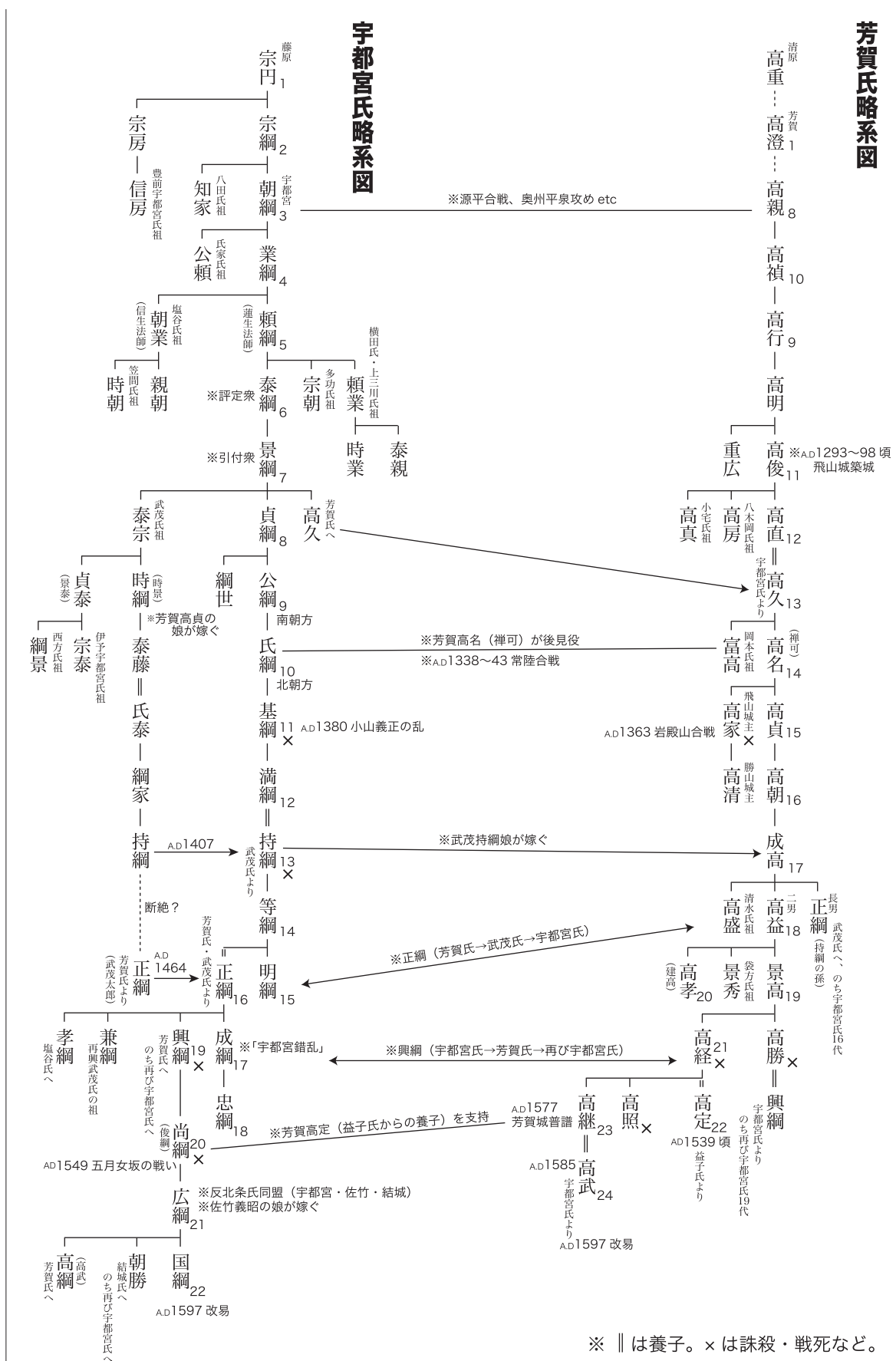
藤田直也 2007『市ノ塚遺跡』栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団

真岡市 1984『真岡市史』第1巻 考古資料編

吉田 哲ほか 2000『伊勢崎Ⅱ遺跡』（旧石器・縄文・弥生時代編） 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団



第3図 周辺の主な縄文時代遺跡 (1/50,000)



第4図 宇都宮氏・芳賀氏略系図（本書22頁文献をもとに作成）

〔2〕中世遺跡

〔a〕歴史的背景（第4図）

芳賀氏について

芳賀氏は、寛和元〔985〕年、花山天皇の怒りに触れた清原高重が、下野国大内庄鹿島戸に配流されたのが最初という。だが、後三年の役〔1083～88〕の際、芳賀高澄（初め清原三郎を称す）が戦功をあげたことより後冷泉天皇から祖先の罪を許されている。なお芳賀高則の妹は紀（益子）正隆に嫁ぎ、さらにその娘は宇都宮兼仲に嫁いで2代・宗綱を生んでいる。これ以後、芳賀氏は益子氏（註1）と共に「紀清両党」と呼ばれ宇都宮氏（註2）の重臣として活躍する。とくに芳賀高俊は、宇都宮貞綱の補佐役として宇都宮本宗家との関係を緊密にするため飛山城（芳賀氏の本拠・御前城の北西約21km、宇都宮市飛山に所在。永仁年間〔1293～98〕頃に築城）を築城し、加えて芳賀高直が宇都宮景綱の次男・高久を養子に迎えたことで宇都宮氏宿老中（有力な親類・家風）でも有力な地位を占めていくこととなる。

南北朝期、9代・宇都宮公綱は南朝方に属し西国を転戦した。しかし留守居の氏綱（公綱の子）と、その補佐役・芳賀高名は、建武4〔1337〕年、宇都宮城を占拠し、北朝に味方する態度を明確化する。これに伴い、宇都宮・芳賀氏とも常陸合戦に巻き込まれていくこととなった（註3）

他方、観応の擾乱（註4）の折、尊氏方として活躍した功績により10代・宇都宮氏綱は上野・越後の守護職に、芳賀高名（禪高）はその守護代に任じられている。だが、十年ほど後には関東公方・足利基氏により越後守護職は上杉憲顕に返されてしまい、これを不服とする宇都宮・芳賀氏は公方方と戦うが惨敗（貞治2〔1363〕年、岩殿山合戦など）。以後、宇都宮一族は関東公方を頂点とした組織に組み込まれる。しかし13代・持綱（宇都宮一族・武茂氏出身）は、上杉禪秀の乱（応永23〔1416〕年）以降、関東公方と対立し室町幕府方（京都扶持衆）となった。反関東公方の姿勢は14代・等綱へと継承されるが、古河公方・足利成氏の下野進軍の折、15代・明綱は再び古河公方方へ転じた。しかし明綱は早世し、寛正4〔1463〕年、芳賀正綱が16代当主を継承した。だが正綱死去後、子息・成綱が若年で宇都宮氏を継いだ頃、芳賀氏は宗家・宇都宮氏を凌ぐ状態にあり、本宗家系と芳賀氏は家督をめぐる争うようになっていた（文明9〔1477〕年、「武茂六郎」〔正綱長男・鎌綱か〕が反旗を翻している）。さらに古河公方家の内紛もからんで、成綱による芳賀高勝誅殺＝「宇都宮錯乱」へと発展する（註5）。

「宇都宮錯乱」後、芳賀氏は高孝が家督を継承し、次いで宇都宮正綱の二男・興綱を入嗣させ事態を収束させた。しかし芳賀興綱は結城政朝と謀って、18代・忠綱を退け19代宇都宮氏当主となる。この時の芳賀氏は高経（高孝の子）を領主に、高孝（建高）が補佐役となり家中を治めた。天文5〔1536〕年、芳賀高孝（建高）・高経は壬生綱雄らと共に宇都宮興綱に叛く。この背景には再燃した古河公方家の内紛があったようで（高基方の宇都宮興綱と晴氏方の芳賀高孝・高経）、宇都宮興綱の死去は、芳賀氏による生涯の可能性が推考されている（註6）。芳賀氏は興綱の子・俊綱（のち尚綱）を当主にすえるが、小山・結城氏対策の相違などから、高経と20代・尚綱は対立。天文8〔1539〕年、高経は討たれ、高照（高経の子）は白河に逃亡した。これにより宇都宮尚綱の支持のもと益子勝宗の三男・高定が芳賀氏名跡を継ぐこととなった。

なおこの頃、下館水谷氏も宇都宮・芳賀氏の争乱に乗じて下野南部に侵攻しており、芳賀方の中村城（天文13〔1544〕年）、八木岡城（天文14〔1545〕年）を落城させている。

一方、天文18〔1549〕年、芳賀高照は那須高資らの協力を得て挙兵、宇都宮尚綱を戦死させ、宇都宮城を占拠するにいった（五月女坂の戦）。これに伴い宇都宮尚綱の子・伊勢寿丸（のちの広綱）は芳賀高定を頼って真岡城へ移行する。しかし天文20〔1551〕年、芳賀高定によって那須高資が討たれると、高照は孤立し、

Ⅱ 遺跡の立地と環境

この隙をついた壬生綱雄（北条氏康の支援を受ける）によって宇都宮城を追われた。弘治3[1557]年、宇都宮・芳賀・佐竹連合軍は飛山城に在陣する。だが、壬生綱雄が全面対決を避けたことにより、21代・広綱は宇都宮城奪還を遂げた。しかし小田原北条氏による北関東侵攻は、下野・下総・常陸の諸領主に緊張を生み、結果、反北条氏同盟が結ばれた（註7）。芳賀氏においては、天正13[1585]年に芳賀高継が宇都宮国綱の弟・高綱（のち高武）を養子として迎え、宇都宮氏との連帯を強めている。また芳賀高継によって普請された芳賀城は、時勢からみて北条氏対策と考えられよう。

22代・宇都宮国綱は佐竹氏との同盟関係を軸に北条氏と攻防を繰り返す一方、北条氏の背後を狙う豊臣秀吉との関係を強めていく。天正18[1590]年、小田原北条氏攻めに際し、宇都宮氏は豊臣方として参陣することで本領安堵をうける（芳賀高武が宇都宮国綱の名代として小田原参陣をしている）。しかし慶長2[1597]年、石高隠匿の罪により所領を没収（註8）。これに伴い一門の芳賀氏も改易させられた。

八木岡氏について

八木岡氏は、芳賀高俊の二男・高房が芳賀郡八木岡庄を領したことに始まると言う（八木岡庄は大内庄から分かれた荘園で、飛山城に芳賀氏の拠点を移した高俊が、八木岡庄管理を高房に譲った可能性が考えられている。註9）。また高房の養子・高政（小栗重宗の二男）は八木岡四郎を名のっている。

南北朝時代、八木岡氏は北朝方（足利氏方）に属していた（『太平記』には、九州多々良浜の合戦で八木岡五郎が足利尊氏・直義の配下として活躍したことが記されている）。このため暦応2[1339]年、八木岡城は南朝方・春日顕国によって攻略され、城中の兵士は惣領以下全員討ち死にしたという（「北畠親房御教書写」『松平結城文書』）。これ以後、八木岡氏の動向は戦国時代に至るまで不明であるが、「八木岡肥後守高房が後孫は、代々八木岡郷に在り」（『下野國誌』）と記されていることから名跡は続いていたようである。しかし天文14[1545]年、八木岡定家は常陸下館領主・水谷正村と芳賀郡久下田郷石島原で合戦し死去。その子・貞勝は、水谷氏に領地を奪われたと言う。

〔b〕下陰遺跡の調査概要

（財）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターにより平成13・14・17・18年度に発掘調査が実施されている。各年度の調査期間・調査対象は次のとおりである。

平成13年度（次回『下陰遺跡Ⅱ』で報告）

調査期間 2001.7.2～2002.07.30 I区・II区（1,116㎡）の試掘調査。

調査期間 2001.8.1～2002.03.29 I区（18,200㎡）・II区（860㎡）の本調査。

調査期間 2001.8.1～2002.03.29 III区・IV区（1,142㎡）の試掘調査。

平成14年度（次回『下陰遺跡Ⅱ』で報告）

調査期間 2002.10.01～2003.03.31 IV区（11,700㎡）の本調査。

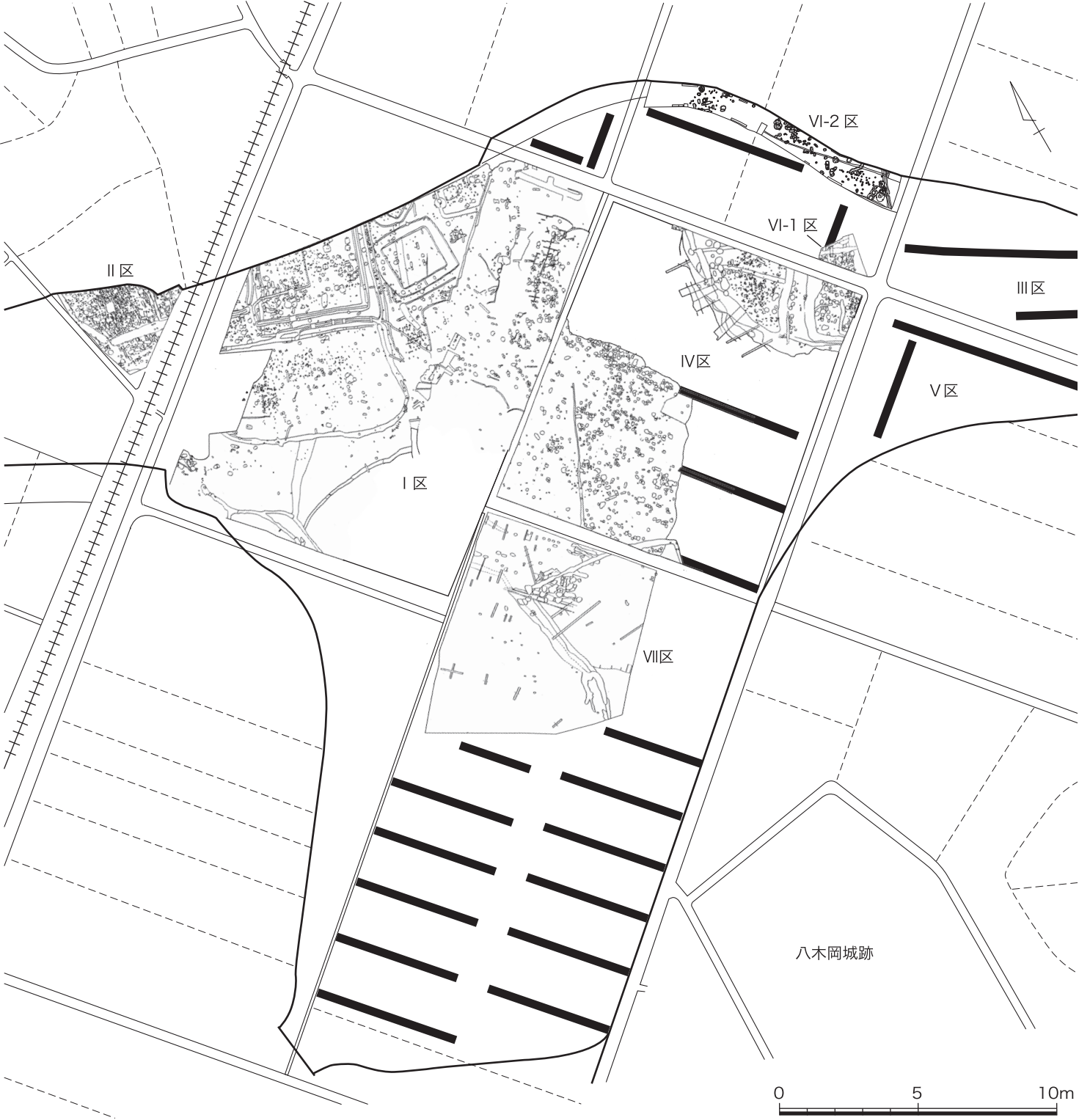
調査期間 2002.10.01～2003.03.31 V区・VII区（1,680㎡）の試掘調査。

平成17年度（次回『下陰遺跡Ⅱ』で報告）

調査期間 2005.10.01～2006.01.31 VI-1区（139㎡）・VII区（4,300㎡）の本調査。

平成18年度（真岡市道部分。今回報告）

調査期間 2007.2.1～2007.03.31 VI-2区（1,530㎡）の本調査。



第5図 下陰遺跡全体図 (1/2,000)

II 遺跡の立地と環境

なお各調査区の概要（**財**とちぎ生涯学習文化財団 2002・2003・2006・2007）を整理すると、次のようになろう。

II区 + I区北側 — 溝で方形に区画された遺構群（本遺跡の中心地区。ただし中心部分は調査区外に伸びる）。区画内には方形竪穴建物跡・長方形土坑・ピット群が密集。また方形区画に接して南北方向に道路跡が伸びる（八木岡城跡の方向へ伸びる）。

I区南側 — 道路跡延長部分のみ馬の背状にローム層が残る。だが、このローム層の東西は共に低地になっている。とりわけ東側低地（地山が水付きローム）は縄文時代～中世に至る粘土採掘土坑が多数存在する。

III区・V区 — 五行川の形成する低地にあたり、遺構は皆無（IV区中央部で確認した埋没谷が伸びていることはトレンチ調査により確実）。

IV区 — 埋没谷をはさんで南西側と北東側でローム面が存在。南西部（地山が水付きローム）は粘土採掘土坑群が多数存在する。北東部（地山は砂質ローム）は薬研掘溝が東西・南北に走っており地割りを行われている（中世遺構群）。

VI-1区 — IV区北東部の中世遺構群が伸びる地区。

VI-2区 — IV区北東部の中世遺構群が伸びる地区。今回報告分。

VII区 — I区南側ならびにIV区南西から馬の背状にローム層が伸びます。この馬の背ロームの東側（地山は水付きローム）に方形区画溝およびこれに伴う掘削遺構（凹凸が激しい）が築かれる。近接して八木岡城跡が存在するため、この遺構は八木岡城跡に伴う遺構（馬出しの一種）の可能性が高い（区画溝覆土中層から中世土器が出土）。

ちなみにVII区南側はI区南西と同様、低地が伸びている（トレンチ調査により確実）。

〔c〕周辺の中世遺跡（第5・6図）

〔八木岡氏関係城館跡〕

八木岡城跡（20）（真岡市指定史跡） 本遺跡VII区に至近して所在する。五行川右岸の微高地上に築かれた平城で現在は山林。東西約150 m、南北約100 mの規模で、二重の土塁・空堀が南北に弓状を呈して残っている。なお上記したように、この城は芳賀高房が、永仁年間〔1293～99〕、八木岡庄を領した折に築城され、芳賀貞勝の代に廃城となったと伝わる。

〔中村氏関係遺跡〕

中村城跡（23）（県指定史跡） 真岡台地上ではあるが、城跡西方約500 mで鬼怒川沖積地、東方約500 mには浸食谷急崖（比高5 m程）がある地に所在する。城跡は東西約190 m、南北約180 mの方形状を呈し、周囲には幅8 m、深さ5～9 mの空堀がめぐっている。構造からみて居館的性格が強く、中世前期の居館が中世後期に城郭的施設へと拡充していったと考えられている。歴史的に見ても、本城跡は保元・平治年間〔1156～60〕頃、中村朝宗（念西）が築城（註10）。代々、中村氏の居城であったが、天文13〔1544〕年、下館領主・水谷正村に攻められて落城・廃城になったと伝わる。

なお城跡北東には遍照寺（22）（暦応年間〔1338～1341〕に現在地の北東約2 kmに建てられたものが、天文年間〔1532～54〕に現在地に移転されたと考えられている。註11）、城跡北西0.7 kmには中村八幡宮（21）（源氏、ならびに中村氏を祖と伝える奥州伊達氏と関係が深い神社。註12）が所在する。



第6図 周辺の主な中世遺跡① (1/50,000)

Ⅱ 遺跡の立地と環境

〔芳賀氏関係城館跡〕

京泉館跡（御前館） 本遺跡の北東約 8 km に位置する。寛和元〔985〕年、芳賀郡大内庄に配流された清原高重が、領地を拡大し本田屋敷（本殿屋敷か）を構えたのが始まりと伝える。1930 年代までは二重の堀と土塁が残っていたが、現在は宅地・水田化され湮滅している。付近には伝芳賀氏の墓所がある。

御前城跡（芳賀古城）（17） 承保 3〔1076〕年に芳賀高澄が築いたのち、芳賀高親が修築、以後芳賀氏の本拠となった。五行川左岸の沖積地に築かれた平城で、その規模は東西約 290 m、南北約 200 m の方形状を呈したものであったという。天正 5〔1577〕年の芳賀城普請に伴い廃城となった。城跡は明治初期頃には湮滅し現在は宅地・水田・真岡中学校敷地と化している。

芳賀城跡（真岡城跡・舞が丘城）（18） 真岡台地上の高台（標高約 76 m。城山公園から真岡小学校敷地にかけての範囲）に位置する。城跡の東・西・北の 3 方は急崖をなし、加えて東側崖下に行屋川を引きこみ内堀としている（比高約 22 m）。築城時期は①貞治元〔1362〕年（芳賀高貞）説、②天文元〔1533〕年（芳賀高経）説、③天正 5〔1577〕年（芳賀高継）説の 3 説がある。だが天正 5〔1577〕年に、堅固な城普請があったのは古文書（『日下田家文書』）により確実である。

なお、慶長 2（1597）年、芳賀氏は本宗家・宇都宮氏と共に改易されたが、17 世紀前半代は真岡藩主・浅野、堀、稲葉各氏の居城として、またそれ以降は江戸幕府代官所（真岡陣屋。現在の城山公園の範囲）が設置され明治維新まで機能した。

〔宇都宮氏・芳賀氏に関わるその他の遺跡〕

この他、宇都宮氏・芳賀氏に関連した城館跡としては、**籠谷城跡**（本遺跡の北西約 10 km に位置したが湮滅。天正年間〔1573～91〕頃、宇都宮広綱家臣・籠谷政高により築城されるが宇都宮氏滅亡により廃城）、**厚木城跡（25）**（築城者は厚木朝高といわれる。天正年間頃、水谷勝俊に攻められ、以後廃城）、**峰高城跡（24）**（天正年間頃、宇都宮広綱家臣・豊田細斎が築城したという。宇都宮氏滅亡により廃城。註 13）がある。また、寺社としては**同慶寺**（宇都宮市飛山に所在。芳賀氏歴代の中世石塔群が境内にある）、**海潮寺（19）**（芳賀氏菩提寺の一つ。中世石塔群が境内に所在する他、芳賀禪可入道画像を蔵する）、**大前神社**（御前城跡の北約 1 km に位置。延喜式内社の一社で、芳賀氏は代々、社領守護職を兼ねた）等がある。

〔長沼氏関連城館跡〕

長沼城跡（綿着城） 二宮町南西部、鬼怒川左岸の沖積地（本遺跡の南西約 8 km に位置）に所在する。元暦元〔1184〕年、小山政光の二男・長沼宗政が築城。文明 3〔1471〕年、長沼成宗のとき廃城になったと伝わる（註 14）。城域の大半が田畑・宅地と化しているため僅かな凹地によって堀跡を推定できるにすぎず、規模・縄張り是不明である。しかし長沼地内には、館ノ内・宿ノ内・蔵屋敷・北門・西木戸・南宿・北宿などの小字が残っており、館ノ内が本郭跡、宿ノ内の蔵山は武器庫跡と言われている。

なお城のすぐ南側には宗光寺（境内地は回字形の深い堀跡で囲まれる）があり、ここを長沼古城とする考えがある（註 15）。

大曾城跡（26） 真岡鉄道久下田駅の北西に位置する平城であったが、現在、付近は宅地・水田化し湮滅している。本城跡は長沼宗政の次男・政能（大曾郷を領有して大曾と改姓）が、長沼城の北東約 4 km の地に築城。文明年間〔1469～87〕に廃城になったと伝わる。



御前城跡（左手建物は真岡東中学校校舎）（西から）



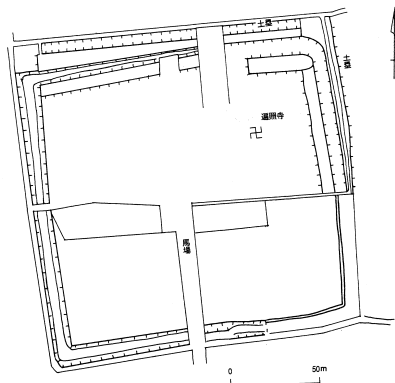
大前神社本殿（北東から）



行屋川から芳賀城跡を望む（南東から）



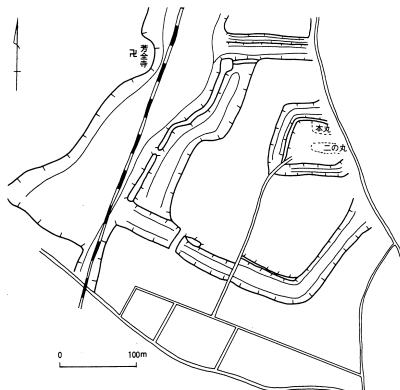
海潮寺芳賀氏墓所（東から）



中村城略測図（橋本、津久井編 1982）



遍照寺本堂（南から）



久下田城略測図（橋本、津久井編 1982）



中村八幡宮社叢（南西から）

第7図 周辺の主な中世遺跡②（1/50,000）

II 遺跡の立地と環境

〔水谷氏関連城館跡〕

久下田城跡（河連城・生牛城）（27）（茨城県指定史跡） 城跡主要部分は茨城県筑西市だが、西方出丸跡の一部が栃木県二宮町に属す。五行川右岸段丘上に築かれた平城で、本丸・二の丸・三の丸から構成される。城跡東側は高さ約 10 m の土塁と急崖、五行川を引き込んだ水堀りからなる。西・南側には幾重にも掘跡（掘幅 8 ～ 10 m、深さ 6 ～ 7 m）をめぐらしている（現在、西側掘跡は真岡鉄道の鉄道敷、南側掘跡は県道となっているが原形に近い形で残っている）。下館領主・水谷正村が宇都宮氏・芳賀氏の下館方面侵攻に備えて築いた城で、下館城の支城として機能した。（築城年代は天文 14 [1545] 年説、永禄 8 [1565] 年説がある）。

下館城跡（螺城） JR 水戸線下館駅の北側に所在（本遺跡の南約 12 km に位置）する。遺構は市街地化に伴って現在ほとんど湮滅してしまっている。寛永 16 [1639] 年に描かれた『下館城絵図』（蓬左文庫蔵）を見ると、本丸・二の丸・三の丸・出丸が連郭式に配置され、城の東側は五行川（勤行川）、主郭北側から南西側にかけでは大谷川や溜池に囲まれていたようである。

本城跡は文明 10 [1478] 年に結城氏家臣・水谷氏勝が、結城氏広から下館に領地を与えられて築城したのが始まりとされる。以後、水谷氏は寛永 16 [1639] 年に備中成羽（備中松山）に転封されるまでの約 160 年間、下館の地を領有した（註 16）。

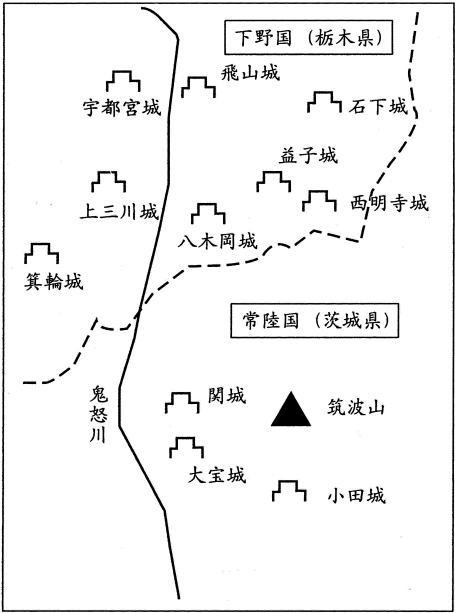
〔註〕

- 註 1 益子氏は、芳賀氏と共に宇都宮氏を支えた武士団で、2代・宇都宮宗綱の母は紀（益子）正隆の娘とされている。また 3代・朝綱は上大羽の地に隠居し、この地に宇都宮家の墓所も作られている。このことから、益子氏と宇都宮氏は非常に深い関係にあったことがわかる。だが戦国期、益子氏は小田原北条氏に内通したため宇都宮氏・水谷氏らによって攻められ天正 17 [1585 年] に滅亡した。
- 註 2 宇都宮氏の出自については諸説があるが家伝によれば関白・藤原道兼の曾孫・宗円が前九年の役 [1051 ～ 62] の折、安部頼時（貞任）調伏の祈祷師として下野に下った後、二荒山神社社務職・日光山別当職として土着したのに始まる。史料上、確実なのは 3代・朝綱で、源頼朝挙兵より参陣した功により鎌倉幕府有力御家人となった。以後、代々幕府内で重きをなし評定衆・引付衆になっている。また 7代・景綱が制定した『宇都宮家式条』は早期の武家法として注目されている。南北朝時代は、はじめ 9代・公綱が南朝方にあったが、その子・氏綱以降、北朝方に属した。室町時代には幕府、ならびに関東公方と強い結びつきをもったが、戦国時代に入ると関東争乱の渦中で内訌外戦を繰り返し、勢力を弱めていった。
- 註 3 足利尊氏が北朝（光厳天皇）を擁立したのを契機に、形成不利となった南朝（後醍醐天皇）方は足利方の拠点である東国攻略を計った。暦応元・延元 3 [1338] 年、義良親王・宗良親王を奉じた北畠親房・結城（白河）宗広軍は、伊勢大浦を船出するが途中難破し北畠親房らだけが常陸上陸を果たした。この後、親房は小田城、関城、大宝城を拠点に東国へ南朝勢力を結集させた。加えて親房配下・春日顯国は下野への攻撃を進め、暦応 2・延元 4 [1339] 年 2 月に八木岡城・益子城（西明寺城）・上三川城・箕輪城、同年 8 月に飛山城と北朝方の諸城を落とした。しかし北朝方は瓜連城を足がかりに小田城を攻め形成は逆転する。南朝方は関城・大宝城に移って抗戦したものの康永 2・興国 4 [1343] 年、両城は陥落。これにより関東地方における南朝方の組織的活動は終焉した（第 7 図）。
- 註 4 観応元（1352）年から文和元（1352）年におきた室町幕府の内紛を観応の擾乱と言う。創立期の室町幕府の権力構造は足利尊氏・直義兄弟による二頭政治の形態をとっていた（尊氏は恩賞給与・守護職任免等の主従的支配権、直義は所領裁判権・安堵権を中核とする統治的支配権を司っていた）。だが、この権限分割は尊氏の執事・高師直と直義とが確執することで矛盾が表面化し、全国的抗争へと発展。各派への帰属が幕府諸将や諸国国人の利害関係ともなり複雑化した。

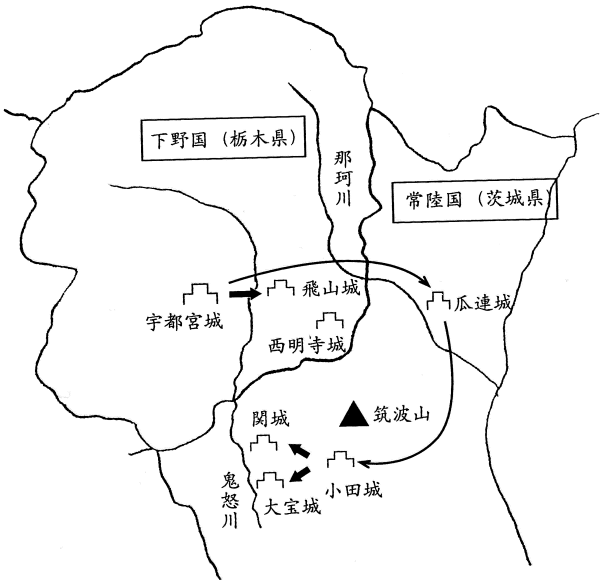
- 註5 宇都宮成綱による芳賀高勝「生害」は芳賀氏の反発を招き、宇都宮氏内部を二分する内訌に発展する（古河公方・足利高基をして、「宇都宮錯乱」と言わしめた）。しかし「宇都宮錯乱」の背景には古河公方家（足利高基・晴氏と小弓公方・足利義明。第7図）の内紛がからむことから、足利高基方の宇都宮氏有利に事態は収束した（永正11〔1545〕年）。なお、この後、18代・忠綱（成綱の子）は芳賀氏に叔父・興綱を入嗣させ、塩谷孝綱・武茂兼綱（両者とも宇都宮一族からの入嗣）ら近親者体制を目指した（荒川1997。p 177～179）。
- 註6 宇都宮興綱（足利晴氏方）と芳賀高経（足利高基方）の内訌の背景に、再燃した古河公方家（足利高基と晴氏）の抗争が晴氏優位の内に「一睦」、晴氏が古河公方の座に着いたこと、ならびに宇都宮氏内部での芳賀氏権力の伸長を興綱が疎んだことが指摘されている（荒川1997。p 15～17）。
- 註7 小田原北条氏による関宿城落城（梁田氏居城〔天正2・1574年〕）、祇園城落城（小山氏居城〔天正4・1576年〕）、ならびに下野の壬生氏・皆川氏、常陸の土岐氏らの北条氏同心は、下野・下総・常陸の諸領主に動揺を与えた（第7図）。そこで北条氏に対抗すべく佐竹・宇都宮・結城の諸氏は姻戚関係を結び反北条氏の軍事同盟を成立させた。しかし豊臣秀吉による全国平定が進む天正18〔1590〕年、結城晴朝は羽柴秀康（徳川家康次男。羽柴〔豊臣〕家養子）を結城氏継嗣として迎え、晴朝の養子朝勝は生家・宇都宮氏に戻らされている。なお、秀康の結城氏入嗣は、晴朝の一方面的な要求ではなく、徳川氏の関東転封に伴う豊臣・徳川・結城各氏の思惑が複雑にからんだ政治情勢の所産と推定されている（市村1983）。
- 註8 慶長2〔1597〕年、宇都宮氏は石高隠匿の罪によって改易が命ぜられ、その後に会津の蒲生秀行が入った（会津には越後の上杉景勝が移り、越後には越前の堀秀治等が入部している）。しかも、これらは一大名の動向ではなく豊臣政権における東国・奥羽支配の転換点、かつ石田三成・増田長盛派と徳川家康・前田利家派との対立の一画期であり、「ここに関ヶ原合戦に際しての基本的勢力配置が出現した」のである（市村1983。p50）
- 註9 大内庄は芳賀郡の荘園（現・真岡市を中心に小貝川を東限、五行川を西限とする地域）で、鎌倉時代初期の領有関係は本家が五辻斎院、預所が吉田経房であった。立荘主体や地頭についての詳細は不明であるが、幕府御家人芳賀氏の関与が推測される（阿部・佐藤編1997。p451）。
- 他方、八木岡庄は現・真岡市八木岡付近と推定される。室町院領で造内裏役のことや（承久2〔1220〕年頃の文書）、昭慶門院目録（嘉元4〔1306〕年）に荘名がみれる（室町院とは後堀河天皇皇女・暉子内親王、昭慶門院とは龜山法皇の皇女を示し、代々皇室領として継承されることが知られている。同。p451）。八木岡氏の祖は芳賀高俊二男・高房で「領同郡八木岡」と記されていることから、南北朝期頃から八木岡荘を領していたと思われる。また八木岡高房の子・高政においては「実ハ小栗孫四郎平重宗ノ次男ナリ」の注記があり（『下野國志』）、隣接する中村荘地頭・小栗氏との関係も深そうである（真岡市1987）
- 註10 中村庄は芳賀郡の荘園で（現・真岡市中村を中心とした地域）摂関家領。地頭は南北朝期・室町期を通して小栗氏であったと思われる。小栗氏は常陸國小栗御厨を本貫地とする領主で、中村荘と隣接する八木岡荘領主・八木岡氏と姻戚関係を結び中村荘一帯に勢力を伸ばした（建武2〔1335〕年、南接する長沼荘の用水を違乱し、長沼秀行と相論している）。なお小栗氏滅亡後（享徳の乱のおり）、宇都宮・芳賀氏により支配された。荘内の郷名としては、下中里、中里、下青沼などが散見し（阿部・佐藤編1997。p449）、在地有力者の城館である中村城跡が現存している。なお中村城は中村朝宗が保元元〔1156〕年に築城したと伝えられているが、朝宗が芳賀郡中村庄に住した確証はない（藤原山蔭の子孫・実宗が常陸國伊佐庄中村に住して伊佐または中村を称している。朝宗はそれより五代目と伝える）。
- 註11 寺の縁起によれば、関東公方・足利基氏の発願によって暦応年間〔1338～41〕に、現在地の北東約2kmに建てられたものが（開山は京都・醍醐寺三宝院の賢俊僧正）、天文年間〔1532～54〕に現在地に移されたと伝えられている。おそらくは、中村城廃城の後にこの地に移されたものであろう。なお現・遍照寺近辺から14世紀中頃の中世瓦が多数採集されており、「瓦を含めた建物の移転」が想定されている（杉山・小筆・大澤2002。p 8）。なお本寺は、足利氏の祈願寺であったことから古河公方足利成氏・政氏の発給文書や、奥州伊達氏・下総結城氏から同寺宛て書状等が『遍照寺文書』として残っている。

II 遺跡の立地と環境

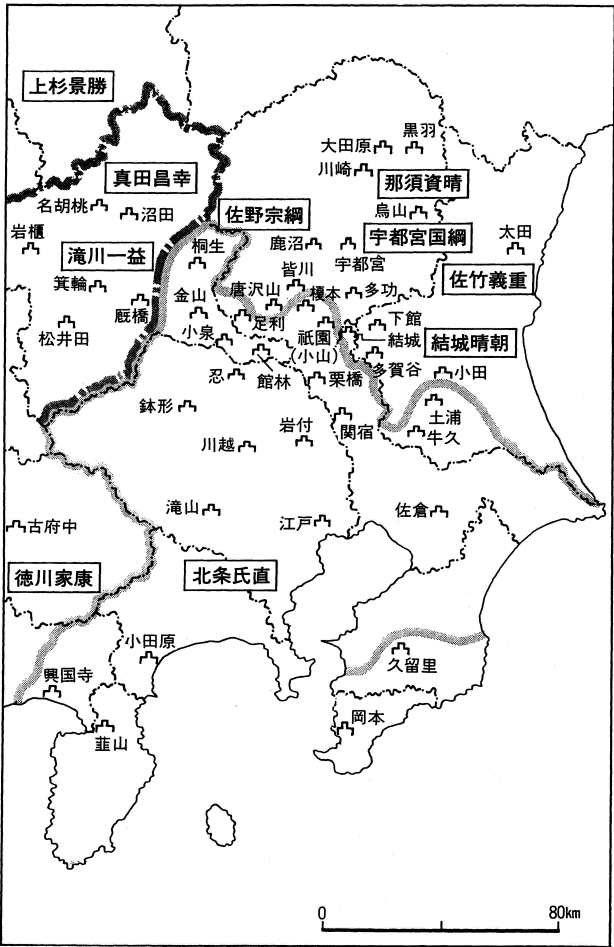
- 註 12 白鳳4年（私年号の一つ。白雉〔650～654年〕の別称、美称とする説がある）の創立とも、源頼義・義家父子による前九年の役〔1051～1062〕の際の勧請とも伝わるが定かではない。確実なところでは建久4〔1193〕年、源頼朝による神田三十三町の寄進がある。また奥州伊達氏の祖・中村朝宗は当地の領主と伝えられており（『伊達家譜』）、本社は伊達家守護神として代々仙台藩主による奉納・社殿造改築が行われている。加えて伊達氏は寛永2〔1625〕年に社殿修復に備えて本殿周辺90m四方と、全長約570mの参道脇約10mに杉や檜などを植えており（県指定天然記念物「中村八幡宮の社叢」）、その折の書付も現存している。
- 註 13 峰高城は、宇都宮広綱に仕えた豊田細斎が天正年間〔1573～92〕に築いた城で、宇都宮氏改易〔1597〕により廃城になったと伝えられている。第2次世界大戦直後の水田化によって削平されてしまい、現在城の痕跡は地表に認められない（豊田氏墓所の中世五輪塔と土塁の一部と考えられる地膨れが残る程度）。一方、峰高城跡推定範囲の南側に隣接する峰高前遺跡で検出されたSD-600・101は、下限年代が15世紀末～16世紀後半で、峰高城が機能していた天正年間も含まれている」ため「峰高城跡に関わる遺構」の可能性も考えられる（合田2007。p 481）。
- 註 14 長沼氏は、小山政光の二男・宗政が長沼庄に住したことに始まる（長沼氏は小山・結城両氏とともに小山三家の一つで）。宗政は治承・寿永の乱〔1179～85〕、承久の乱〔1221〕などで武勇を示し、恩賞として摂津国守護・淡路国守護などに任じられている。宗政の後も子孫は各地の守護職・地頭職に任じられ、長沼庄をはじめ七か国10余箇所に及んでいる。しかし13世紀後半以降、勢力は衰え、永享年間〔1429～41〕頃、本家・小山氏の請いもあり本拠を皆川庄（栃木市）に移している（この時、姓を皆川に改めている）。なお12代・成宗のとき、享徳の乱（6代将軍・足利義教の子政知〔堀越公方〕ならびに関東管領・上杉氏と、古河公方・足利成氏の争い〔1454～82〕）に巻き込まれ、古河公方方についた成宗は上杉氏との合戦に敗戦。文明3〔1471〕年に長沼城は廃城になったと言う（以後、この地は下妻領主・多賀谷氏、下館領主・水谷氏の所領となった）。
- 註 15 寺伝によれば宗光寺は慈覚大師円仁の草創、のち長沼宗政が源頼朝の本願によって新御堂を建立したと言う。また、7代・宗光が長沼氏の菩提寺として宗光寺を再興したというが、「問題となるのは宗光寺が回字形の深い堀で囲まれていることである。つまり初代・宗政が「元暦元年に長沼城を築いたというのは居館（長沼館）であり、7代宗光のとき、長沼城を新たに築いて長沼館から移り」、館跡に「菩提寺として宗光寺を建立した」可能性が考えられそうである（塙2006。p168～169）。
- 註 16 水谷勝氏が、下総結城氏に仕え下館城を築いたのが水谷氏の始まりとされる。はじめ常陸小田氏と抗争していたが、5代・治持の頃から宇都宮氏・芳賀氏に対抗し下野への勢力拡大をはかるようになった。6代・正村（蟠龍斎）と7代・勝俊兄弟の時代が全盛期で、水谷氏は結城氏と共に小田原北条氏・越後上杉氏に同心、離反を繰り返して関東争乱を生き抜いた。加えて、若神子の合戦（徳川氏・北条氏の合戦〔天正10・1582年〕）の頃から徳川家康に誼を通じ、羽柴秀康（家康次男）の結城氏継嗣（天正18〔1590〕年）、関ヶ原合戦の後ろ備え（会津上杉氏・常陸佐竹氏の封じ込め〔慶長4・1600年〕）などで与力している。8代・勝隆の時（寛永16〔1639〕年）、4万石余から5万3千石に増、備中成羽（備中松山）へ転封となった。



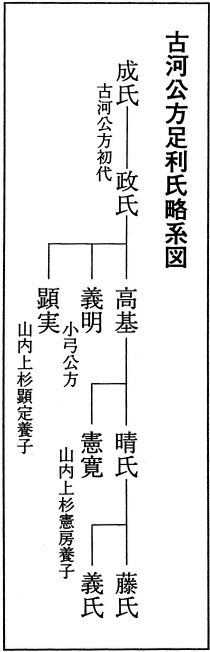
常陸合戦①—下野攻防戦関連の城（宇都宮市教委 2007）



常陸合戦②—北朝方の反撃（宇都宮市教委 2007）



天正 10 [1582] 年の関東勢力図（斎藤 2005）



古河公方家略系図
（山口 2004）

Ⅱ 遺跡の立地と環境

〔参考文献〕

- 阿部 猛・佐藤和彦編 1997『日本荘園大辞典』東京堂出版
- 荒井庸夫 1979『ふるさと文庫・茨城 北畠親房と常陸－『神皇正統記』を生んだ小田－』崙書房
- 荒川善夫 1997『戦国期北関東の地域権力』岩田書院
- 石島吉次 1984『ふるさと文庫 結城氏十八代』筑波書林
- 市村高男 1983「近世成立期東国社会の動向－結城朝勝の動向を中心として－」『栃木県史研究』第24号 栃木県史編さん委員会
- 市村高男 1988「Ⅲ 城跡の現況と歴史 4 文献史料から見た飛山城の歴史と性格」『史跡飛山城跡保存整備基本計画』宇都宮市教育委員会
- 茨城城郭研究会 2006『図説茨城の城郭』国書刊行会
- 宇都宮市教育委員会事務局文化課 2007『宇都宮城のあゆみ』
- 川辺久子 2002『関東公方足利氏四代－基氏・氏満・満兼・持氏－』吉川弘文館
- 合田恵美子 2007『峰高前遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 斎藤慎一 2005『戦国時代の終焉－「北条の夢」と秀吉の天下統一－』中公新書
- (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2002『埋蔵文化財センター年報』第12号(平成14年度版)
- (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2003「M北関東自動車道関連遺跡 ⑩下陰遺跡」『埋蔵文化財センター年報』第13号(平成15年度版)
- (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2006「Ⅰ－⑧下陰遺跡」『埋蔵文化財センター年報』第16号(平成18年度版)
- (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2007「19下陰遺跡」『埋蔵文化財センター年報』第17号(平成19年度版)
- 七宮達三 2005『下野小山・結城一族』新人物往来社
- 七宮達三 2006『下野・宇都宮一族』新人物往来社
- 野村 亨 2004『常陸小田氏の盛衰』筑波書林
- 杉山正雄・小筆一成・大澤伸啓 2002「真岡市中村遍照寺塔跡出土の中世瓦について」『唐澤考古』第21号 唐澤考古会
- 立石尚之編 1997『古河公方展－古河足利氏五代の興亡－』茨城県古河市立博物館
- 月井 剛 2000「中世後期における武茂氏の動向」『歴史と文化』第9号 栃木県歴史文化研究会
- 栃木県歴史人物事典編纂委員会編 1995『栃木県歴史人物事典』下野新聞社
- 徳田浩淳再校訂 1989『下野國誌』(原著は河野守弘。嘉永元〔1848〕年。初版は佐藤行哉校訂。1968年)下野新聞社
- 橋本澄朗・津久井龍司編 1982『栃木県の中世城館跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 塙 静夫 2006『とちぎの古城を歩く』下野新聞社
- 馬頭町 1990『馬頭町史』
- 平井 聖・村井益男・村田修三編 1979『日本城郭大系』第4巻 茨城・栃木・群馬 新人物往来社
- 福田三男 2007『宇都宮城物語』下野新聞社
- 真岡市 1987『真岡市史』第6巻 原始古代中世通史編
- 山口 博 2004『小田原ライブラリー 13 北条氏康と東国の戦国世界』夢工房
- 結城市 1980『結城市史』第4巻 古代中世通史編

Ⅲ 調査成果

1. 基本層序

Ⅵ－2区における基本層序は西区の大部分が攪乱であったことから、東区のみで確認調査をおこなった。調査地点はL-44グリッドとP・Q-47グリッドの調査区西壁に沿って設定し（L44トレンチ/P・Q47トレンチ）、深掘りを入れて調査にあった（第2図）。層位は大きくⅠ～Ⅴ層に分かれ、各層で数層に細分される。

Ⅰ層は表土部分で、現代の整地・攪乱層である。Ⅰ－1層は碎石を含む層で、調査区西側に道路建設に伴う資材置場が所在することから、その整地層であり、2層はそれ以前の攪乱である。Ⅱ層及びⅢ－1層は水田層と思われる。殊に、Ⅱ－1層とⅢ－1層には植痕に酸化鉄が沈殿したグライ化の粘質土で、水田耕作層と思われる。ただし、Ⅱ層には糸状の化学繊維等が混入することから、1980年代に完了した土地改良事業以降の水田層と考えられる。Ⅲ－2層はⅢ－1層に土質が近似する土層である。検出遺構の覆土は土色や混入物が本層に似るものが多く、本層位からの遺構掘り込みが推定される。Ⅳ層は黄褐色砂層であり、河原石以外の混入物が認められない自然堆積層である。河原石の混入や砂粒の酸化の度合等から3層に分層した。Ⅴ層は川原石を主体とする砂礫層であり、旧氾濫原の層位と思われる。なお、Ⅴ層下は深掘りA地点で確認された灰色系の砂層（自然堆積層）となるものと思われる（6頁写真参照・深掘りA地点）が、確認は本地点のみであるため、基本層序はⅤ層までに留めておきたい。

次に今回の遺構確認面について記す。調査遺構の分布状況は、概ねM～NグリッドとOグリッド列以南の地点にはほぼ限定される。それぞれの遺構確認面における層位はⅢ－2層とⅤ層であるが、SD-5001の土層断面などから、Oグリッド列以南の地点においては土地改良事業によって、Ⅲ・Ⅳ層が消滅・攪乱された可能性が考えられる。また、Ⅴ層においては、P・Qグリッドの基本層序調査とOグリッド列以南の確認面との間で高低差が生じ、遺構空白域に向かって落ち込んでいる。流路や谷地形が想定される。この落ち込み部分にはⅣ層の堆積が確認されており、流路や谷地形が想定される（この落ち込み部分はⅣ層が堆積する）。遺構空白域における堆積層は、礫（川原石）や粘質土を含む、Ⅳ層再堆積層（6頁写真参照・深掘りB地点）である。なお、流路・谷地形の埋没時期については不明である。

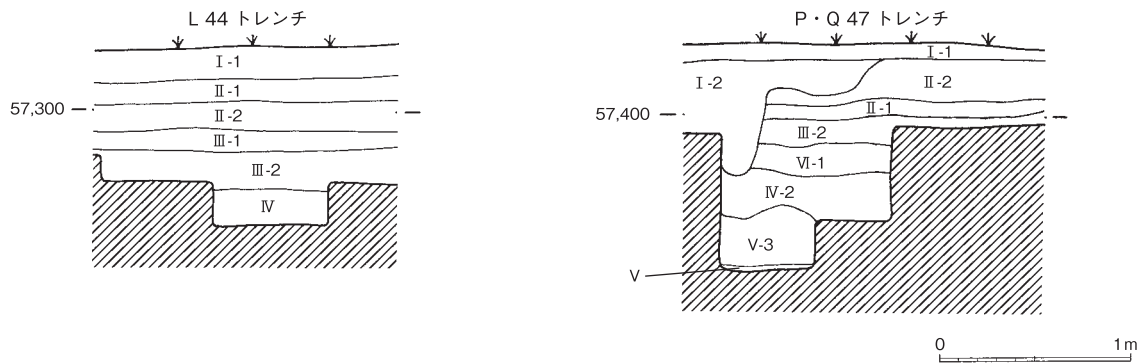


基本層序堆積状況（L-44 トレンチ）（北東から）



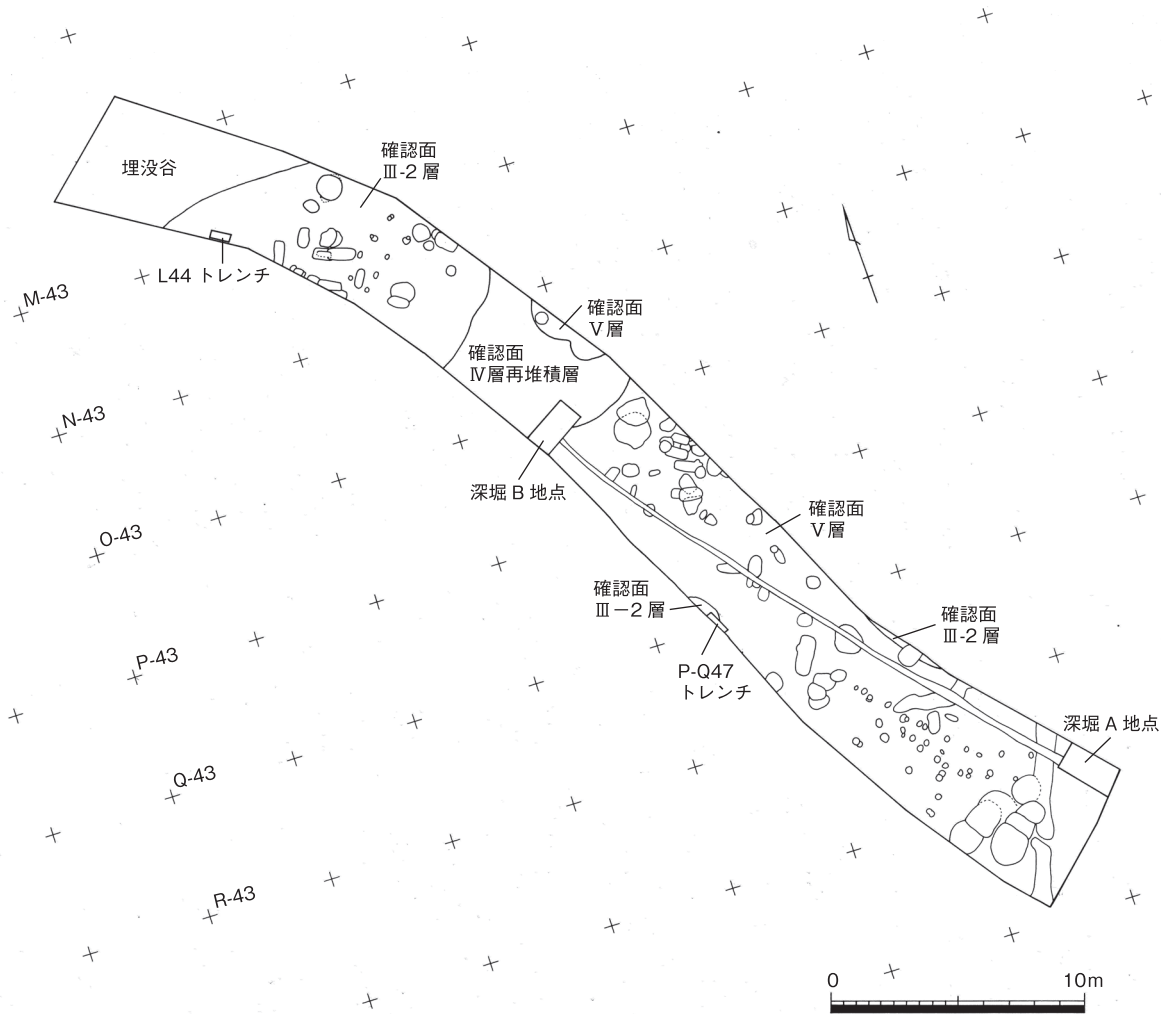
基本層序堆積状況（P・Q-47 トレンチ）（北東から）

Ⅲ 調査成果



第 9 図 基本層序堆積状況図 (S=1/40)

- 基本層序
- I-1 黒褐色土。表土及び碎石混入土。しまりやや富。粘性やや弱。
 - I-2 暗褐色土。礫 (5mm～5cm程)・砂粒子を混入する。攪乱土。しまりやや緩。粘性やや弱。
 - II-1 青灰色土。暗褐色土・灰色粘土の混合土。酸化鉄少量混入のグライ化粘質土。水田層と思われる。しまりやや富。粘性やや強。
 - II-2 暗灰褐色土。酸化鉄粒子・白色粒子少量。しまりやや富。粘性やや強。
 - III-1 暗青褐色土。酸化鉄粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入のグライ化粘質土。水田層と思われる。しまりやや富。粘性やや強。
 - III-2 暗灰褐色土。砂粒子少量入する粘質土。白色粒子・酸化鉄粒子、橙色粒子、砂粒子少量、混入のグライ化粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。
 - IV-1 褐色砂。河原石 (5mm～1cm程) 少量混入。III-2層少量流入。しまり富。粘性弱。
 - IV-2 褐色砂。III-2層の流入はなく、単砂層に近い。しまり富。粘性弱。
 - IV-3 褐色砂。IV-2層に似る。酸化鉄粒子やや少量混入。しまり富。粘性弱。
 - V 暗灰色土層。河原石 (3～5cm程)・砂粒子を主体とする砂礫層。暗い灰色のシルト質土少量流入する。しまりやや富。粘性弱。



第 10 図 遺構確認面における基本層序分布図 (S=1/600)

2. 調査の概要

[検出遺構]

Ⅵ-2 区においては、検出遺構は総数 169 基を数える。遺構種別はピット列（SA）3 列、溝跡（SD）3 条、井戸跡（SE）11 基、土坑・ピット群は（SK）151 基（土坑 64 基、ピット 87 基）、不明遺構（SX）1 基である。このうち、縄文時代の遺構は SK-5015 と SX-5082 であり、他は中世遺構と思われる。

[遺物出土傾向]

縄文時代中期～後期中葉にかけての土器群が出土した。ほとんどが中世遺構への混入品、または調査区一括遺物であるが、SK-5015・5082 は縄文時代遺構と考えられた。（両遺構からの土器出土位置は平面図状で▲を用いて図示した）。

古代遺物は、10 世紀代に否定できる土師器破片が少量出土した。すべて中世遺構への混入品、または調査区一括遺物である。SE-5064・5086 周辺から出土する傾向が窺えた。

中世遺物は、土師質土器・内耳土器・瓦質土器が大半以上をしめるが、陶磁器類も少量出土している。溝跡・井戸跡の覆土上位（とりわけ人為堆積層）より出土する傾向にあり、廃絶遺構の埋め戻し時の一括廃棄品と認定できよう。なお SK-5027 からは輪宝墨書土器が出土しており地鎮め関係遺構と考えられる（古代・中世の遺物出土位置は平面頭上で●を用いて図示した）。



Ⅵ-2（東）区全景（上空から）

3. 主な検出遺構

SD-5001（溝跡 第11・12・13図 図版3）

位置 R・S-49 グリッド。**規模・形状** 長軸 8.55 m以上、幅 1.45 m、深さ 0.49 m。北東部分は調査区外へと延びる。立ち上がりの傾斜は東壁より西壁が緩やかである。底面は比較的平坦で、直線もしくはやや外反を描いて立ち上がる。断面形状は逆台形である。**覆土** 3層に分層した。1層は人為堆積層。2・3層は自然堆積層と思われる。人為堆積層と自然堆積層との堆積状況が不自然であることから、溝の掘り返しがなされた可能性がある。**出土遺物** 自然堆積層（2・3層）からは土師質土器（1）、人為堆積層（1層）からは瓦質土器すり鉢（67）・獣脚（75）、鎚連弁文青磁（76）・折縁皿（77）、砥石等の石製品（82・87）等が出土。

SD-5002（溝跡 第11・12図 図版3）

位置 S-49 グリッド。**規模・形状** 長軸 4.73m 以上、幅 1.32 m、深さ 0.51m。北東部分では鍵状に折れ、南西部分は調査区外へと延びる。立ち上がりの傾斜は東壁より西壁が緩やかである。底面は若干の丸みを帯び、東壁では直線及び内湾、西壁では直線及び若干外反を描く。断面形状は概ね逆台形である。**覆土** 3層に分層した。1・2層は人為堆積層、3層は自然堆積層と思われる。人為堆積層と自然堆積層との境部分で段状になることから、溝の掘り返しがなされた可能性がある。**出土遺物** 人為堆積層（1・2）からは、土師質土器（2・3）、内耳土器（54）、土器片口鉢（66）、瓦質土器すり鉢（67）・甕（72）等が出土。なお、すり鉢（67）についてはSD-5001 出土のすり鉢との遺構間接合が認められる。

SE-5031（井戸跡 第11・12図 図版4）

位置 R・S-49 グリッド。**規模・形状** 長軸 2.27 m、短軸 2.25 m、深さ 1.35 m。形状は円形を呈する。

覆土 4層に分層した。1～3層は人為堆積層、4層は自然堆積層と思われる。**出土遺物** 出土遺物の多くは人為堆積層（1～3層）からで、土師質土器（16）等が出土。

SE-5032（井戸跡 第11・12・13図 図版4）

位置 S-49 グリッド。**規模・形状** 長軸 1.88 m、短軸 1.58m 以上、深さ 1.39 m。形状は楕円形状を呈する。

覆土 4層に分層した。1～3層は人為堆積層、4層は自然堆積層と思われる。**出土遺物** 出土遺物の多くは人為堆積層からで、土師質土器（17）、砥石（84）、石臼（90）等が出土。

【備考】 SD-5001・5002 とは遺構間接合遺物や主軸の傾き、遺構の形状から、同時期の区画溝と思われる。

【新旧関係】 （旧）SD-5001 → （新）SE-5031

└──────────→ SE-5032

※ SE-5031・5032 と周辺の井戸跡との新旧関係は不明である。

SE-5033（井戸跡 第11・12・13図 図版4）

位置 S-49 グリッド。**規模・形状** 長軸 2.30 m、短軸 1.11 m以上、深さ 1.58 m。形状は楕円形状を呈する。

覆土 時間の制約上、図面作成はおこなえなかったが、最下層の自然堆積層以外は人為的堆積層と思われる。

出土遺物 自然堆積層（最下層）からは内耳土器（55）、瓦質土器壺（73）、人為堆積層（最下層より上層）からは土師質土器（18）、砥石（85）等が出土。出土遺物の多くは人為堆積層からである。

SE-5034（井戸跡 第11・12・13図 図版4）

位置 R・S-48・49 グリッド。**規模・形状** 長軸 2.62 m以上、短軸 2.32 m、深さ 1.45 m。形状は楕円形状を呈する。**覆土** 5層に分層した。1～2層は人為堆積層、3～6層は自然堆積層と思われる。**出土遺物**

出土遺物の多くは人為堆積層（1～2層）からで、土師質土器（19～22）、内耳土器（56・57）、瓦質土器すり鉢（68）、志野小皿（81）、石臼（88・89）等が出土。

SE-5035（井戸跡 第11・12・13図 図版4）

位置 S-48グリッド。**規模・形状** 長軸1.90m以上、短軸2.40m、深さ1.54m。形状は楕円形状を呈する。

覆土 4層に分層した。1層は人為的堆積層で、2～4層は自然堆積層と思われる。**出土遺物** 自然堆積層（2～4層）からは内耳土器（59）、人為堆積層（1層）からは土師質土器（23）、内耳土器（58）が出土。出土遺物の多くは人為的堆積層からである。

SE-5036（井戸跡 第11・12・13図 図版4）

位置 S-49グリッド。**規模・形状** 長軸2.98m以上、短軸2.79m、深さ1.09m。形状は楕円形状を呈する。

覆土 4層に分層した。1・2層は人為的堆積層で、3・4層は自然堆積層と思われる。ただし3層と4層では堆積状況が不自然である（4層は隣り合うSE-5033の覆土の可能性も考えられるが、判然としない）。**出土遺物** 人為堆積層（1・2層）からは瓦質土器すり鉢（69）、自然堆積層の最下層（4層）からは内耳土器（60・61）が出土。出土遺物の多くは人為堆積層からである。

SE-5088（井戸跡 第11・12図 図版4）

位置 R・S-49グリッド。**規模・形状** 本遺構は時間的制約のため、断ち割りにて調査をおこなった。長軸1.67m以上、短軸1.16m以上、深さ1.12m。形状は楕円形状を呈する。**覆土** 5層に分層した。1～2層は人為的堆積層で、3～5層は自然堆積層と思われる。5層においては大きめの砂礫（基本層V層の河原石に近似）が多く含まれることから、V層の2次堆積の可能性も考えられる。**出土遺物** なし。

【新旧関係】（旧）SE-5035・5088→（新）SE-5034

※SD-5033と周辺の溝跡や井戸跡との新旧関係は不明である。

SA-5007（Pit列 第14・15図 図版5）

位置 Q-48、R-48・49グリッド。**規模・形状** ピット列の長さは18.40mにおよぶ。ピット単体の大きさは、長軸0.30～0.64m、短軸0.28～0.47m、深さ0.07～0.38m。形状は円形もしくは楕円形を呈する。**覆土** 単層のものが多く、複層に分層したものは少ない。色調には若干のばらつきがみられるが、混入物は比較的同一である。**出土遺物** P10から内耳土器小片（非実測）が出土。

SA-5008（Pit列 第14・15図 図版5）

位置 R-48・49グリッド。**規模・形状** ピット列の長さは12.80mにおよぶ。ピット単体の大きさは、長軸0.32～0.68m、短軸0.21～0.53m、深さ0.04～0.40m。円形もしくは楕円形を呈する。**覆土** 単層のものが多く、複層に分層したものは少ない。色調には若干のばらつきがみられるが、混入物は比較的同一である。**出土遺物** P3aとP5から土師質土器が出土し、掲載にはP3a出土の土師質土器（6）を提示した。

SA-5009（Pit列 第14・16図 図版5）

位置 R-48グリッド。**規模・形状** ピット列は直径8m程の半円形状を呈する。ピット単体の大きさは、長軸0.43～0.70m、短軸0.28～0.69m、深さ0.16～0.41mを測り、円形もしくは楕円形を呈する。**覆土** 単層のものが多く、複層に分層したものは少ない。色調には若干のばらつきがみられるが、混入物は比較的同一である。**出土遺物** P2から内耳土器、P3aから土師質土器（いずれも非実測）が出土。

【備考】ピット列は、発掘調査においての所見に基づくものであり、調査区の限られた範囲においての推定である。また周辺ピットにおける覆土の色調・混入物も似ていることから、別の配列も推察される。一案を

Ⅲ 調査成果

挙げれば、SA-5008 においては SK-5101・SK-5102・SA-5008P4（以下 SA-5008 列に同）や SA-5009P8・同 P7・SA-5008P8a・SA-5007P7・SK-5106 と続くピット列。SK-5108a・b・c・SK-5014・SA-5008P5・SK-5110・SK-5102 と続き、SE-5034 等の井戸群に攪乱される掘立柱建物跡等が考えらよう。

SD-5004（溝跡 第 14・16 図 図版 5）

位置 Q・R-48・49 グリッド。**規模・形状** 長軸 6.36 m 以上、幅 1.18 m、深さ 0.30 m。若干蛇行しつつ調査区外へと延びる。壁は直線的傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。断面形状は逆台形である。**覆土** 2 層に分層した。いずれも自然堆積層と思われる。ただし 2 層においては溝幅が極端に広がる箇所 positioning、別遺構の覆土の可能性もぬぐえない。**出土遺物** 土師質土器（4）や内耳土器破片が数点出土。

SK-5005（土坑 第 14・16 図 図版 5）

位置 Q-48 グリッド。**規模・形状** 長軸 1.67 m 以上、短軸 1.42 m、深さ 1.01 m。形状は楕円形状を呈する。**覆土** 10 層に分層した。いずれも人為的堆積層と思われる。なお 10 層より下位は、安全確保のため調査を断念した。**出土遺物** 比較的上層で土師質土器（5）や少量の内耳土器破片等が出土。
【備考】断面形状や堆積状況から井戸跡の可能性も考えられる。

SK-5010（土坑 第 17・18 図 図版 5）

位置 Q-48 グリッド。**規模・形状** 長軸 1.23 m、短軸 1.03 m、深さ 0.38 m。形状は楕円形を呈する。**覆土** 単層で、自然堆積層と思われる。**出土遺物** 土師質土器（7）、内耳土器（50・51）が出土。
【備考】SK-5023・29・37・39・40・41・47 の**規模・形状**は本遺構に似ており、長軸についてもほぼ並行・直行である。検出状態の良好であった SK-5029・40 については土層断面図を図示した。

SK-5014（pit 第 14・16 図 図版 5）

位置 R-48 グリッド。**規模・形状** 長軸 0.59 m、短軸 0.55 m、深さ 0.33 m。形状は楕円形を呈する。**覆土** 2 層に分層した。いずれも自然堆積層と思われる。**出土遺物** 土師質土器（8・9）、砥石（83）が出土。

SK-5018（土坑 第 17・18 図 図版 5）

位置 Q-48 グリッド。**規模・形状** 長軸 1.25 m、短軸 0.90 m、深さ 0.34 m。形状は楕円形を呈する。**覆土** 2 層に分層した。いずれも自然堆積層と思われる。**出土遺物** 下記、備考参照。

SK-5019（土坑 第 17・18 図 図版 5）

位置 Q-48 グリッド。**規模・形状** 完掘平面及び土層断面から、長軸 1.26 m、短軸 0.62 m、深さ 0.17 m を測る長楕円形と推定される。**覆土** 単層で、自然堆積層と思われる。**出土遺物** 下記、備考参照。

SK-5020（土坑 第 17・18 図 図版 5）

位置 Q-48 グリッド。**規模・形状** 長軸 1.78 m、短軸 1.32 m、深さ 0.26 m。形状は不整長方形を呈する。**覆土** 2 層に分層した。いずれも自然堆積層と思われる。**出土遺物** 下記、備考参照。
【備考】SK-5018～5020 の覆土からは、縄文時代中期～後期の土器片数点が出土した。しかしながら、覆土が他の中世遺構と似ることや、内耳土器片（非実測）が出土していることから、中世遺構と判断した。

【新旧関係】（旧）SK-5018・SK-5020 →（新）SK-5019。

※ SK-5016 と SK-5020 との新旧関係は不明である。

SK-5021 (土坑 第17・18図 図版6)

位置 Q-48 グリッド。 **規模・形状** 長軸 2.36 m、短軸 2.10 m、深さ 0.56 m。形状は不整楕円形を呈する。**覆土** 3層に分層した。2・3層は人為堆積層と思われる。1層は基本層序Ⅱ-2層の残土の可能性もある。

出土遺物 2・3層からは土師質土器(10)、志野小皿(80)他、数片の内耳土器等(非実測)が出土。

[備考] 本遺構における長軸の傾きはSK-5010等の長軸の傾きとは異なる。

SK-5025 (土坑 第17・18図 図版6)

位置 Q-48 グリッド。 **規模・形状** 長軸 3.17 m、短軸 1.30 m、深さ 0.33 m。形状は長方形を呈する。

覆土 2層に分層した。いずれも自然堆積層と思われる。 **出土遺物** 土師質土器(11)、内耳土器(52・53)や瓦質土器すり鉢片等(非実測)が出土。

SK-5026 (pit 第17・18図 図版6)

位置 Q-48 グリッド。 **規模・形状** 長軸 0.58 m、短軸 0.54 m、深さ 0.30 m。楕円形を呈する。 **覆土** 単層で、人為堆積層と思われる。 **出土遺物** なし。

[新旧関係] (旧) SK-5025 → (新) SK-5026。

※ SK-5025 と SK-5137 及び SK-5142 との新旧関係は不明。

SK-5028 (土坑 第17・18図 図版6)

位置 Q-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 1.02 m以上、短軸 1.48 m、深さ 0.99 m。形状は楕円形状を呈する。

覆土 3層である。いずれも自然堆積層と思われる。 **出土遺物** 土師質土器片(12)の他、数片の内耳土器、瓦質土器すり鉢、常滑窯産と思われる甕等(非実測)が出土。

[備考] 断面形状や堆積状況から井戸の可能性も考えられる。

SK-5044 (土坑 第17・18図 図版6)

位置 P-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 1.44 m以上、短軸 0.78 m以上、深さ 0.23 m。形状は長方形状を呈する。 **覆土** 単層で、自然堆積層と思われる。 **出土遺物** 土師質土器(24)が出土したが、隣接するSK-5120からの出土の可能性もある。この他、数片の内耳土器が出土。

SK-5120 (pit 第17・18図 図版6)

位置 P-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 0.41 m、短軸 0.40 m、深さ 0.40 m。平面形は円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 **出土遺物** なし。

SK-5121 (土坑 第17・18図 図版6)

位置 P-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 0.81 m、短軸 0.66 m、深さ 0.35 m。形状は楕円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 **出土遺物** なし。

SK-5122 (pit 第17・18図 図版6)

位置 P-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 0.56 m、短軸 0.54 m、深さ 0.33 m。形状は楕円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 **出土遺物** なし。

[新旧関係] (旧) SK-5044 → SK-5120 → (新) SK-5122。

※ SK-5123 との新旧関係については不明。

Ⅲ 調査成果

SE-5064 (井戸跡 第19・20図 図版6)

位置 O-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 2.53 m、短軸 2.27 m 以上、深さ 1.09 m。形状は不整楕円形を呈する。 **覆土** 3 層に分層した。いずれも自然堆積層と思われる。 **出土遺物** 覆土からは土師質土器 (29 ～ 32) 等が出土。少量の土師器破片 (39・41 ～ 44) も出土したが、混入品と思われる。

SE-5086 (井戸跡 第19・20図 図版6)

位置 O-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 2.90 m、短軸推定 2.83 m、深さ 1.25 m。形状は不整楕円形を呈する。 **覆土** 6 層に分層した。1 ～ 5 層は人為的堆積層、6 層は自然堆積層と思われる。 **出土遺物** 出土遺物の多くは人為堆積層 (1 ～ 5 層) からで、土師質土器 (25・26・33 ～ 35)、内耳土器 (62 ～ 65)、瓦質土器すり鉢 (70・71)、陶器碗類 (78) 等が出土。なお土師器破片 (45 ～ 47・49) は混入品と思われる。

[新旧関係] (旧) SE-5064 → (新) SE-5086

SK-5015 (土坑 第19・21図 図版7)

位置 O-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 1.76 m 以上、短軸 1.13 m 以上、深さ 0.48 m。完掘状況からは不整長方形形状を呈するが、出土遺物の散布状況からすると円形の可能性も考えられる。 **覆土** 3 層に分層した。1 層は後世の流入土の可能性があり、2・3 層の粘質土が実質的な覆土と思われる。いずれも自然堆積層と思われる。 **出土遺物** 縄文時代中期～後期にかけての土器破片 (8・11・13・14 等) が出土。

SK-5024 (土坑 第19・21図 図版7)

位置 O-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸推定 1.56 m、短軸 1.06 m、深さ 0.24 m。形状は不整長方形形状を呈する。 **覆土** 3 層に分層した。いずれも自然堆積層と思われる。 **出土遺物** なし。

SK-5027 (土坑 第19・21図 図版7)

位置 O・P-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 1.03 m 以上、短軸 1.30 m、深さ 0.47 m。形状は不整形を呈すると推定される。 **覆土** 2 層までを確認した。いずれも自然堆積層と思われるが、他の中世土坑に比較して、砂質の度合いが強い。 **出土遺物** 土坑南東壁付近より輪宝墨書土器 (13) が出土。なお輪宝墨書土器の背面からは古銭も一枚出土している。他に土師質土器小片 (非実測) が確認された。

SK-5046 (土坑 第19・21図 図版7)

位置 O-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 0.68 m 以上、短軸 0.79 m、深さ 0.14 m。形状は長方形形状を呈する。 **覆土** 単層で、自然堆積層と思われる。 **出土遺物** なし。

SK-5116 (pit 第19・21図 図版7)

位置 O-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 0.30 m、短軸 0.28 m、深さ 0.34 m。形状は円形を呈する。 **覆土** 単層で、自然堆積層と思われる。 **出土遺物** なし。

[備考] SK-5027 周辺からは土師質土器の出土が目立つ。このうち、2 点を図化した (13・14)。

[新旧関係] (旧) SK-5015 → SK-5024 → (新) SK-5116
SK-5027
SK-5046

SK-5054 (土坑 第19・21図 図版7)

位置 O-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 1.42 m 以上、短軸 0.82 m、深さ 0.13 m。形状は長方形を呈する。 **覆土** 単層で、自然堆積層と思われる。 **出土遺物** 砥石 (86) が出土。

SK-5055 (土坑 第19・21図 図版7)

位置 O-47 グリッドに位置。 **規模・形状** 長軸 1.50 m、短軸 0.68 m、深さ 0.12 m。形状は長方形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 **出土遺物** 数片の土師質土器が出土（非実測）。

SK-5056 (土坑 第19・21図 図版7)

位置 O-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 1.07 m、短軸推定 0.84 m、深さ 1.25 m。形状は不整円形を呈する。

覆土 3層に分層した。自然堆積層と思われる。 **出土遺物** なし。

SK-5057 (土坑 第19・21図 図版7)

位置 O-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 0.95 m、短軸 0.95 m、深さ 0.24 m。形状は円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 **出土遺物** なし。

SK-5058 (土坑 第19・21図 図版7)

位置 O-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 0.80 m、短軸推定 0.78 m、深さ 1.04 m。形状は円形を呈する。

覆土 4層に分層した。いずれも自然堆積層と思われる。 **出土遺物** なし。

SK-5130 (pit 第19・21図 図版7)

位置 O-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 0.38 m、短軸 0.38 m、深さ 0.26 m。形状は円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 **出土遺物** 土師質土器（36）が出土。

〔備考〕 SK-5056・5058 については断面形状から井戸跡の可能性も考えられる。

〔新旧関係〕 (旧) SK-5056 —————→ (新) SK-5057

SK-5058 —————→ SK-5055

SK-5130 —————→ SK-5054

SK-5059 (土坑 第19・21図 図版7)

位置 O-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 1.13 m以上、短軸 0.95 m、深さ 0.52 m。形状は不整楕円形状を呈する。 **覆土** 5層に分層した。いずれも自然堆積層と思われる。 **出土遺物** 2層から土師質土器（27）が出土。なお須恵質土器鉢類（74）は覆土一括遺物である。

SK-5061 (土坑 第19・21図 図版7)

位置 O-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 0.85 m以上、短軸 0.41 m、深さ 0.26 m。形状は長楕円形状を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 **出土遺物** 土師質土器（28）や内耳土器小片（非実測）が出土。

SK-5167 (pit 第19・21図 図版8)

位置 P-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 0.43 m、短軸 0.37 m、深さ 0.13 m。形状は円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 **出土遺物** 土師質土器（37・38）が出土。38については遺構確認面に口縁部が突出した状態での確認であった。

SK-5048 (土坑 第19・21図)

位置 P-47 グリッド。 **規模・形状** 長軸 0.62 m以上、短軸 0.26 m、深さ 0.14 m。形状は長楕円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 **出土遺物** なし。

Ⅲ 調査成果

SK-5168 (pit 第19・21図 図版8)

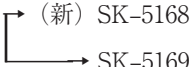
位置 P-47 グリッド。 規模・形状 長軸 0.30 m、短軸 0.26 m、深さ 0.26 m。形状は円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

SK-5169 (pit 第19・21図)

位置 P-47 グリッド。 規模・形状 長軸 0.40 m、短軸 0.40 m、深さ 0.30 m。形状は円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

[新旧関係] (旧) SK-5048 

SK-5170 (pit 第19・21図)

位置 O-47 グリッド。 規模・形状 長軸 0.50 m、短軸 0.46 m、深さ 0.34 m。形状は円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 出土遺物 土師質土器小片（非実測）が出土。

SE-5080 (井戸跡 第22・24図 図版8)

位置 L-45 グリッド。 規模・形状 長軸 2.04 m、短軸 2.00 m、深さ 1.22 m。形状は不整円形を呈する。

覆土 7層に分層した。2～3層は人為堆積層、1・4～7層は自然堆積層と思われる。 出土遺物 数片の土師質土器、内耳土器が出土（非実測）。混入した縄文土器の細片も若干認められた。

SE-5092 (井戸跡 第22・24図 図版8)

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸 1.53 m、短軸 1.20 m以上、深さ 0.93 m。形状は不整楕円形を呈する。

覆土 4層に分層した。2層は人為堆積層、3・4層は自然堆積層と思われる。ただし、1層については廃絶以降のピット等の痕跡である可能性も考えられる。 出土遺物 なし。

SK-5093 (土坑 第22・24図 図版8)

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸推定 1.62 m、短軸推定 1.39 m、深さ 0.16 m。形状は不整楕円形を呈する。 覆土 2層に分層した。いずれも自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

SK-5166 (pit 第22・24図 図版8)

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸 0.24 m、短軸 0.20 m、深さ 0.36 m。形状は円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

[新旧関係] (旧) SE-5092 → SK-5093 → (新) SK-5166

SK-5065 (土坑 第22・24図 図版9)

位置 N-46 グリッド。 規模・形状 長軸 0.94 m、短軸 0.94 m、深さ 0.61 m。形状は円形を呈する。

覆土 3層である。いずれも自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

[備考] 断面形状や土層堆積状況から井戸跡の可能性も考えられる。

SK-5066 (土坑 第22・24図 図版9)

位置 M-46 グリッド。 規模・形状 長軸 0.82 m、短軸 0.78 m、深さ 0.74 mを測り、形状は円形を呈する。

覆土 4層である。いずれも自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

〔備考〕 断面形状や土層堆積状況から井戸跡の可能性も考えられる。

SK-5067（土坑 第22・24図 図版9）

位置 M-46 グリッド。 規模・形状 長軸 1.88m、短軸 1.00 m以上、深さ 0.13 m。形状は長方形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

SK-5068（土坑 第22・24図 図版9）

位置 M-46 グリッド。 規模・形状 長軸 1.18 m、短軸 0.37 m以上、深さ 0.08 m。形状は楕円形状を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

SK-5172（pit 第22・24図 図版9）

位置 M-46 グリッド。 規模・形状 長軸 0.36 m、短軸 0.35 m、深さ 0.12 m。形状は円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

〔新旧関係〕（旧）SK-5172 → SK-5068 →（新）SK-5067。

※ SK-5171 に関わる新旧関係は不明。

SK-5072（土坑 第22・24図 図版9）

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸 1.92 m、短軸 1.23 m以上、深さ 0.46 m。形状は楕円形を呈する。

覆土 3層に分層した。1層は人為堆積層、2・3層は自然堆積層と思われる。 出土遺物 人為堆積層（1層）からは古瀬戸窯産皿類（79）の他、数片の土師質土器、内耳土器、瓦質土器すり鉢等（非実測）が出土。

SK-5073（土坑 第20・24図 図版9）

位置 M-45 グリッドに位置する。 規模・形状 長軸 1.70 m、短軸 0.90 m、深さ 0.29 mを測り、不整長円形を呈する。 覆土 単層で、人為的堆積層と想われる。 出土遺物 数片の土師質土器、内耳土器、瓦質土器すり鉢等（非実測）が出土。

〔新旧関係〕（旧）SK-5072 →（新）SK-5073

SK-5076（土坑 第22・24図 図版9）

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸 1.14 m以上、短軸 0.56 m以上、深さ 0.16 m。形状は長方形形状を呈する。 覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

SK-5077（土坑 第22・24図 図版9）

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸 1.77 m、短軸 0.74 m、深さ 0.31 m。形状は長方形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積と思われる。 出土遺物 数片の土師質土器、内耳土器（非実測）が出土。

SK-5078（土坑 第22・24図 図版9）

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸 1.00 m以上、短軸 0.53 m以上、深さ 0.24 m。方形もしくは長方形を呈するものと推定される。 覆土 単層で、自然堆積層と想われる。 出土遺物 陶器小片（非実測）が出土したが、生産地等の判別にはいたらなかった。

〔新旧関係〕（旧）SK-5076 →（新）SK-5077
SK-5078 →

Ⅲ 調査成果

SK-5075 (土坑 第22・24図 図版9)

位置 M-45 グリッド。規模・形状 長軸 2.26 m以上、短軸 1.04 m、深さ 0.42 m。形状は長方形を呈する。

覆土 単層で、人為堆積層と思われる。出土遺物 なし。

SK-5089 (土坑 第22・24図)

位置 M-45 グリッド。規模・形状 長軸 1.18 m、短軸 0.49 m、深さ 0.10 m。形状は長方形を呈する。

覆土 単層で、人為堆積層と思われる。出土遺物 内耳土器の小片が出土（非実測）。

SK-5090 (土坑 第22・24図 図版9)

位置 M-45 グリッド。規模・形状 長軸 2.25 m以上、短軸 0.90 m、深さ 0.36 m。形状は長方形を呈するものと推定される。覆土 単層で、人為堆積層と思われる。出土遺物 なし。

【新旧関係】 (旧) SK-5090 → SK-5075 → (新) SK-5089

SK-5081 (土坑 第22・24図 図版9)

位置 L-45 グリッド。規模・形状 長軸 1.23 m、短軸 0.98 m、深さ 1.06 m。形状は楕円形を呈する。

覆土 4層に分層した。1層は人為堆積層、2～4層は自然堆積層と思われる。1層は本遺構を壊すように堆積しており、廃絶の際には開口部の北・西側を崩しながら埋め戻したことも考えられる。出土遺物 なし。

【備考】断面形状や土層堆積状況から井戸跡の可能性も考えられる。

SK-5091 (土坑 第22・24図 図版9)

位置 M-45 グリッド。規模・形状 長軸 1.58 m、短軸 0.88 m、深さ 0.16 m。形状は長方形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。出土遺物 土師器 (40) が出土しているが、混入品と思われる。

SX-5082 (性格不明遺構 第22・23図)

位置 L・M-44 グリッド。規模・形状 本遺構は掘方の検出がなされず、遺物のみが出土した。遺物出土の範囲は 1.34m、1.05m の枠内であり、比較的狭範囲での出土である。確認高より深さ 0.12m 以下では遺物の出土が確認されなかった。遺物は押し潰された状態で確認された。覆土 覆土は確認されなかったが、基本層序Ⅲ-1層下位からⅢ-2層上位にかけての遺物出土である。出土遺物 縄文時代中期～後期の土器破片 (26～31等) が出土。

【備考】SX-5082の検出地点は遺構が分布する縁辺に位置し、予想される谷地形や流路の落ち際に当たる。遺物の出土状況や出土層序からするとⅢ-2層に混入の遺物が、後世の水田層 (Ⅲ-1) により押し潰されたものと思われる。

SK-5071a (Pit 第22・25図)

位置 M-46 グリッド。規模・形状 長軸 0.43 m、短軸 0.31 m、深さ 0.16 m。形状は楕円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。出土遺物 なし。

SK-5071b (Pit 第22・25図)

位置 M-46 グリッド。規模・形状 長軸 0.63 m、短軸 0.38 m以上、深さ 0.36 m。形状は不整円形を呈する。

覆土 3層に分層した。いずれも自然堆積層と思われる。1層は後世の杭等による攪乱と思われる。出土遺物 なし。

SK-5132 (Pit 第22・25図)

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸 0.43 m、短軸 0.36 m、深さ 0.29 m。形状は楕円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

SK-5133 (Pit 第22・25図)

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸 0.53 m、短軸 0.45 m、深さ 0.25 m。形状は楕円形を呈する。

覆土 2層に分層した。いずれも自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

出土遺物

SK-5134 (Pit 第22・25図)

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸 0.40 m、短軸 0.37 m、深さ 0.21 m。形状は円形を呈する。覆土

2層に分層した。いずれも自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

SK-5135 (Pit 第22・25図)

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸 0.36 m、短軸 0.36 m、深さ 0.20 m。形状は円形を呈する。

覆土 2層に分層した。いずれも自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

SK-5136 (Pit 第22・25図)

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸 0.55 m、短軸 0.41 m、深さ 0.32 m。形状は楕円形を呈する。

覆土 2層に分層した。いずれも自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

SK-5141a (Pit 第22・25図)

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸 0.31 m、短軸 0.30 m、深さ 0.26 m。形状は円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 出土遺物 数片の土師質土器、内耳土器が出土（非実測）。

SK-5141b (Pit 第22・25図)

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸 0.40 m以上、短軸 0.47 m、深さ 0.35 m。形状は楕円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

SK-5143a (Pit 第22・25図)

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸 0.37 m、短軸 0.33 m、深さ 0.29 m。形状は円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 出土遺物 なし。

SK-5143b (Pit 第22・25図)

位置 M-45 グリッド。 規模・形状 長軸 0.34 m、短軸 0.22 m以上、深さ 0.17 m。形状は円形を呈する。

覆土 単層で、自然堆積層と思われる。 出土遺物 数片の土師質土器、内耳土器が出土（非実測）。

[備考] L・M-45・46 グリッドにおけるピット群は、列状に並ぶ可能性がある。土層断面図を掲載したピットにおいてはSK-5171・5132・5133・5134とSK-5134・5141・5136・5135とが可能性を含んでいる。一方で、それらに交差する方向でのピット列も考えられる。SK-5171・5143・5144やSK-5132・5141・5152・5148、SK-5133・5136・5166・5151等である。これらのピットの覆土は1～2層の自然堆積層で、土層の色調に若干の差違は認められるものの、土質・混入物においては近似するものであった。

第2表 遺構一覧表(1)

遺 構	確認グリッド	規 模(m)			形 状	備 考
		長 軸	短 軸	深 さ		
SD - 5001	R・S-49	[8.55]	1.45	0.49	断面逆台形状	溝跡
SD - 5002	S-49	[4.73]	1.32	0.51	断面逆台形状	溝跡
S - 5003	-	-	-	-	-	欠番
SD - 5004	Q・R-48・49	[6.36]	1.18	0.30	断面逆台形状	溝跡
SK - 5005	Q-48	[1.67]	1.42	1.01	楕円形状	土坑
S - 5006	-	-	-	-	-	欠番
SA - 5007 P1	R-49	0.41	0.38	0.32	円形	Pit
SA - 5007 P2	R-49	0.48	0.36	0.16	楕円形	Pit
SA - 5007 P3	R-49	0.50	0.47	0.17	楕円形	Pit
SA - 5007 P4	R-49	0.42	0.36	0.22	楕円形	Pit
SA - 5007 P5	R-49	0.38	0.35	0.24	円形	Pit
SA - 5007 P6	R-48	0.50	0.47	0.38	円形	Pit
SA - 5007 P7	R-48	0.48	0.40	0.35	楕円形	Pit
SA - 5007 P8	R-48	0.56	0.40	0.30	楕円形	Pit
SA - 5007 P9 a	R-48	0.49	0.28	0.16	楕円形	Pit
SA - 5007 P9 b	R-48	0.64	[0.38]	0.34	楕円形	Pit
SA - 5007 P10	Q・R-48	0.55	0.42	0.36	楕円形	Pit
SA - 5007 P11 a	Q-48	0.48	0.38	0.24	楕円形	Pit
SA - 5007 P11 b	Q-48	0.47	[0.17]	[0.10]	不明	Pit
SA - 5007 P12 a	Q-48	0.50	0.37	0.32	楕円形	Pit
SA - 5007 P12 b	Q-48	[0.40]	[0.10]	[0.13]	不明	Pit
SA - 5007 P13	Q-48	0.30	0.30	0.07	円形	Pit
SA - 5008 P1	R-49	0.32	0.30	0.11	円形	Pit
SA - 5008 P2 a	R-49	0.54	0.46	0.17	楕円形	Pit
SA - 5008 P2 b	R-49	[0.33]	0.27	0.04	楕円形	Pit
SA - 5008 P3 a	R-49	0.45	0.43	0.20	円形	Pit
SA - 5008 P3 b	R-49	0.36	0.38	0.17	円形	Pit
SA - 5008 P4	R-48・49	0.55	0.40	0.25	楕円形	Pit
SA - 5008 P5	R-48	0.50	0.48	0.36	円形	Pit
SA - 5008 P6	R-48	0.53	0.53	0.27	円形	Pit
SA - 5008 P7	R-48	0.53	0.52	0.40	円形	Pit
SA - 5008 P8 a	R-48	0.40	0.21	0.17	楕円形	Pit
SA - 5008 P8 b	R-48	[0.45]	0.38	0.30	楕円形	Pit
SA - 5008 P9	R-48	0.68	0.50	0.39	楕円形	Pit
SA - 5009 P1 a	R-48	0.46	[0.35]	0.16	楕円形	Pit
SA - 5009 P1 b	R-48	0.43	[0.40]	0.24	円形	Pit
SA - 5009 P2	R-48	0.53	0.52	0.41	円形	Pit
SA - 5009 P3 a	R-48	0.53	0.50	0.25	円形	Pit
SA - 5009 P3 b	R-48	[0.43]	0.53	0.23	円形	Pit
SA - 5009 P4	R-48	0.45	0.28	0.18	楕円形	Pit
SA - 5009 P5	R-48	0.47	0.39	0.23	楕円形	Pit
SA - 5009 P6	R-48	0.47	0.42	0.22	楕円形	Pit
SA - 5009 P7	R-48	0.70	0.69	0.29	円形	Pit
SA - 5009 P8 a	R-48	0.62	0.53	0.27	楕円形	Pit
SA - 5009 P8 b	R-48	[0.52]	0.42	0.23	楕円形	Pit
SK - 5010	Q-48	1.23	1.03	0.38	楕円形	土坑。底面長方形状
SK - 5011	R-49	1.08	0.38	0.08	長楕円形	土坑

(推定) [残存] を示す

第3表 遺構一覧表（2）

遺 構	確認グリッド	規 模(m)			形 状	備 考
		長 軸	短 軸	深 さ		
SK - 5012	R-48	1.75	0.80	0.26	長方形	土坑
SK - 5013	P-48	1.22	[0.60]	0.17	不整長方形	土坑
SK - 5014	R-48	0.59	0.55	0.33	楕円形	Pit
SK - 5015	O-47	[1.76]	[1.13]	0.48	不整長方形	土坑。形状は円形の可能性あり
SK - 5016	Q-48	1.38	1.18	0.14	不整方形	土坑
SK - 5017	Q-48	[1.57]	[0.70]	0.34	不整長方形	土坑
SK - 5018	Q-48	1.25	0.90	0.34	楕円形	土坑
SK - 5019	Q-48	(1.26)	(0.62)	0.17	長楕円形	土坑
SK - 5020	Q-48	1.78	1.32	0.26	不整長方形	土坑
SK - 5021	Q-48	2.36	2.10	0.56	不整楕円形	土坑
SK - 5022	P-48	(1.04)	0.68	0.35	長楕円形	土坑
SK - 5023	P-47	1.06	0.67	0.60	楕円形	土坑。底面長方形形状
SK - 5024	O-47	(1.56)	1.06	0.24	不整長方形	土坑
SK - 5025	Q-48	3.17	1.30	0.33	長方形	土坑
SK - 5026	Q-48	0.58	0.54	0.30	楕円形	Pit
SK - 5027	O・P-47	[1.03]	1.30	0.47	不整形	土坑
SK - 5028	Q-47	[1.02]	1.48	0.99	楕円形状	土坑
SK - 5029	P-48	1.07	0.92	0.45	楕円形	土坑。底面長方形形状
SK - 5030	Q-47	0.80	0.55	0.28	円形	Pit
SE - 5031	R・S-49	2.27	2.25	1.35	円形	井戸跡
SE - 5032	S-49	1.88	[1.58]	1.39	楕円形状	井戸跡
SE - 5033	S-49	2.30	[1.11]	1.58	楕円形状	井戸跡
SE - 5034	R・S-48・49	[2.62]	2.32	1.45	楕円形状	井戸跡
SE - 5035	S-48	[1.90]	2.40	1.54	楕円形状	井戸跡
SE - 5036	S-49	[2.98]	2.79	1.09	楕円形状	井戸跡
SK - 5037	P-47	1.21	0.76	0.39	楕円形状	土坑。底面長方形形状
SK - 5038	P-47	0.69	(0.53)	0.51	楕円形	Pit
SK - 5039	P-47	(0.80)	[0.44]	0.46	楕円形	土坑。底面長方形形状
SK - 5040	P-47	(1.72)	0.95	0.53	楕円形	土坑。底面長方形形状
SK - 5041	O-47	0.88	0.46	0.12	楕円形	土坑。底面長方形形状
SK - 5042	O-47	0.97	0.83	0.20	円形	土坑
SK - 5043	O-47	[1.98]	0.73	0.12	長方形	土坑
SK - 5044	P-47	[1.44]	[0.78]	0.23	長方形形状	土坑
SK - 5045	P-47・48	0.78	0.62	0.12	楕円形	土坑
SK - 5046	O-47	[0.68]	0.79	0.14	長方形形状	土坑
SK - 5047	P-47	0.92	0.73	0.33	楕円形	土坑。底面長方形形状
SK - 5048	P-47	[0.62]	0.26	0.14	長楕円形	土坑。
SK - 5049	O-47	[0.94]	1.34	0.60	楕円形状	土坑
SK - 5050	O-47	[0.70]	[0.31]	0.23	楕円形状	土坑
SK - 5051	O-47	[0.53]	0.36	0.05	長楕円形状	土坑
S - 5052	-	-	-	-	-	欠番
SK - 5053	O-47	1.08	[0.76]	0.16	円形	土坑
SK - 5054	O-47	[1.42]	0.82	0.13	長方形	土坑
SK - 5055	O-47	1.50	0.68	0.12	長方形	土坑
SK - 5056	O-47	1.07	(0.84)	1.25	不整円形	土坑
SK - 5057	O-47	0.95	0.95	0.24	円形	土坑
SK - 5058	O-47	0.80	(0.78)	1.04	円形	土坑

(推定) [残存] を示す

第4表 遺構一覧表(3)

遺 構	確認グリッド	規 模(m)			形 状	備 考
		長 軸	短 軸	深 さ		
SK-5059	O-47	[1.13]	0.95	0.52	不整楕円形状	土坑
SK-5060	O-47	0.96	0.90	0.24	円形	土坑
SK-5061	O-47	[0.85]	0.41	0.26	長楕円形状	土坑
SK-5062	O-47	1.30	1.10	0.35	方形状	土坑
SK-5063	O-47	[1.05]	0.82	0.16	長方形	土坑
SE-5064	O-47	2.53	[2.27]	1.09	不整楕円形	井戸跡
SK-5065	N-46	0.94	0.94	0.61	円形	土坑
SK-5066	M-46	0.82	0.78	0.74	円形	土坑
SK-5067	M-46	1.88	[1.00]	0.13	長方形	土坑
SK-5068	M-46	1.18	[0.37]	0.08	楕円形状	土坑
SK-5069	M-46	1.36	1.31	0.32	不整楕円形	土坑
SK-5070	M-46	0.82	0.77	0.33	円形	土坑
SK-5071 a	M-46	0.43	0.31	0.16	楕円形	Pit
SK-5071 b	M-46	0.63	[0.38]	0.36	不整円形	Pit
SK-5072	M-45	1.92	[1.23]	0.46	楕円形	土坑
SK-5073	M-45	1.70	0.90	0.29	不整長円形	土坑
S-5074	-	-	-	-	-	欠番
SK-5075	M-45	[2.26]	1.04	0.42	長方形	土坑
SK-5076	M-45	[1.14]	[0.56]	0.16	長方形形状	土坑
SK-5077	M-45	1.77	0.74	0.31	長方形	土坑
SK-5078	M-45	[1.00]	[0.53]	0.24	方形もしくは長方形	土坑
SK-5079	M-45	[1.80]	0.78	0.36	長方形	土坑
SE-5080	L-45	2.04	2.00	1.22	不整円形	井戸跡
SK-5081	L-45	1.23	0.98	1.06	楕円形	土坑
SX-5082	L・M-44	1.34	1.05	0.12	-	性格不明遺構
S-5083	-	-	-	-	-	欠番
SK-5084	M-45	[0.40]	[0.20]	0.23	方形もしくは長方形	土坑
SK-5085	M-45	[0.46]	0.71	0.35	方形もしくは長方形	土坑
SE-5086	O-47	2.90	(2.83)	1.25	不整楕円形	井戸跡
SK-5087	M-45	1.45	0.64	0.08	長方形	土坑
SE-5088	R・S-49	[1.67]	[1.16]	1.12	楕円形状	井戸跡
SK-5089	M-45	1.18	0.49	0.10	長方形	土坑
SK-5090	M-45	[2.25]	0.90	0.36	長方形形状	土坑
SK-5091	M-45	1.58	0.88	0.16	長方形	土坑
SE-5092	M-45	1.53	[1.20]	0.93	不整楕円形	井戸跡
SK-5093	M-45	(1.62)	(1.39)	0.16	不整楕円形	土坑
S-5094	-	-	-	-	-	欠番
S-5095	-	-	-	-	-	欠番
S-5096	-	-	-	-	-	欠番
S-5097	-	-	-	-	-	欠番
S-5098	-	-	-	-	-	欠番
S-5099	-	-	-	-	-	欠番
S-5100	-	-	-	-	-	欠番
SK-5101	R-49	0.61	0.49	0.18	楕円形	Pit
SK-5102	R-49	0.66	0.54	0.33	楕円形	Pit
SK-5103	R-49	0.30	[0.20]	0.28	円形	Pit
SK-5104	R-49	0.51	0.44	0.35	円形	Pit

(推定) [残存] を示す

第5表 遺構一覧表（4）

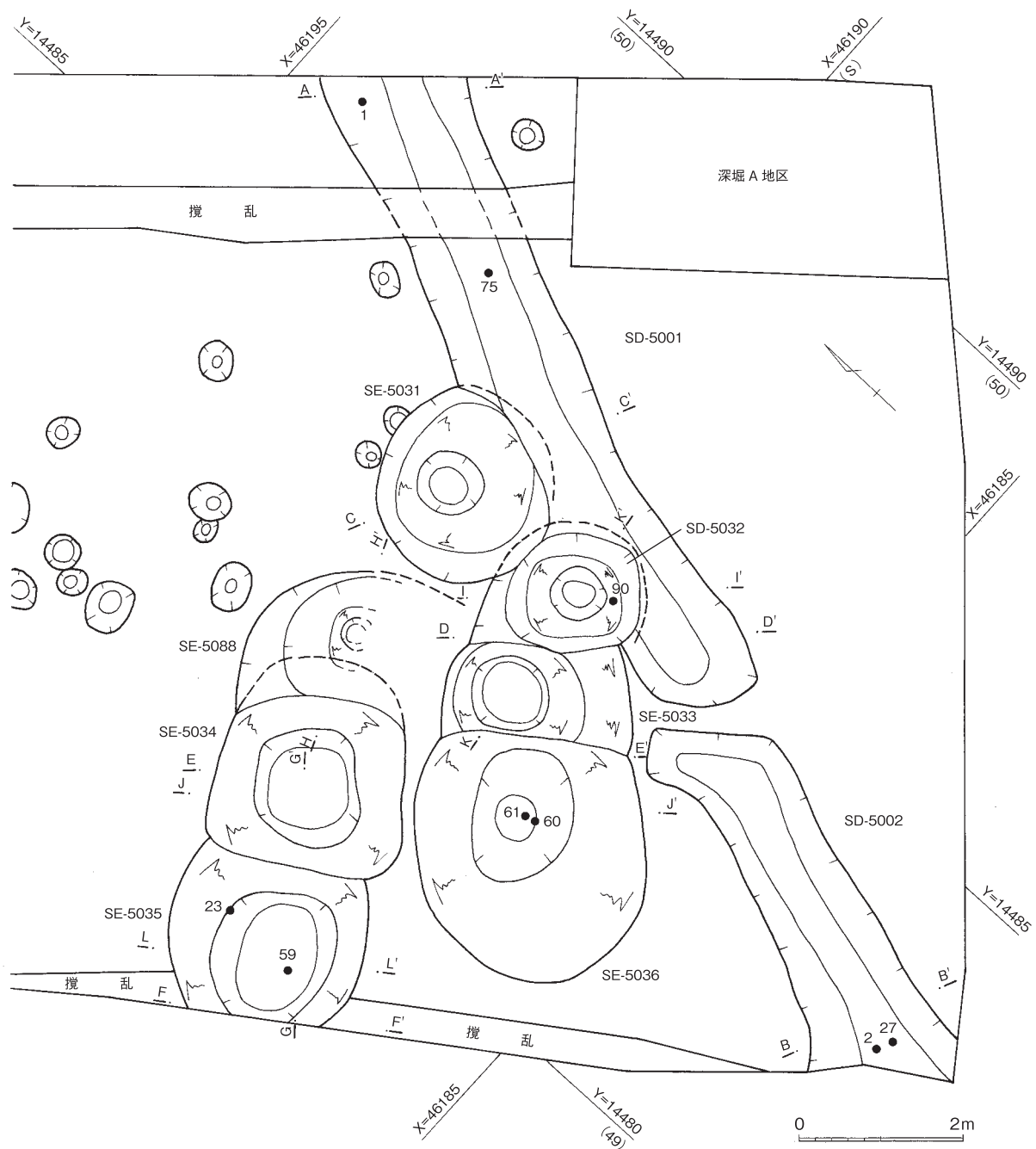
遺 構	確認グリッド	規 模(m)			形 状	備 考
		長 軸	短 軸	深 さ		
SK - 5105	R-48・49	0.45	0.40	0.22	円形	Pit
SK - 5106	R-48・49	0.50	0.44	0.31	楕円形	Pit
SK - 5107	R-48	0.62	0.45	0.27	楕円形	Pit
SK - 5108 a	R-48	0.58	0.47	0.28	楕円形	Pit
SK - 5108 b	R-48	(0.41)	0.48	0.38	楕円形	Pit
SK - 5108 c	R-48	0.60	[0.47]	0.18	楕円形	Pit
SK - 5109	R-48	0.58	0.50	0.27	楕円形	Pit
SK - 5110	R-49	0.57	0.56	0.30	円形	Pit
SK - 5111	P-48	0.62	0.58	0.55	楕円形	Pit
SK - 5112	P-47	0.48	0.45	0.52	楕円形	Pit
SK - 5113	P-47	0.51	[0.26]	0.44	楕円形	Pit
SK - 5114	P-47	0.67	0.52	0.41	楕円形	Pit
SK - 5115	P-47	0.42	[0.33]	0.40	楕円形	Pit
SK - 5116	O-47	0.30	0.28	0.34	円形	Pit
SK - 5117	P-47	0.57	0.55	0.54	円形	Pit
SK - 5118	P-47	0.49	[0.45]	0.36	円形	Pit
SK - 5119	P-47	0.60	0.54	0.50	円形	Pit
SK - 5120	P-47	0.41	0.40	0.40	円形	Pit
SK - 5121	P-47	0.81	0.66	0.35	楕円形	土坑
SK - 5122	P-47	0.56	0.54	0.33	楕円形	Pit
SK - 5123	P-47	0.50	0.32	0.32	楕円形	Pit
SK - 5124	P-47	0.35	0.30	0.25	楕円形	Pit。2基と思われる
SK - 5125	P-47	0.24	0.20	0.21	円形	Pit
SK - 5126	P-47	0.72	0.48	0.38	楕円形	土坑。底面長方形形状
SK - 5127	O-47	0.46	0.39	0.10	円形	Pit
SK - 5128	O-47	0.55	0.52	0.40	円形	Pit
SK - 5129	O-47	0.40	0.28	0.20	楕円形	Pit
SK - 5130	O-47	0.38	0.38	0.26	円形	Pit
SK - 5131	M-46	0.37	0.32	0.19	円形	Pit
SK - 5132	M-45	0.43	0.36	0.29	楕円形	Pit
SK - 5133	M-45	0.53	0.45	0.25	楕円形	Pit
SK - 5134	M-45	0.40	0.37	0.21	円形	Pit
SK - 5135	M-45	0.36	0.36	0.20	円形	Pit
SK - 5136	M-45	0.55	0.41	0.32	楕円形	Pit
SK - 5137	Q-48	0.64	0.60	0.29	楕円形	Pit
S - 5138	-	-	-	-	-	欠番
SK - 5139	M-45	0.31	0.31	0.35	円形	Pit
SK - 5140	M-45	0.45	0.42	0.25	円形	Pit
SK - 5141 a	M-45	0.31	0.30	0.26	円形	Pit
SK - 5141 b	M-45	[0.40]	0.47	0.35	楕円形	Pit
SK - 5142	Q-48	0.74	0.53	0.12	楕円形	Pit
SK - 5143 a	M-45	0.37	0.33	0.29	円形	Pit
SK - 5143 b	M-45	0.34	[0.22]	0.17	円形	Pit
SK - 5144 a	M-45	0.40	0.37	0.22	円形	Pit
SK - 5144 b	M-45	0.31	0.25	0.24	円形	Pit
SK - 5145 a	O-47	0.39	0.34	0.20	楕円形	Pit
SK - 5145 b	O-47	0.43	0.40	0.22	楕円形	Pit

(推定) [残存] を示す

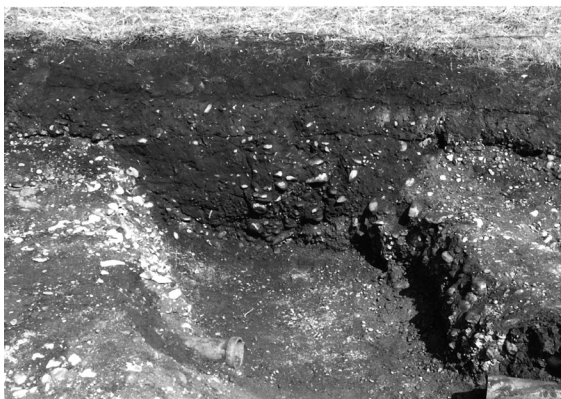
第6表 遺構一覧表(5)

遺 構	確認グリッド	規 模(m)			形 状	備 考
		長 軸	短 軸	深 さ		
SK-5145 c	O-47	[0.26]	[0.22]	0.11	円形	Pit
SK-5146	M-45	0.36	[0.24]	0.32	楕円形	Pit。SK-5147との切り合い不明
SK-5147	M-45	0.39	[0.23]	0.39	楕円形	Pit。SK-5146との切り合い不明
SK-5148	L-45	0.40	0.37	0.41	円形	Pit
SK-5149	M-45	0.35	0.33	0.38	楕円形	Pit
SK-5150	M-45	0.32	[0.21]	0.42	楕円形	Pit。SK-5152との切り合い不明
SK-5151	L-45	0.49	0.48	0.39	円形	Pit
SK-5152	M-45	0.34	[0.22]	0.33	楕円形	Pit。SK-5150との切り合い不明
SK-5153	M-45	0.35	0.33	0.31	円形	Pit
SK-5154	L-45	0.43	0.35	0.45	楕円形	Pit
SK-5155	L-44・45	0.56	0.35	0.45	楕円形	2基のPitと思われる
S-5156	-	-	-	-	-	欠番
S-5157	-	-	-	-	-	欠番
SK-5158	M-45	0.30	0.28	0.25	円形	Pit
SK-5159	M-45	[0.23]	0.22	0.46	楕円形	Pit
SK-5160	M-45	[0.50]	0.42	0.33	楕円形	Pit
SK-5161 a	L-45	0.40	(0.35)	0.42	円形	Pit
SK-5161 b	L-45	0.39	[0.20]	0.43	円形	Pit
SK-5162	L-45	0.51	0.38	0.25	楕円形	Pit
SK-5163	M-45	0.40	0.33	0.20	楕円形	Pit
SK-5164	M-45	0.33	0.28	0.24	円形	Pit
SK-5165	M-45	0.43	0.40	0.20	円形	Pit
SK-5166	M-45	0.24	0.20	0.36	円形	Pit
SK-5167	P-47	0.43	0.37	0.13	円形	Pit
SK-5168	P-47	0.30	0.26	0.26	円形	Pit
SK-5169	P-47	0.40	0.40	0.30	円形	Pit
SK-5170	O-47	0.50	0.46	0.34	円形	Pit
SK-5171	M-46	0.73	0.50	0.35	楕円形	Pit
SK-5172	M-46	0.36	0.35	0.12	円形	Pit
SK-5173	M-46	0.25	[0.15]	0.18	円形	Pit
SK-5174	M-46	0.23	[0.12]	0.11	円形	Pit

(推定) [残存] を示す



第 11 図 VI-2 (東) 区平面図① (S=1/80)

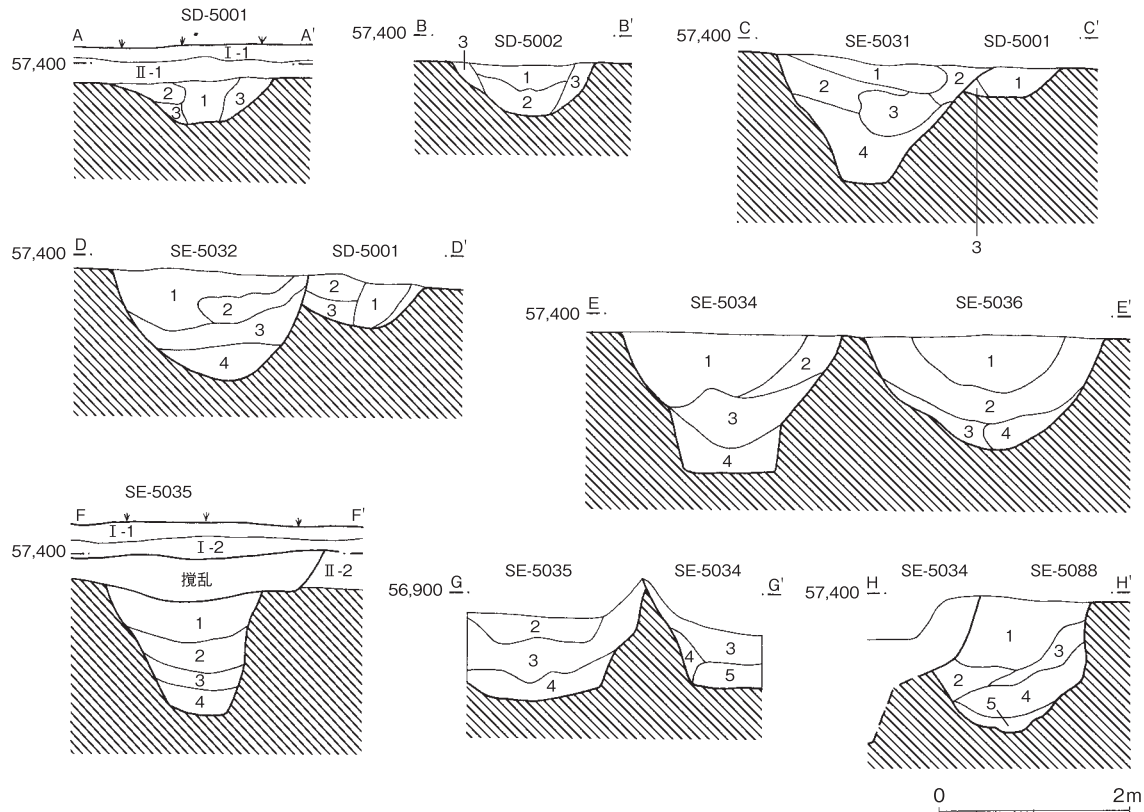


SD-5001 A-A' セクション (南西から)



SD-5002 B-B' セクション (北西から)

Ⅲ 調査成果



第 12 図 土層断面図（溝跡・井戸跡）①（S=1/80）

SD-5001

- 1層 暗灰色土。河原石（5mm～5cm程）主体層。石間に暗灰色の粘質土流入。しまりやや富。粘性やや弱。人為堆積。
- 2層 暗灰褐色土。河原石（5mm～2cm程）・橙色粒子・白色粒子・少量混入。砂質土。しまりやや富。粘性やや弱。自然堆積。
- 3層 灰黒褐色土。河原石（5mm～3cm程）やや少量。粘質土。しまり緩。粘性やや強。自然堆積。

SD-5002

- 1層 暗褐色土。暗褐色土・河原砂（灰色）5：5の割合で混合。河原石（1～3cm程）やや多量に混入。砂質土。しまりやや緩。粘性やや弱。人為堆積。
- 2層 暗褐色土。1層に似る。河原石（1～5cm程）主体層。石間に1層の砂質土流入。しまり緩。粘性弱。人為堆積。
- 3層 黒褐色土。黒褐色土主体に河原石（1～3cm程）・河原砂（灰色）少量混入する。しまりやや緩。粘性やや弱。自然堆積。

SE-5031

- 1層 暗褐色土。河原石（5mm～5cm程）・河原砂（灰色）主体層。石間に暗灰色粘土少量流入。しまりやや富。粘性やや弱。人為堆積。
- 2層 黒褐色土。河原石（5mm～5cm程）・白色粒子少量混入の粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。人為堆積。
- 3層 黒褐色土。河原石（1～10cm程）主体層。石間に2層少量流入。しまり緩。粘性弱。人為堆積。
- 4層 暗灰褐色土。河原石（5mm～5cm程）少量。河原砂（灰色）混入の粘質土。しまりやや緩。粘性強。自然堆積。

SE-5032

- 1層 暗灰色土。河原石（5mm～5cm程）多量、河原砂（灰色）を少量混入。石間に暗灰色粘土少量流入。しまりやや富。粘性やや強。人為堆積。

- 2層 灰黒色土。河原石（5mm～1cm程）少量、シルト状粘質土に混入。しまりやや緩。粘性やや強。人為堆積。
- 3層 暗灰色土。河原石（5mm～10cm程）少量。2層に酷似の土流入。砂質土。しまりやや富。粘性やや強。人為堆積。
- 4層 灰黒色土。河原砂（灰色）多量混入の粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。自然堆積。

SE-5034

- 1層 暗灰褐色土。河原石（5mm～10cm程）主体層。石間に砂粒子少量混入の暗灰色土流入。しまりやや富。粘性弱。人為堆積。
- 2層 暗灰色土。河原石（1～5cm程）・炭化物・白色粒子・橙色粒子少量。しまりやや富。粘性やや強。人為堆積。
- 3層 灰黒色土。河原石（1～5cm程）・灰褐色シルト質粘土ブロック（1～3cm程）少量混入。しまりやや緩。粘性強。自然堆積。
- 4層 暗灰褐色土。灰褐色シルト質粘土・暗灰色粘土混合層土。河原石（5mm～1cm程）少量混入。しまり緩。粘性やや強。自然堆積。
- 5層 灰黒色土。4層に酷似の層。灰褐色シルト質粘土・暗灰色粘土混合土。河原石（1～3cm程）少量混入。4層よりシルト質の度合強い。しまり緩。粘性やや強。自然堆積。

SE-5035

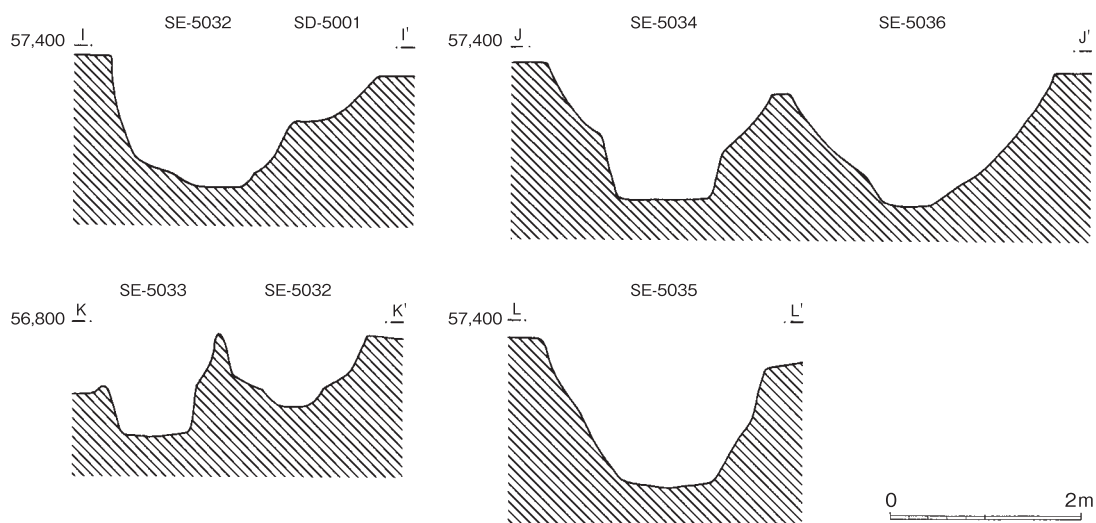
- 1層 灰褐色土。河原石（1～3cm程）・橙色粒子少量混入の暗灰褐色土、暗灰色粘土の混合層。しまりやや緩。粘性やや強。人為堆積。
- 2層 暗灰褐色土。河原石（1～5cm程）・砂粒子やや少量、橙色粒子少量混入する粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。自然堆積。
- 3層 灰黒色土。2層に似る。河原石（5mm～5cm程）・砂粒子少量混入の粘質土。グライ化し、粘質度合も強い。しまり緩。粘性強。自然堆積。
- 4層 暗灰褐色土。河原砂（灰色）層と暗灰色土粘土層が、薄く交互に重なる層。河原石（1mm～5cm程）少量混入。しまりやや富。粘性やや強。自然堆積層。

SE-5036

- 1層 暗灰褐色土。河原石（1～5cm程）・河原砂（灰色）やや多量に混入する砂質土。石間に砂粒子流入する。しまりやや富。粘性弱。人為堆積。
- 2層 暗灰褐色土。1層に似る。河原石・河原砂（灰色）は、1層に比して多い。しまりやや富。粘性弱。人為堆積。
- 3層 暗灰褐色土。河原石（1～5cm程）・白色粒子少量混入の粘質土。しまりやや富。粘性やや強。自然堆積。
- 4層 黒灰褐色土。河原石（1cm程）・酸化鉄粒子・白色粒子・橙色粒子少量混入の粘質土。しまりやや緩。粘性強。開口時の自然堆積層か。

SE-5088

- 1層 灰黒褐色土。河原石（1～10cm程）多量、砂粒子少量混入の粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。人為堆積。
- 2層 暗灰色土。1層に似る。河原石（1～10cm程）多量に混入の粘質土。石間に砂粒子流入。しまりやや緩。粘性やや強。人為堆積。
- 3層 黒褐色土。河原石（3cm程）・砂粒子少量混入のシルト質の粘質土。しまり富。粘性強。自然堆積。
- 4層 暗灰褐色土。河原石（1～3cm程）多量に混入。石間に3層流入。しまりやや緩。粘性強。自然堆積。
- 5層 暗灰褐色土。河原石（1～3cm程）・砂粒子多量に混入する粘質土。しまりやや緩。粘性やや弱。自然堆積。



第 13 図 遺構断面図（溝跡・井戸跡）（S=1/80）



SD-5001・SE-5031 C-C' セクション（南西から）



SE-5034・5036 E-E' セクション（南西から）

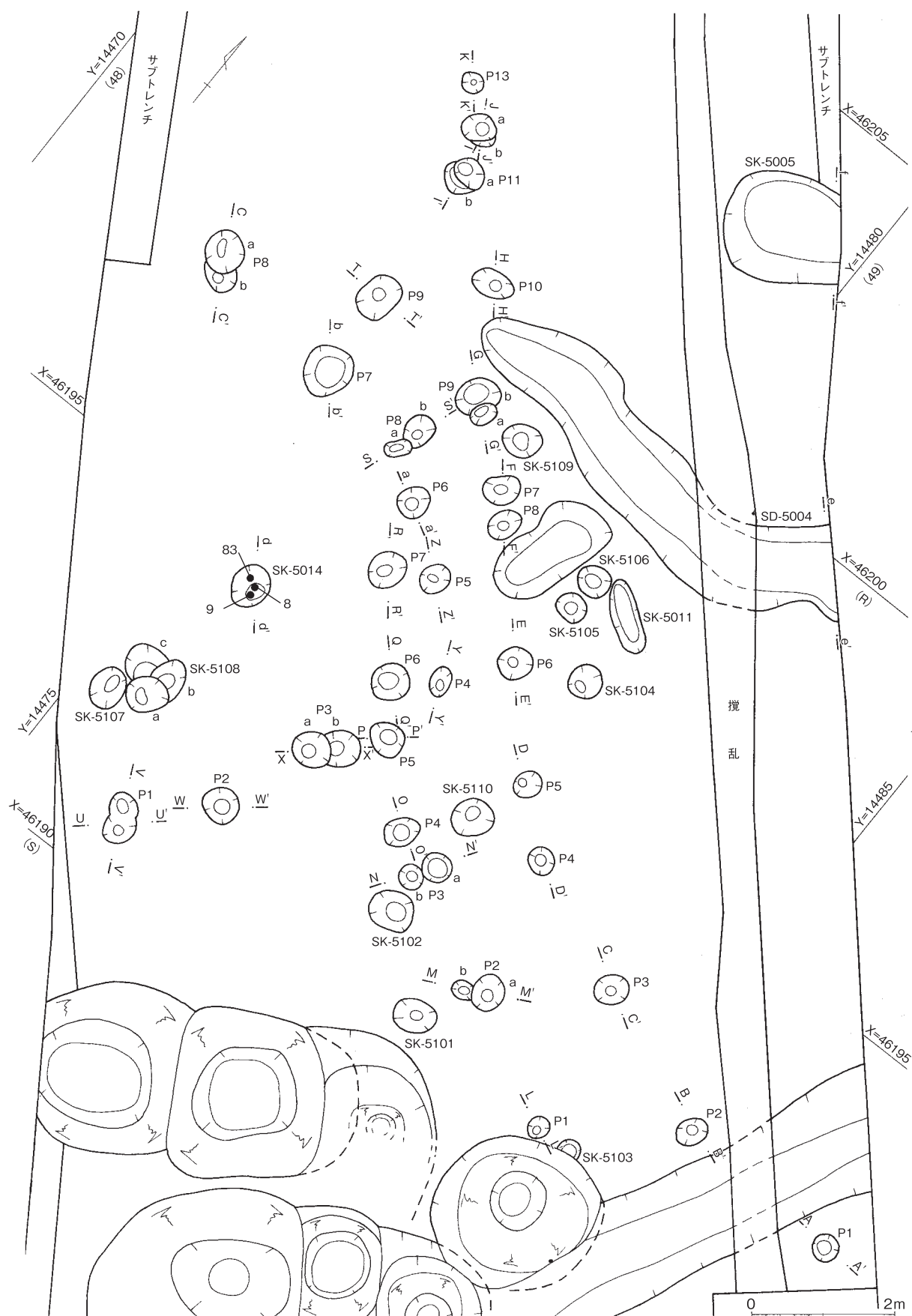


SE-5032 遺物（90）出土状況（西から）



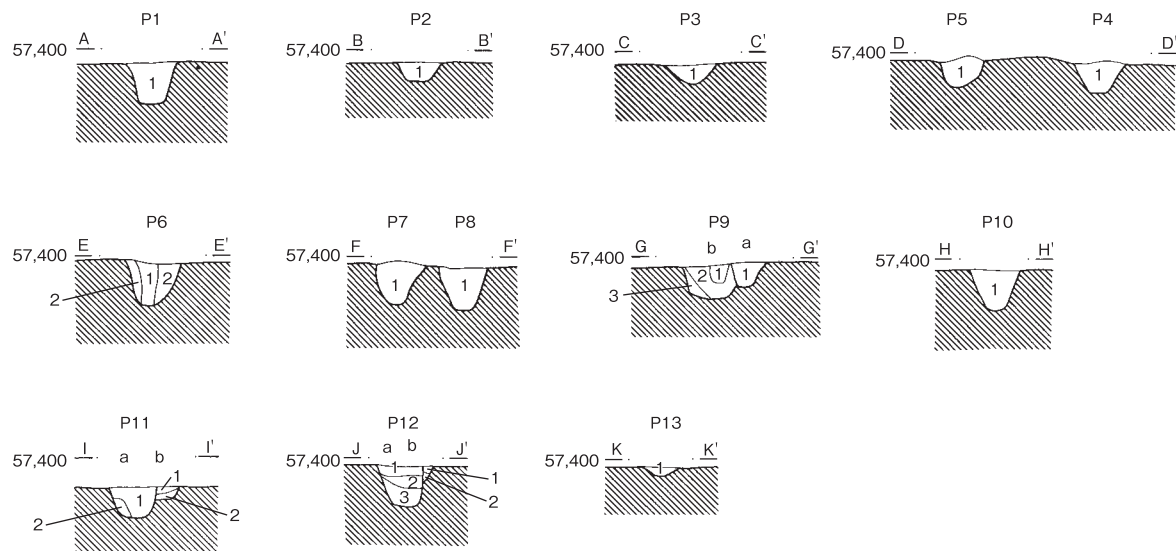
SE-5036 遺物（60・61 他）出土状況（南西から）

Ⅲ 調査成果

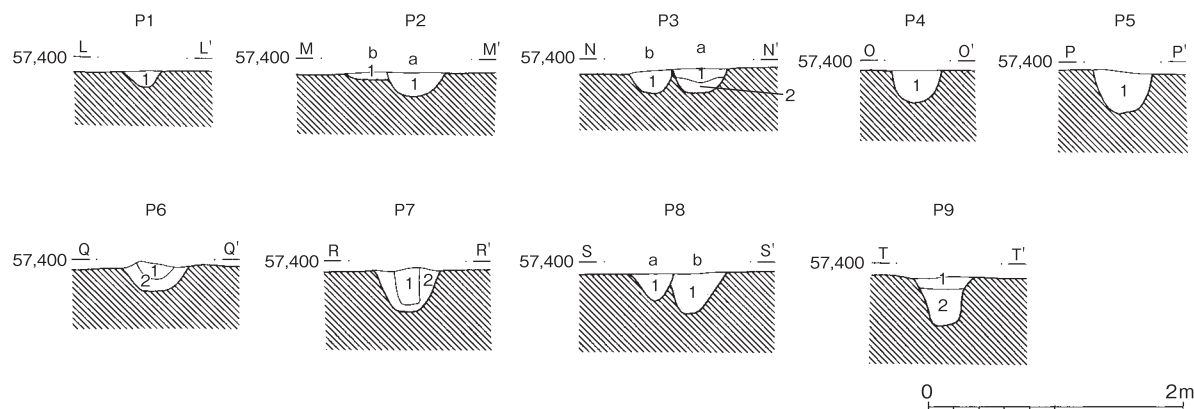


第14図 VI-2 (東) 区平面図② (S=1/80)

SA-5007



SA-5008



第 15 図 土層断面図 (ピット列) ② (S=1/60)

SA-5007

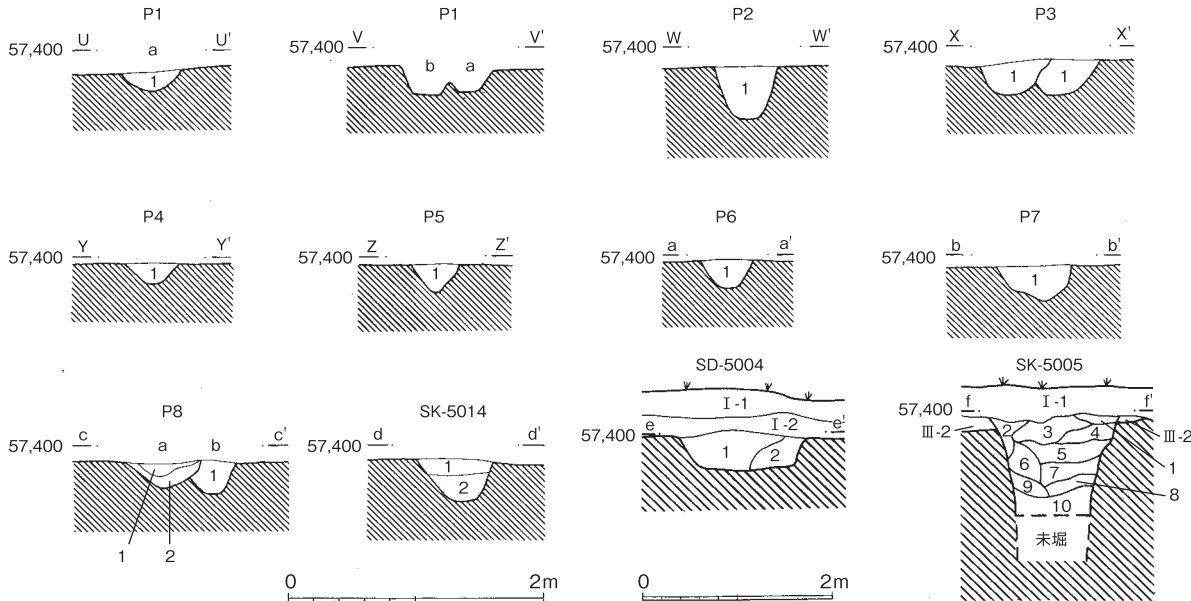
- P 1 1層 灰黒色土。河原石 (1～3cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。
- P 2 1層 灰黒色土。河原石 (1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。
- P 3 1層 灰黒色土。河原石 (1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。
- P 4 1層 灰黒色土。河原石 (1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。
- P 5 1層 灰黒色土。河原石 (1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。
- P 6 1層 灰黒色土。河原石 (1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。
- 2層 暗灰色土。河原石 (1～3cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。

- P 7 1層 灰黒色土。河原石 (1～3cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- P 8 1層 暗茶褐色土。河原石 (1～5cm程)・黄褐色砂ブロックやや少量、暗灰色粘土ブロック少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- P 9a 1層 暗茶褐色土。河原石 (1～5cm程)やや少量、黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- P 9b 1層 暗茶褐色土。河原石 (1～5cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- 2層 灰黒色土。河原石 (1～3cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- 3層 灰黒褐色土。河原石 (1cm程)・暗灰色粘土ブロックやや少量、黄褐色砂ブロック少量混入。粘質土。しまりやや富。粘性やや弱。
- P 10 1層 灰黒色土。河原石 (1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- P 11a 1層 灰黒色土。河原石 (1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- 2層 暗灰褐色土。河原石 (1～3cm程)・黄褐色砂ブロック少量混入の砂質土。しまりやや富。粘性やや弱。

- P 11b 1層 灰黒色土。河原石 (1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- 2層 暗褐色土。黄褐色砂ブロックやや多量、河原石 (1cm程)・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- P 12a 1層 暗茶褐色土。河原石 (1～5cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- 2層 灰黒色土。河原石 (1～3cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- 3層 暗灰色土。河原石 (2～3cm程)・黄褐色砂ブロックやや少量、灰色粘土ブロック少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- P 12b 1層 暗茶褐色土。河原石 (1～2cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- 2層 暗茶褐色土。1層に似る。河原石 (1cm程)微量、黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- P 13 1層 灰黒色土。河原石 (1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。

Ⅲ 調査成果

SA-5009



第 16 図 土層断面図 (ピット列・溝跡・土坑・ピット) ③ ($S=1/60 \cdot 1/80$)

SA-5008

P1 1層 灰黒色土。河原石(1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

P 2a 1層 灰黒色土。河原石（1cm程）・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量 混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

P 2b 1層 灰黒色土。河原石（1～3cm程）・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

P 3a 1層 灰黒色土。河原石(1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量 混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

2層 灰黒色土。河原石（1～5cm程）・黄褐色砂ブロックやや少量、暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。

P 3b 1層 灰黒色土。河原石(1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

P 4 1層 灰黒色土。河原石（1cm程）・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

P5 1層 灰黒色土。河原石(1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

P 6 1層 黒褐色土。河原石（1cm程）・黄褐色砂ブロック・灰褐色粘土ブロック・炭化物・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

2層 黒色土。黒色土に微量の砂混入。白色
粒子・橙色粒子微量。しまりやや緩。粘性中。
P7 1層 灰黒色土。河原石（1～3cm程）・黄褐
色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒

子・橙色粒子・砂粒子少量混入。きめは粗い。
しまりやや緩。粘性やや弱。
2層 黒褐色土。河原石（1～5cm程）・黄褐色砂ブロック・灰褐色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。

P 8a 1層 黒色土。河原石（1cm程）・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。きめは粗い。しまりやや緩。粘性やや弱。

P 8b 1層 暗灰褐色土。河原石（1cm程）・黄褐色砂ブロック・暗灰褐色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。きめは粗い。しまりやや緩。粘性やや弱。

P 9 1層 暗灰褐色土。河原石(1~3cm程)・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。
2層 灰黒色土。河原石(1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。きめは粗い。しまりやや緩。粘性やや弱。

SA-5009

Pl a 1層 灰黒色土。河原石(1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。きめは粗い。しまりやや緩。粘性やや弱。

【備考】P 2bの覆土は、混入の河原石が1～5 cm程の大きさであった他は、P 2aと似た土質であった。

P2 1層 灰黒色土。河原石 (1~5cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

P3a 1層 灰黒色土。河原石(1~3cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

P 3b 1層 暗褐色土。1層に似る。河原石 (1~5 cm程)・黄褐色砂ブロックやや多量、暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

P 4 1層 暗灰褐色土。河原石(1~3cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・褐色土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。|・まりやや富。粘性やや弱。

P5 1層 灰黒色土。河原石(1~3cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

P 6 1層 河原石 (1~5cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

P 7 1層 灰黒色土。河原石 (1~3cm程)・黄褐

色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

P 8 a 1層 黒褐色土。黒褐色土・灰色砂（河原）混合土。河原石（1～3cm程）少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。
2層 黒色土。黒色土・灰色砂（河原）混合土。河原石（1～3cm程）少量混入。砂質土。しまりやや寛。粘性やや弱。

P8b 1層 灰黒色土。河原石(1cm程)・黄褐色砂ブロック・暗灰色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

SK-5014

1層 灰黒色土。河原石(1~3cm程)・炭化物・白色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。

2層 黒褐色土。黄褐色砂ブロック微量混入。砂質土。
しまりやや緩。粘性弱。

SD-5004

1層 灰黒色土。河原石(5mm~3cm程)やや多量、褐色土ブロック・白色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。

2層 暗灰褐色土。1層に土質は似る。河原石(5mm
~3cm程)、褐色土ブロック・白色粒子・砂粒
子微量混入。砂質土。しまりやや富。粘性や
や弱。

SK-5005

1層 褐色土・黄褐色砂・褐色土の混合土。河原石(1~3cm)少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。自然堆積。

2層 黄褐色土。黄褐色砂主体に暗褐色土の混合土。
河原石(1~10cm程)少量混入。しまりやや富。
粘性やや弱。人為堆積。

3層 暗灰色土。灰色砂（河原）・暗褐色土の混合土。
河原石（1～10cm程）やや多量混入。しまり
やや富。粘性やや弱。人為堆積。

4層 暗灰褐色土。黃褐色砂・暗褐色土混合土。河原石(1~5cm程)少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。人為堆積。

5層 暗灰色土。黄褐色砂・暗褐色土・河原砂（灰色）の混合土。河原石（1～5 cm程）少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。人為堆積。

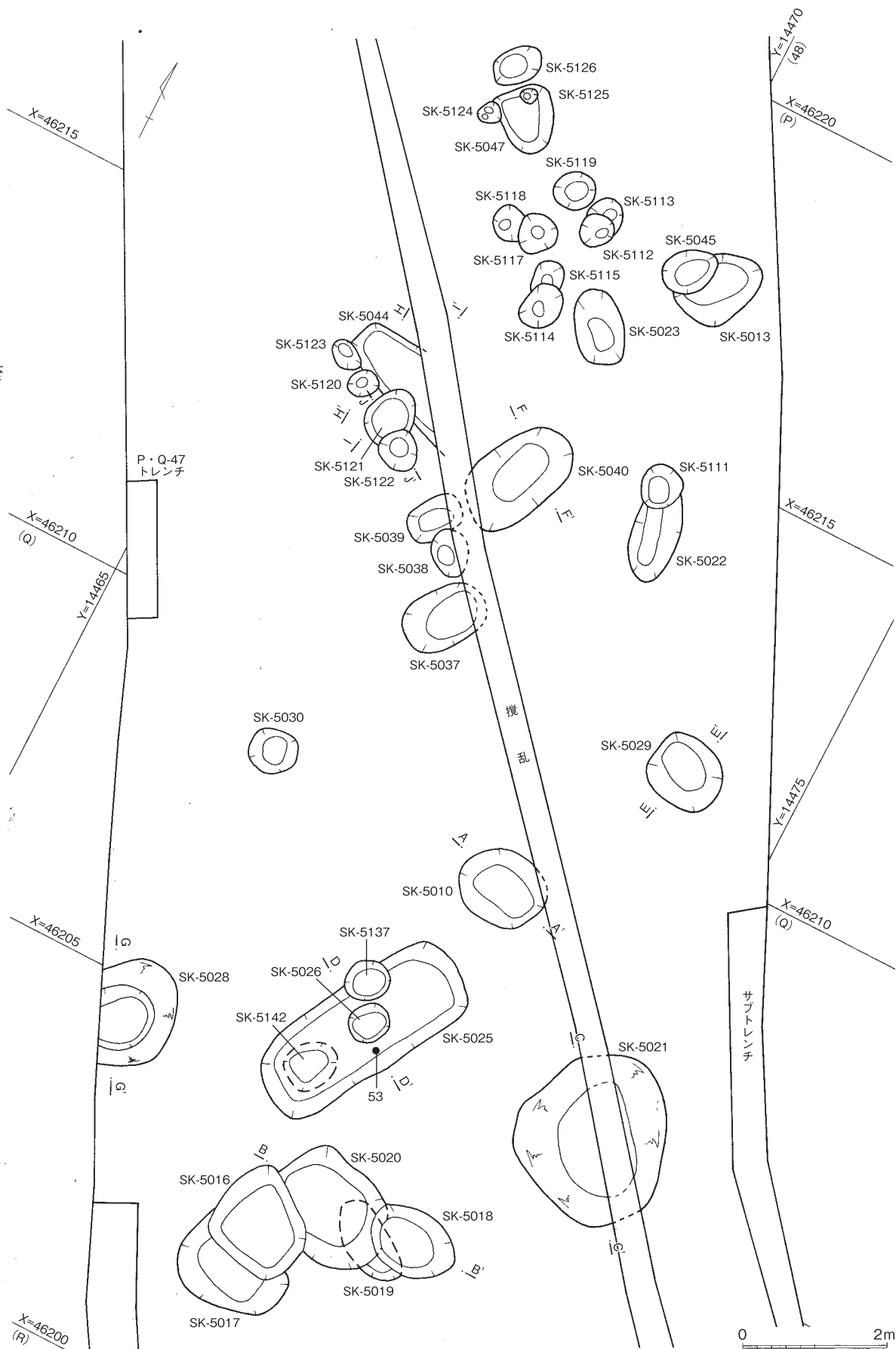
色)の混合土。河原石(1~5cm)少量混入。しまりやや緩。粘性やや強。人為堆積。

合土。河原石(1~3cm程)少量混入。粘質土。土質やや緩。粘性やや強。人為堆積。

河原石(1cm程)少量混入。粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。人為堆積。

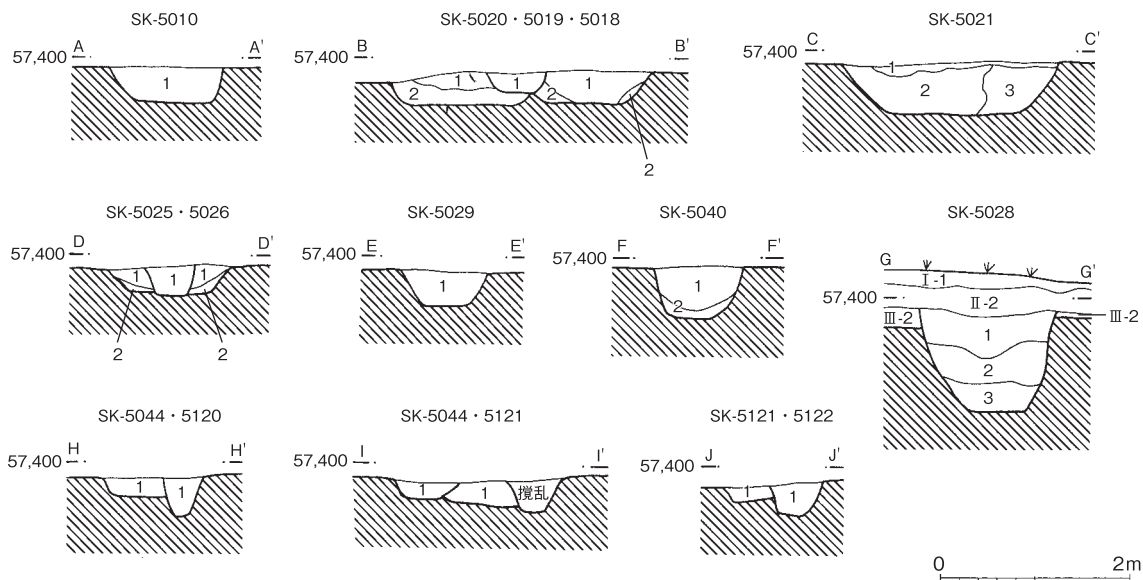
河原石(1~5cm程)少量混入。しまりやや緩。
粘性やや強。人為堆積。

暗黄褐色土。黄褐色砂。暗灰褐色粘土の混入。土。粘質土。河原石（1～5 cm程）少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。人為堆積。



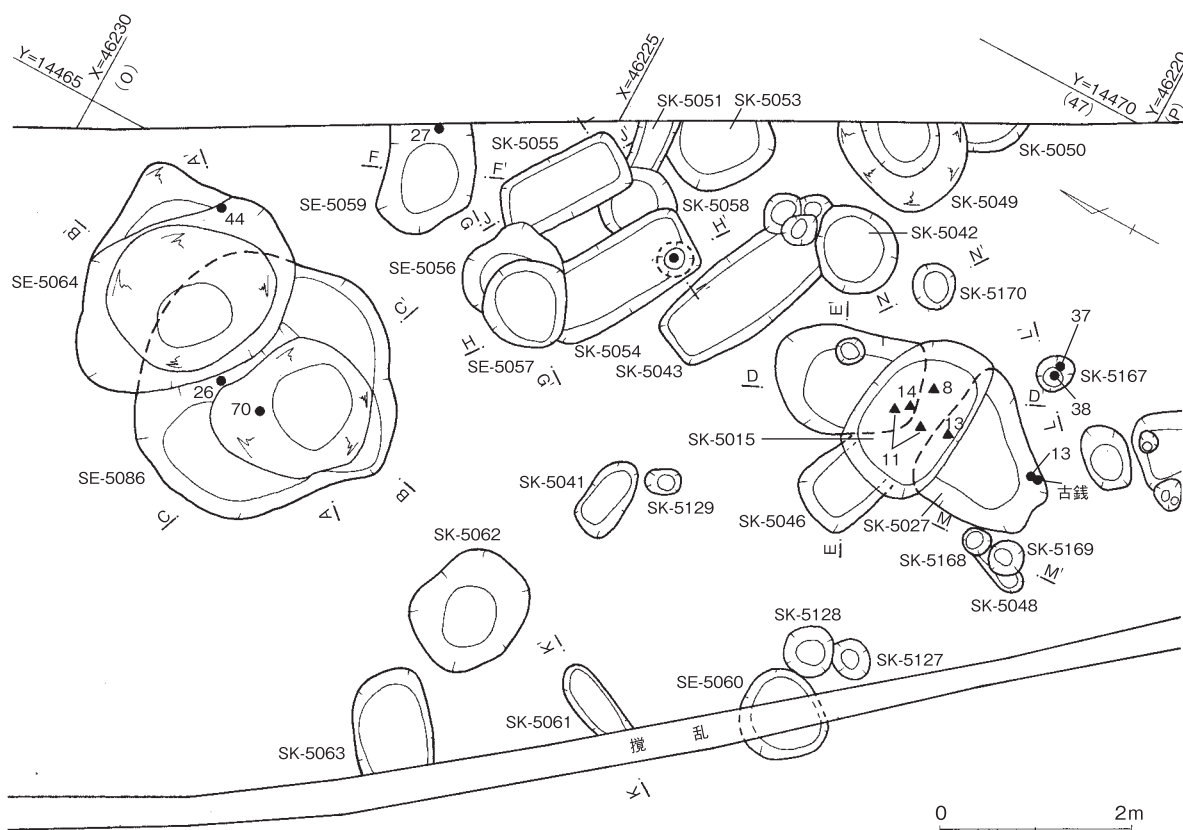
第17図 VI-2 (東) 区平面図③ (S=1/80)

Ⅲ 調査成果

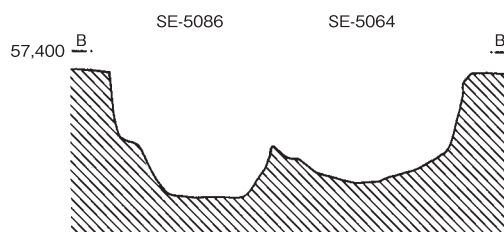
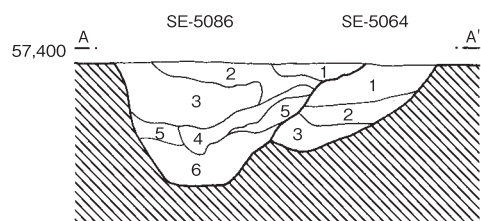


第 18 図 土層断面図 (土坑) ④ (S=1/80)

SK-5010 1層 黒褐色土。河原石 (1～5 cm程)・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。	SK-5020 1層 暗褐色土。河原石 (1～3 cm程)・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。 2層 黒褐色土。1層に似る。河原石 (1～3 cm程)・橙色粒子・砂粒子少量混入。1層に比してきめが粗く、砂粒子若干多い。しまりやや緩。粘性やや弱。	SK-5021 1層 暗褐色土。河原石 (1～3 cm程)・白色粒子・炭化物・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。	SK-5025 1層 暗褐色土。河原石 (1～3 cm程)・白色粒子少量混入の粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。 2層 灰黒色土。橙色粒子・白色粒子・砂粒子微量。2層に比してややきめの細かい粘質土。しまり緩。粘性強。	SK-5026 1層 暗褐色土。河原石 (2～10 cm程) 主体層。石間に白色粒子少量混入の砂質土流入。しまり緩。粘性やや弱。	SK-5028 1層 暗褐色土。河原石 (1 cm程)・橙色粒子・白色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。 2層 灰黒褐色土。河原石 (5 cm程) 微量、白色粒子・橙色粒子少量。1層に比して砂粒子混入少なく、グライ化する。しまりやや緩。粘性やや強。 3層 黒褐色土。河原石 (1～5 cm程) やや多量、砂粒子少量混入の粘質土。しまりやや緩。粘性強。	SK-5040 1層 暗褐色土。河原石 (1～3 cm程)・橙色粒子・白色粒子・炭化物・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。	SK-5044 1層 暗褐色土。河原石 (1～3 cm程)・黄褐色砂ブロック・白色粒子やや少量混入の粘質土。しまりやや富。粘性やや強。	SK-5120 1層 暗褐色土。河原石 (1 cm程)・灰褐色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子少量混入する粘質土。しまりやや富。粘性やや強。	SK-5121 1層 褐色土。砂粒子やや少量、炭化物・白色粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。	SK-5122 1層 暗褐色土。河原石 (1 cm程)・灰褐色粘土ブロック・白色粒子・橙色粒子少量混入する粘質土。しまりやや富。粘性やや強。
---	--	--	---	--	--	---	---	--	---	--



第19図 VI-2(東)区平面図④ (S=1/80)

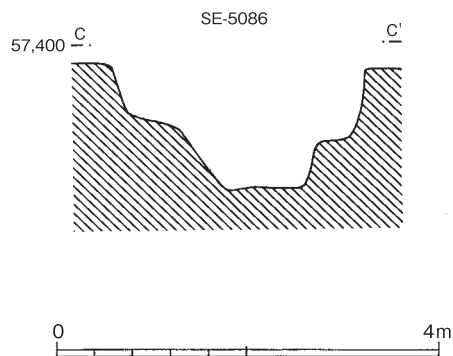


SE-5064

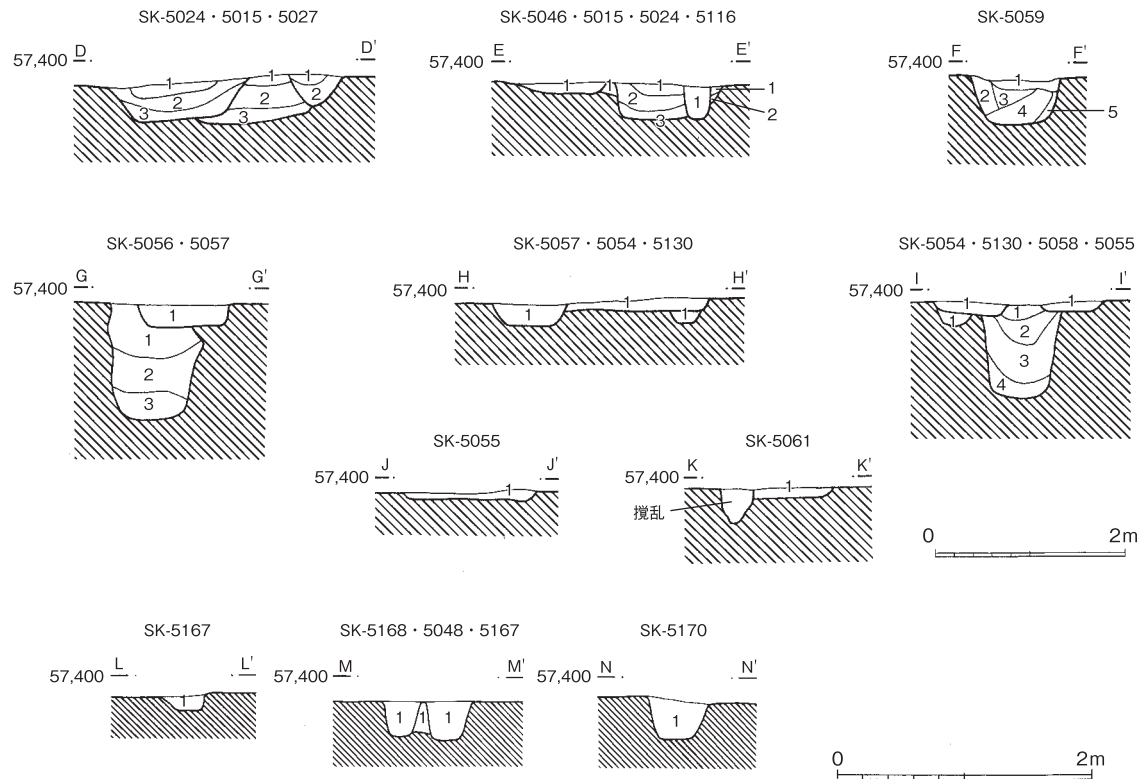
- 1層 黒褐色土。河原石(1~3cm程)・炭化物・白色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。自然堆積。
- 2層 暗褐色土。1層に似る。河原石(1~3cm程)・黄褐色砂ブロック・炭化物・白色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。自然堆積。
- 3層 暗灰褐色土。河原石(1cm程)・黄褐色砂ブロック・炭化物・白色粒子・橙色粒子少量混入する粘質土。しまり緩。粘性強。自然堆積。

SE-5086

- 1層 暗褐色土。河原石(1~3cm程)・黄褐色砂ブロック多量に混入する粘質土。しまり緩。粘性やや強。人為堆積。
- 2層 暗灰色土。河原石(1~5cm程)・炭化物・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入する粘質土。しまりやや富。粘性やや強。人為堆積。
- 3層 暗灰色土。2層に似る。河原石(5~10cm程)やや多量、炭化物・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入する粘質土。しまりやや富。粘性やや強。人為堆積。
- 4層 暗灰褐色土。灰色粘土ブロック・黄褐色砂の混合層。河原石(1~3cm程)・酸化鉄粒子・白色粒子・砂粒子少量混入する粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。人為堆積。
- 5層 黒灰褐色土。4層に似る。河原石(5mm~2cm程)・酸化鉄粒子・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入する粘質土。4層に比して、若干グライ化する。しまりやや緩。粘性やや強。人為堆積。
- 6層 黒灰色土。酸化鉄粒子・白色粒子微量を含む。グライ化強い。しまり緩。粘性強。自然堆積。



第20図 土層断面図(井戸跡)⑤ (S=1/80)



第 21 図 土層断面図（土坑・ピット）⑥（S=1/60・1/80）

SK-5015

- 1層 暗褐色土。黄褐色砂・暗褐色土の混合土流入の二次堆積層か？河原石（5mm～1cm程）・炭化物・白色粒子・橙色粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- 2層 黒褐色土。河原石（5mm～1cm程）・黄褐色砂ブロック・炭化物・白色粒子・橙色粒子少量混入する粘質土。しまりやや富。粘性やや弱。
- 3層 黒灰色土。1層に似る。河原石（5mm～1cm程）・黄褐色砂・炭化物・白色粒子・橙色粒子少量混入する粘質土。きめ細かく、グライ化する。若干強い。しまりやや緩。粘性やや強。

SK-5024

- 1層 暗褐色土。暗褐色土・黄褐色砂の混合土。炭化物・白色粒子・橙色粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。
- 2層 黒褐色土。1層に似る。黄褐色砂・炭化物・白色粒子・橙色粒子少量混入する粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。
- 3層 黒褐色土。河原石（1～3cm程）・黄褐色砂・炭化物・橙色粒子少量混入する粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。

SK-5027

- 1層 暗黄褐色土。河原石（1～3cm程）・黒褐色土少量混入する黄褐色砂主体層。しまりやや富。粘性弱。
- 2層 黄褐色土。河原石（1～3cm程）・白色粒子・橙色粒子微量混入する黄褐色砂主体層。しまりやや富。粘性弱。

SK-5046

- 1層 暗褐色土。黄褐色砂ブロック・炭化物・白色粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。

SK-5048

- 1層 暗褐色土。河原石（1～3cm程）・黄褐色砂ブロック・炭化物・白色粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。

SK-5054

- 1層 黒褐色土。河原石（1～3cm程）・黄褐色砂ブロック・炭化物少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

SK-5055

- 1層 黒褐色土。河原石（1～3cm程）・黄褐色砂ブロック・炭化物少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

SK-5056

- 1層 暗褐色土。河原石（1～3cm程）・暗褐色粘土ブロック・黄褐色砂ブロック少量混入する粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。
- 2層 暗褐色土。1層に似る。暗褐色粘土ブロック・黄褐色砂ブロック少量混入する粘質土。しまり緩。粘性やや強。
- 3層 灰黒褐色土。砂粒子やや多量、河原石（1～3cm程）・白色粒子少量混入する粘質土。しまり緩。粘性強。

SK-5057

- 1層 暗褐色土。河原石（1～3cm程）・炭化物・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

SK-5058

- 1層 暗褐色土。河原石（5mm～3cm程）・白色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。
- 2層 黒褐色土。河原石（1～5cm程）・黄褐色砂ブロック・炭化物・白色粒子・橙色粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや強。
- 3層 黒褐色土。2層に似る。河原石（1～3cm程）・黄褐色砂ブロック・砂粒子少量混入。しまり緩。粘性やや強。
- 4層 灰黒褐色土。砂粒子やや多量、河原石（1～3cm程）・白色粒子少量混入する粘質土。しまり緩。粘性強。

SK-5059

- 1層 黒褐色土。炭化物・焼土粒子・乳白色粒子少量混入する砂質土。しまりやや緩。粘性やや弱。
- 2層 暗黄褐色土。黒色土・黄褐色砂の混合土。乳白色粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや強。
- 3層 暗褐色土。黄褐色砂やや多量に混入。しまりやや富。粘性やや強。
- 4層 黒褐色土。乳白色粒子やや多量、炭化物・焼土粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや強。
- 5層 暗黄褐色土。2層に似る。黒色土・黄褐色砂の混合土。しまりやや富。粘性やや弱。

SK-5061

- 1層 黒褐色土。焼土ブロック・炭化物・白色粒子少量混入する粘質土。しまりやや富。粘性やや強。

SK-5116

- 1層 黒褐色土。河原石（1～3cm程）・炭化物・白色粒子・砂粒子少量混入の粘質土。しまり緩。粘性やや強。

SK-5130

- 1層 黒褐色土。河原石（1～3cm程）・砂粒ブロック少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

SK-5167

- 1層 暗褐色土。河原石（1～3cm程）・炭化物・白色粒子少量混入する砂質土。しまりやや富。粘性やや弱。

SK-5168

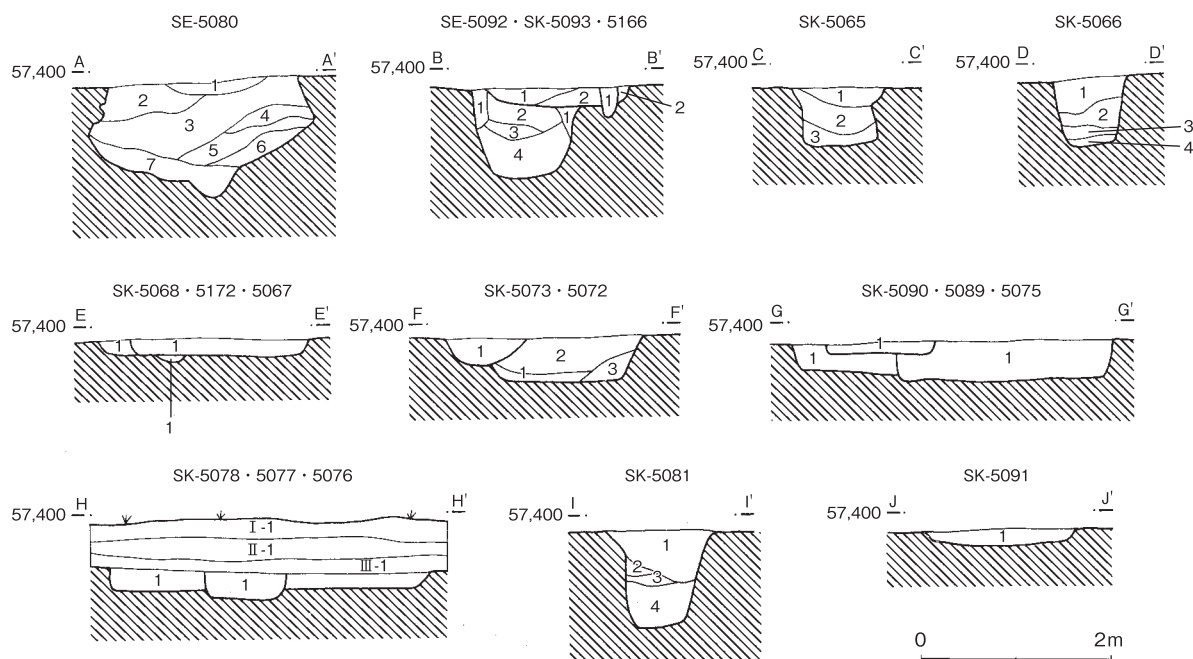
- 1層 黒褐色土。河原石（1～3cm程）・黄褐色砂ブロック・炭化物・白色粒子少量混入する。しまり富。粘性やや弱。

SK-5169

- 1層 黒褐色土。河原石（5mm～1cm程）・黄褐色砂ブロック・白色粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。

SK-5170

- 1層 暗褐色土。河原石（5mm～1cm程）・白色粒子・橙色粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。



第 24 図 土層断面図 (井戸跡・土坑) ⑧ (S = 1/80)

SK-5065

- 1層 暗褐色土。河原石 (5mm~1cm程)・焼土ブロック・炭化物・砂粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。
- 2層 暗灰褐色土。灰色粘土・黄褐色砂の混合土。白色粒子少量。しまりやや緩。粘性やや強。
- 3層 灰黒色土。砂粒子少量混入する粘質土。しまりやや富。粘性強。

SK-5066

- 1層 暗灰褐色土。暗灰褐色土・黄褐色砂の混合土。河原石 (1~10cm程)・白色粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。
- 2層 暗褐色土。暗褐色土・黄褐色砂の混合土。河原石 (1cm程)・炭化物・白色粒子少量混入。きめ細かい土質。しまりやや緩。粘性やや強。
- 3層 黒褐色土。河原石 (5mm~1cm程)・黄褐色砂ブロック少量混入する粘質土。きめ細かい土質。しまりやや緩。粘性強。
- 4層 灰黒色土。黄褐色砂を少量混入する粘質土。グライ化に富んだきめ細かい土。しまりやや緩。粘性やや強。

SK-5067

- 1層 暗褐色土。黄褐色砂ブロック・白色粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

SK-5068

- 1層 黒褐色土。黄褐色砂ブロック・白色粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

SK-5072

- 1層 灰黒褐色土。河原石 (1~10cm程)・酸化鉄粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや強。人為堆積。
- 2層 暗灰褐色土。河原石 (5mm~1cm程)・炭化物・酸化鉄粒子・砂粒子少量混入する粘質土。しまりやや富。粘性強。自然堆積。
- 3層 灰褐色土。河原石 (1~3cm程)・灰白色粘土ブロック・酸化鉄粒子少量混入する粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。自然堆積。

SK-5073

- 1層 暗灰褐色土。河原石 (1~5cm程)・炭化物・白色粒子少量、橙色粒子・砂粒子微量混入する粘質土。しまりやや富。粘性やや強。人為堆積。

SK-5075

- 1層 暗黄褐色土。黄褐色砂ブロックやや多量、炭化物・焼土粒子・白色粒子・橙色粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。

SK-5076

- 1層 暗褐色土。河原石 (5mm~1cm程)・黄褐色砂ブロック・砂粒子少量混入する粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。

SK-5077

- 1層 暗褐色土。河原石 (5mm~1cm程)・黄褐色砂ブロック・砂粒子混入する粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。

SK-5078

- 1層 暗褐色土。河原石 (5mm~1cm程)・黄褐色砂ブロック・砂粒子少量混入する粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。

SE-5080

- 1層 暗褐色土。白色粒子やや少量、黄褐色砂ブロック・橙色粒子少量混入する粘質土。しまりやや富。粘性やや強。自然堆積。
- 2層 暗灰色土。黄褐色砂・暗灰色粘土の混合層。河原石 (1~5cm程)・砂粒子やや多量に混入。石間に粘質土流入。しまり緩。粘性やや弱。人為堆積。
- 3層 暗黄褐色土。黄褐色砂・暗灰色粘土の混合層。河原石 (1~5cm程) 少量混入。しまりやや富。粘性やや強。人為堆積。
- 4層 暗灰褐色土。河原石 (5mm~1cm程)・白色粒子少量混入する粘質土。きめ細かい。しまりやや緩。粘性やや強。自然堆積。
- 5層 暗灰褐色土。4層に似る。河原石 (5mm~1cm程)・白色粒子・砂粒子少量混入する粘質土。グライ化する。しまりやや緩。粘性やや強。自然堆積。
- 6層 灰黒褐色土。4層に似る。白色粒子少量混入する粘質土。きめ細かい。グライ化は5層に比して強い。しまりやや緩。粘性やや強。自然堆積。
- 7層 灰黒褐色土。黄褐色砂ブロック・白色粒子微量混入する粘質土。しまり緩。粘性強。自然堆積。

SK-5081

- 1層 黒褐色土。黒褐色土・暗褐色土の混合土。河原石 (1cm程)・炭化物・白色粒子・橙色粒子少量混入の粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。人為堆積。

SK-5081

- 2層 暗褐色土。砂粒子少量混入の粘質土。しまり緩。粘性強。自然堆積。
- 3層 暗灰褐色土。黄褐色砂ブロック・酸化鉄粒子・砂粒子少量混入する粘質土。しまり緩。粘性強。自然堆積。

- 4層 黒褐色土。黄褐色砂ブロック少量混入する粘質土。しまり緩。粘性強。自然堆積。

SK-5089

- 1層 暗灰褐色土。酸化鉄粒子やや少量、黄褐色砂ブロック・炭化物・白色粒子少量混入する粘質土。しまりやや富。粘性やや強。

SK-5090

- 1層 暗褐色土。黄褐色砂ブロックやや少量、炭化物・焼土粒子・白色粒子・橙色粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。

SK-5091

- 1層 暗灰褐色土。黄褐色砂ブロック・炭化物・酸化鉄粒子・白色粒子微量混入する粘質土。しまりやや富。粘性やや強。

SE-5092

- 1層 暗黄褐色土。黄褐色砂ブロック・酸化鉄粒子・白色粒子・橙色粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや強。
- 2層 暗灰褐色土。河原石 (5mm~3cm程) やや多量に混入する。しまりやや緩。粘性やや強。人為堆積。
- 3層 暗灰褐色土。黄褐色砂ブロック・炭化物・酸化鉄粒子少量混入する粘質土。しまり緩。粘性強。人為堆積。
- 4層 黒灰褐色土。3層に似る。黄褐色砂ブロック少量混入する粘質土。きめ細かい。グライ化する。しまり緩。粘性強。自然堆積。

SK-5093

- 1層 暗灰褐色土。酸化鉄粒子やや少量、河原石 (5mm~1cm程)・白色粒子・砂粒子少量混入する粘質土。きめ細かい。しまりやや富。粘性やや強。自然堆積。
- 2層 暗灰褐色土。1層に似る。黄褐色砂ブロック・灰色粘土ブロック微量混入。しまりやや富。粘性やや強。自然堆積。

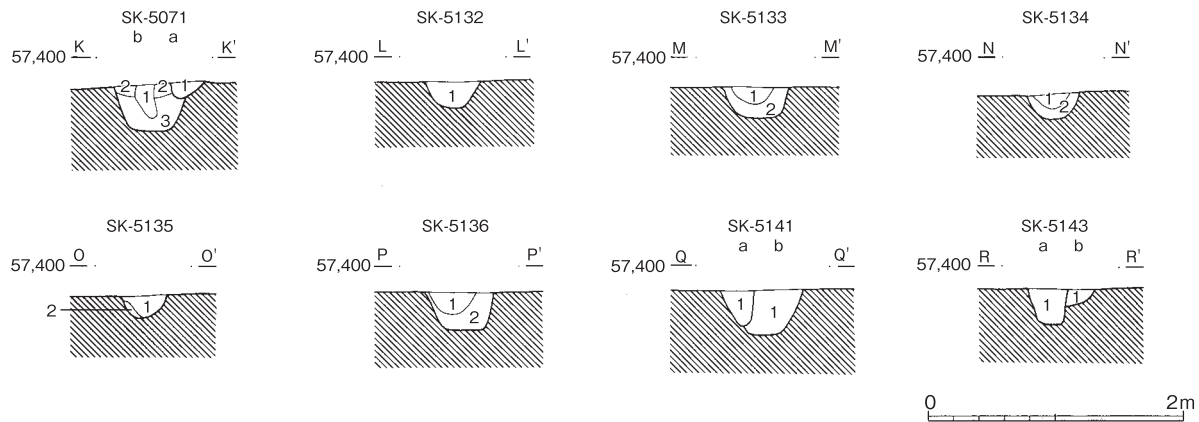
SK-5166

- 1層 暗褐色土。酸化鉄粒子・白色粒子・砂粒子少量混入する粘質土。きめ細かい土。しまりやや緩。粘性やや強。

SK-5172

- 1層 黒褐色土。黄褐色砂粒子やや多量混入。しまりやや緩。粘性やや弱。

Ⅲ 調査成果



第 25 図 土層断面図（ピット）⑧（S=1/60）

SK-5071a

1層 黒褐色土。白色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや富。粘性やや弱。

SK-5071b

1層 黒褐色土。河原石（1cm程）・炭化物・白色粒子・橙色粒子少量混入。しまり緩。粘性やや弱。

2層 暗灰褐色土。黄褐色砂ブロック・酸化鉄粒子・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや強。

3層 暗褐色土。黄褐色砂ブロック少量混入。きめ細かい。しまりやや緩。粘性やや強。

SK-5132

1層 暗灰褐色土。黄褐色砂ブロック・酸化鉄粒子・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや強。

SK-5133

1層 暗灰褐色土。黄褐色砂ブロック・酸化鉄粒子・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや強。

2層 暗褐色土。黄褐色砂ブロック少量混入。きめ細かい。しまりやや緩。粘性やや強。

SK-5134

1層 暗灰褐色土。黄褐色砂ブロック・酸化鉄粒子・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや強。

2層 暗褐色土。黄褐色砂ブロック少量混入。きめ細かい。しまりやや緩。粘性やや強。

SK-5135

1層 暗灰褐色土。黄褐色砂ブロック・酸化鉄粒子・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや強。

2層 暗褐色土。黄褐色砂ブロック少量混入。きめ細かい。しまりやや緩。粘性やや強

SK-5136

1層 暗灰褐色土。黄褐色砂ブロック・酸化鉄粒子・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや強。

2層 暗褐色土。黄褐色砂ブロック少量混入。きめ細かい。しまりやや緩。粘性やや強。

SK-5141a

1層 暗灰褐色土。黄褐色砂ブロック・酸化鉄粒子・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや強。

SK-5141b

1層 暗褐色土。黄褐色砂ブロックやや多量、白色粒子・橙色粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや強。

SK-5143a

1層 暗灰褐色土。黄褐色砂ブロック・酸化鉄粒子・白色粒子・橙色粒子・砂粒子少量混入。しまりやや緩。粘性やや強。

SK-5143b

1層 暗褐色土。黄褐色砂ブロック・炭化物・白色粒子少量混入する粘質土。しまりやや緩。粘性やや強。

4. 遺 物

[1] 縄文時代の遺物

平成 18 年度の調査区では、縄文時代の遺構（土坑 1 基、正確不明遺構 1 基）および遺構外から、小テン箱（600 mm × 360 mm × 100 mm）6 箱分の縄文土器の破片が出土した。各時期が網羅できるように代表的なものを抽出して、以下に図示、記述する。

1) 遺構出土の土器

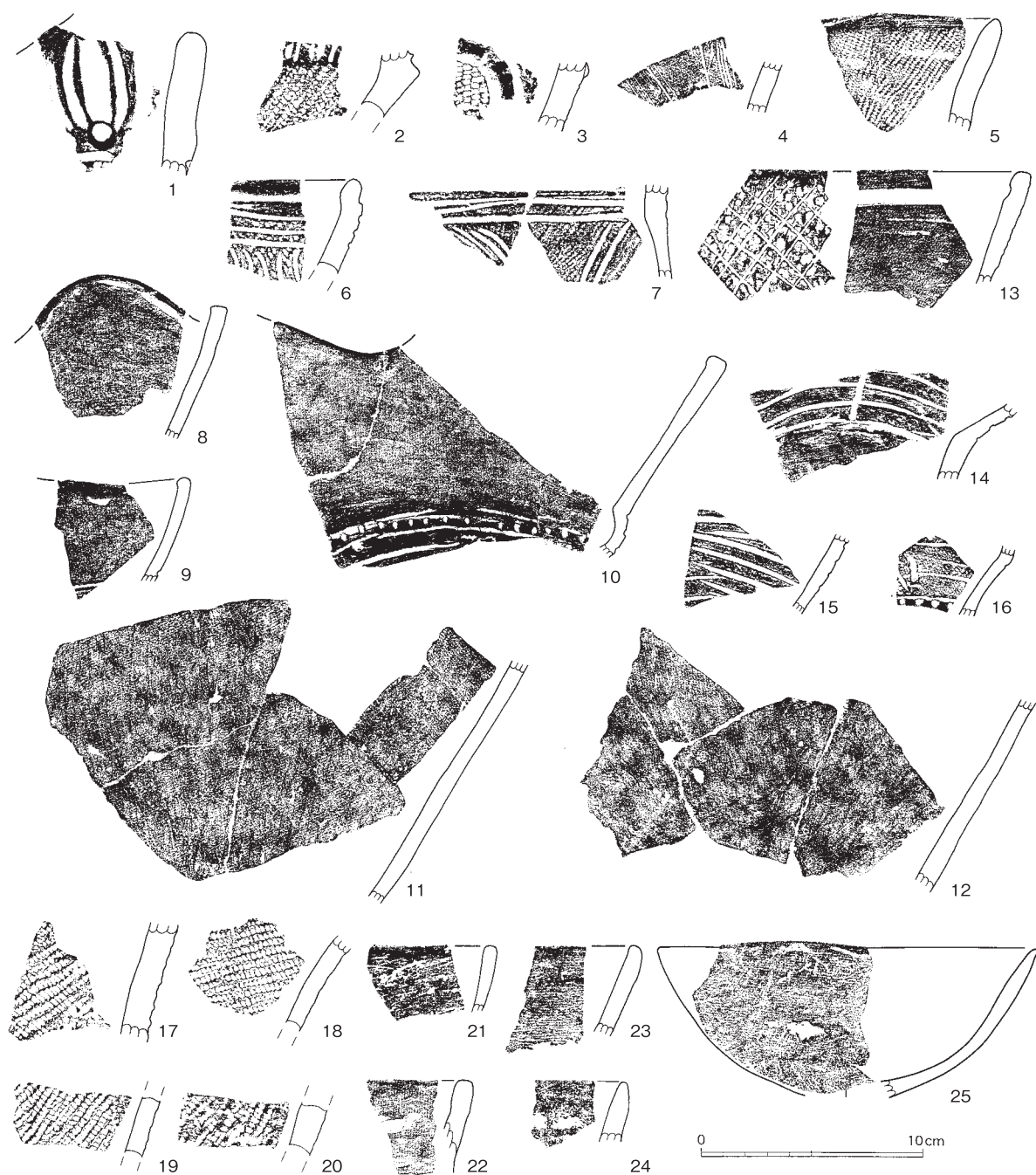
SK-5015 出土の土器（第 26 図）

3 は、凹線が沿う曲線的な隆帯がみられ、加曽利 E 式後半の土器と思われる。地文は 2 段 RL の縄による単節縄文である。胎土は粗く、黒雲母や白色の礫を含む。焼成はやや良好で、色調は表面がにぶい赤褐色、裏面が明赤褐色である。1 は綱取式系土器の口縁部無文帯の破片である。小波頂部から無文帯下の横位の隆帯に向かって、対弧状の隆帯を垂下させる。隆帯の背は沈線で割り、起点に刺突を加える。胎土は粗く、白色粒子や粗粒の砂含む。焼成はやや良好で、色調は表面が黄褐色、裏面が灰色である。2 は 2 段 LR の横位施文による単節斜縄文を地文とし、屈折部にキザミ目を巡らす。胎土は白色・黒色粒子を含む。焼成はやや良好で、色調は表面がにぶい黄橙色、裏面が灰黄褐色である。4 は櫛歯状工具による条線文がみられる。胎土は白色粒子・砂粒を含む。焼成は良好で、色調は表面が橙色、裏面がにぶい褐色である。5 は口縁から 2 段 LR の縄の横位施文による単節斜縄文を施す。胎土は白色粒子・砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、色調は表面が黒褐色、裏面が灰黄褐色である。4・5 は中期後半から後期初頭と思われる。

6・7 は縄文地に集合沈線を施す堀之内 1 式土器である。6 は、1 段 R の縄の横位施文による無節斜縄文を地文とし、口縁に沿う 4 条の沈線と以下の縦方向の集合沈線がみられる。胎土は白色粒子・砂粒を含む。焼成は良好で、色調は表面が暗灰黄色、裏面がにぶい橙色である。7 は、2 段 LR の横位施文による単節斜縄文を地文とし、頸部に数条の沈線を巡らし、以下逆 U 字状の集合沈線を垂下させたと思われる。胎土は白色粒子・砂粒を含む。焼成は良好で、色調は表面が黒褐色、裏面がにぶい黄橙色である。

8～16 は加曽利 B 2 式前後に比定される。8～10 は同一個体と思われる。花卉状に大きく開く無文の口縁部下の括れ部に、両脇に沈線を施した列点を巡らし、以下内湾気味に膨らむ体部に、横位の沈線を充填したと思われる。胎土は緻密で、細かな黒雲母・石英・白色粒子が少量含まれる。焼成は良好で、色調は 8・9 の表面が黒褐色、裏面が褐灰色、10 の表面が灰黄褐色、裏面が黒褐色である。14・15 もほぼ同様の器形と思われる。体部には横位の沈線を密に施している。胎土は 8～10 と同質だが、石英・白色粒子が若干多い。焼成は良好で、色調は 14 の表面が赤褐色、裏面がにぶい赤褐色、15 が表裏面ともに黒褐色である。16 は対弧状の沈線で区切った横帯文と横位の列点がみられる。縄文は 2 段 LR の縄の横位施文による単節斜縄文である。胎土はやや粗く、石英粒子・砂粒を含む。焼成は良好で、色調は表面が褐色、裏面が黒褐色である。13 は、2 段 RL の縄の横位施文による単節斜縄文を地文とし、格子目状の沈線を施す。口縁部内面に 1 条の沈線を巡らす。胎土は緻密で、白色粒子を含む。焼成は良好で、色調は表面が赤褐色、裏面がにぶい褐色である。11・12 は無文の体部破片である。胎土は緻密で、石英・白色粒子を少量含む。焼成は良好で、色調は表面がにぶい褐色、裏面が黄灰色である。なお、胎土・焼成等から 8～10、14～16 と同類と考えた。

17～20 は単節斜縄文のみがみられる体部破片で、17 は 2 段 RL の縄を縦位施文し、18～20 は 2 段 LR の縄を横位施文している。中期後半から後期前葉と思われるが詳細な時期は不明である。胎土は金雲母・石英

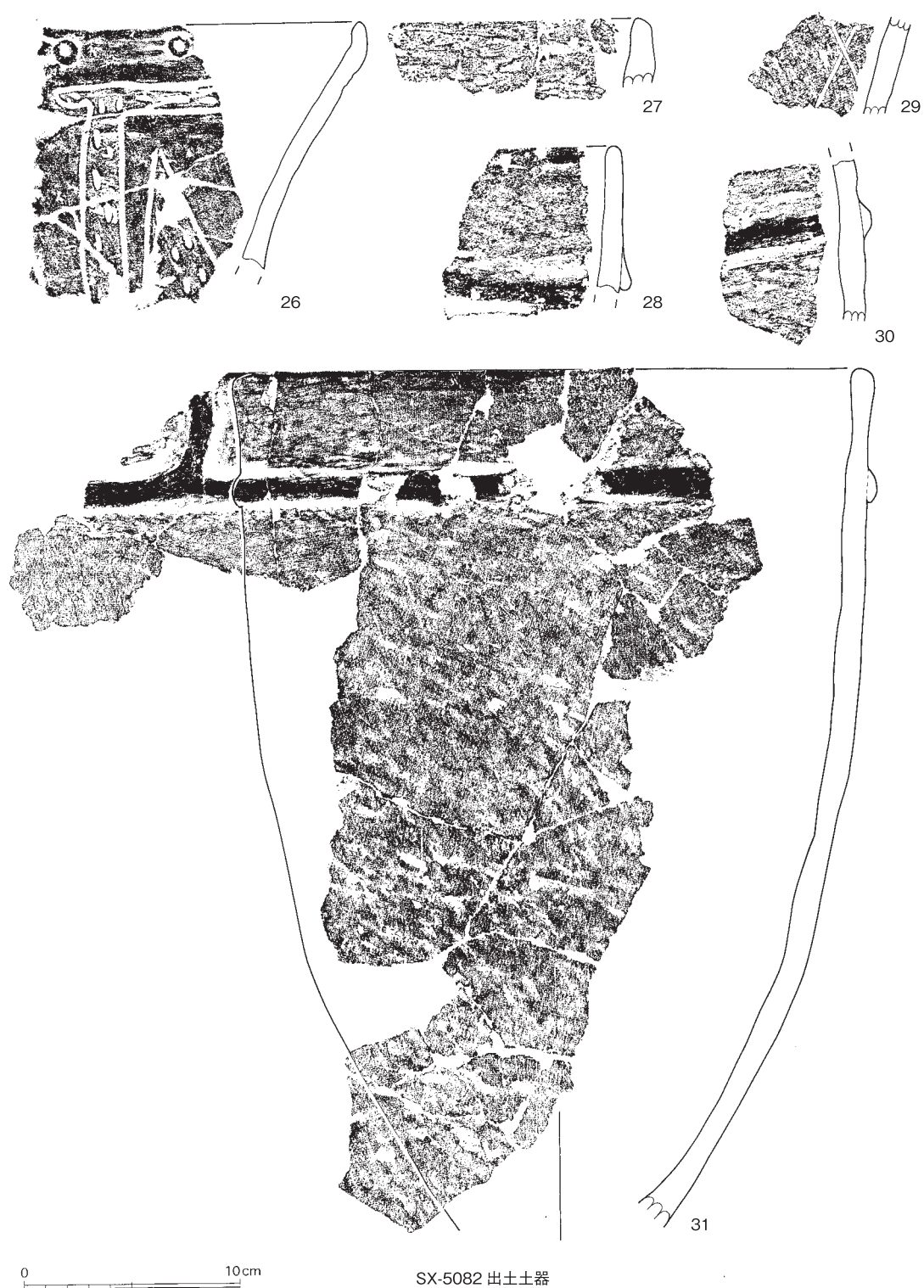


SK-5015 出土土器

第 26 図 縄文土器① (1/3)

粒子・粗粒の砂を含む。焼成はやや良好で、色調は 17～19 の表面が黒褐色、裏面がにぶい黄褐色、20 の表面が橙色、裏面がにぶい褐色である。

21～25 は無文の口縁部破片である。21～24 は網取式系土器の口縁部無文帯かもしれない。胎土は白色粒子・粗粒の砂を含み、1 の胎土と近似する。焼成はやや良好で、色調は 21 の表面がにぶい黄橙色、裏面が黄灰色、22・23 の表面がにぶい黄橙色、裏面が黄橙色、24 の表面が橙色、裏面がにぶい褐色である。25 は、碗形の器形や器面整形から加曽利 B 式期以降と思われる。胎土はやや密で、黒雲母・白色粒子・細粒の砂が含まれる。焼成は良好で、色調は表面が暗灰黄色、裏面が黒褐色である。



第 27 図 縄文土器② (1/3)

SX-5082 出土の土器（第 27 図）

26 は帯状区画文内部に列点を施す称名寺式土器である。内側に屈折する口縁部に、刺突を加えた付点を起点として横位の沈線を施している。胎土は緻密で、細粒の黒雲母・石英・白色粒子を含む。焼成は良好で、色調は表面が橙色、裏面がにぶい橙色である。29 は体部に格子目状の沈線を施す。胎土は黒雲母・白色粒子・細粒の砂を含む。焼成はやや良好で、色調は表面がにぶい黄橙色、裏面が灰黄褐色である。27～31 は口縁部無文帯下に隆帯を巡らす綱取式系土器である。30・31 は体部を無文とする。30 の胎土は粗く、黒雲母・白色粒子・粗粒の砂を含む。色調は表裏面ともににぶい黄褐色である。31 は器形復原可能な個体で、推定口径 28.6 cm、残存高 40.1 cm、器厚 0.9～1.3 cm である。口縁から無文帯下の隆帯に「ノ」の字状の隆帯を垂下させる。胎土は緻密で、細粒の黒雲母・石英・白色粒子を含む。色調は表面が浅黄色であるものの、大部分が煤により黒色じみる。裏面はにぶい橙色である。

遺構外出土の土器（第 28・29 図）

第 1 群 黒浜式土器（第 28 図 32～34）

32～34 は、胎土に多量の繊維を含み、器内面の整形が入念で、単節斜縄文がみられる黒浜式の体部である。32 は 2 段 RL の縄の横位施文、33 は 2 段 LR の縄の縦位施文、34 は 2 段 LR と RL の横位施文による。胎土は粗く、繊維に加え、石英・白色粒子・粗粒の砂を微量に含む。焼成はやや良好で、色調は 32 の表面がにぶい黄橙色、裏面がにぶい黄褐色、33 が表裏面ともににぶい赤褐色、34 の表面がオリーブ黒色、裏面が黒褐色である。出土位置は 32 が VI-2（東）区一括、33 が SK-5089、34 が L-44 グリッドである。

第 2 群 加曽利 E 式土器（第 28 図 35～40）

35～37 は沈線を沿わせた隆帯で文様を施す加曽利 E I 式新段階～Ⅱ式の口縁部破片である。35 は渦巻文と区画文を交互に配す。37 は 2 条の隆帯でクランク文もしくは弧状文を配したと思われる。胎土は 35 が金雲母・白色粒子、36 が黒雲母・白色粒子、38 が石英・長石粒子を含む。焼成はやや良好で、35 の表面がにぶい褐色、裏面がオリーブ黒色、36 の表面がにぶい黄褐色、裏面が灰色、37 の表面がにぶい黄褐色、裏面が黄褐色である。出土位置は 35 が SK-5086、36 が SK-5110、37 が SK-5028 である。

38・39 は磨消懸垂文を垂下させる加曽利 E Ⅱ～Ⅲ式の体部破片である。胎土はやや粗く、38 は粗粒の砂、39 は黒雲母・黒色粒子を含む。焼成は概ね良好で、色調は 38 の表面が黄灰色、裏面がにぶい黄褐色、39 の表面がにぶい黄褐色、裏面がにぶい黄褐色である。出土位置は 38 が SE-5031、39 が SE-5086 である。縄文はいずれも単節斜縄文で、35 が 2 段 LR の横位施文、36・39 が 2 段 RL の縦位施文、37 が 2 段 RL の横位施文、38 が 2 段 LR の縦位施文である。

40 は 1 段 L の縦位施文による無節斜縄文を施す体部破片である。胎土は白色粒子・砂粒を含む。焼成はやや良好で、色調は表面がにぶい褐色、裏面が黄灰色である。SE-5035 出土。

第 3 群 器台形土器（第 28 図 41）

41 は脚台部で、円孔がみられる。胎土は金雲母・石英粒子を含む。色調はにぶい赤褐色。SK-5062 出土。

第 4 群 後期初頭の土器

1 類 捻転状突起（第 28 図 42）

42 は実測図正面が土器の内側を向く。円盤状の本体中央に大きな貫通孔を有し、頂部に小さな貫通孔を配す。片側に、起点と終点に刺突を配した沈線がみられる。胎土は黒雲母・白色粒子・砂粒を含む。色調は表裏面ともに明赤褐色である。SE-5080 出土。

2 類 带状区画文を持つ称名寺式土器 (第 28 図 43・44)

43 は带状区画文内部に列点、44 は带状区画文内部に 2 段 LR の縦位施文による単節斜縄文を施す。44 の縄文は区画線より前に施文している。胎土は 43 が 26 に酷似し、44 は石英粒子・砂粒を含む。焼成はやや良好で、色調は 43 が表裏面ともに灰白色、44 表面がにぶい橙色、裏面が褐灰色である。出土位置は 43 が SK-5089、44 が SE-5086 である。

3 類 口縁部無文帯下に隆帯を巡らす綱取式系土器 (第 28 図 45～48)

45 は小波頂部から縦位の隆帯を垂下させる。上下端に大きな刺突を加え、その間の隆帯背に沈線を施している。体部には称名寺式にみられる带状区画文を垂下させ、内部に列点を施している。胎土は粗粒の石英・砂を含む。焼成は良好で、色調は表面が黄灰色、裏面がにぶい褐色である。SK-5091 出土。46・47 は口縁部無文帯に「ノ」の字状の隆帯を配す。46 は「ノ」の字状隆帯の背を沈線で割り、47 は「ノ」の字状隆帯の両脇に沈線を沿わせている。胎土は 30 に酷似する。焼成は良好で、46 の表面は橙色、裏面は明赤褐色、47 の表面は灰黄色、裏面はにぶい橙色である。出土地点は 46 が SK-5089、47 が SE-5086 である。48 は、体部に粗雑な沈線で斜格子文を配したと思われる。胎土は黒色粒子・粗粒の砂を含む。焼成はやや良好で、色調は表面が灰黄褐色、裏面がにぶい橙色である。N-47 グリッド出土。

4 類 無文地に沈線を施す土器 (第 28 図 49・50)

49・50 は带状区画内を配すが、その内部充填しない。関東地方西南部に多い、下北原式と呼ばれる称名寺式系の土器と思われる。胎土は黒雲母・粗粒の砂を含む。焼成はやや良好で、色調は 49 の表面が灰黄色、裏面がにぶい黄橙色、50 の表面が黒褐色、裏面がにぶい橙色である。49 は SK-5065、50 は M-46 グリッド出土。

第 5 群 後期前葉の土器

1 類 縄文地に沈線を施す堀之内 1 式土器 (第 28 図 51～57)

51 は口縁部に刺突を配し、これを起点として横位に沈線を巡らす。刺突の下には沈線による蕨手状の沈線を垂下させる。52 は波状沈線、53 は波状沈線を中心とする集合沈線を縦位に垂下させる。51～53 の胎土は、白色粒子・砂粒を含む。焼成はやや良好で、色調は表裏面ともに、にぶい黄橙色である。51 は SK-5019、52 は SE-5080、53 は SK-5018 出土。54 は口縁に 1 条の沈線を巡らし、以下斜位の集合沈線を密に施す。56 はキザミを加えた縦位の隆帯で器面を区画し、縦位、横位に集合沈線を配す。57 は緩やかに括れる頸部に数条の沈線を巡らす。54～57 の胎土は 51～53 に酷似するが、黒雲母片・石英粒子の混入が多い。焼成は概ね良好で、色調は 52 の表面がにぶい黄橙色、裏面がにぶい黄橙色、53 の表面が灰黄褐色、裏面がにぶい黄橙色、54 の色調は表裏面ともに、にぶい橙色、55 の表面がにぶい黒褐色、裏面がにぶい褐色、56 の色調は表裏面ともに、にぶい橙色、57 の表面がにぶい橙色、裏面が浅黄色である。出土位置は 54 が SK-5037、55 が SK-5021、56 が SK-5045。57 が VI-2 (東) 区一括である。地文の縄文は、51 が 2 段 RL の横位施文による単節斜縄文、52 が 2 段 RL の縦位施文による単節斜縄文、53～57 が 2 段 LR の横位施文による単節斜縄文で、55 は原体の種類が判別できなかった。

2 類 縄文地に櫛歯状工具による曲線文を施す破片 (第 28 図 58)

58 は、2 段 LR の横位施文による単節斜縄文を地文とし、櫛歯状工具で流水状の条線文を描く。胎土は白色粒子・砂粒を含む。焼成はやや良好で、表面がにぶい黄橙色、裏面が黄橙色である。SE-5033 出土。

第 6 群 中期末葉から後期前葉にかけての土器

中期末および上記第 4・5 群に伴うと思われるが、詳細な時期を特定できなかったものを一括する。

1 類 有文の破片（第 28 図 59～64）

59 は、口端に平坦な面を作出し、横長の刺突を加える。器表面には 2 段 RL の縦位施文による単節斜縄文を施す。胎土は金雲母・石英粒子・粗粒の砂を含む。色調は表面がにぶい黒褐色、裏面が灰黄褐色である。SK-5069 出土。60 は、口縁部下の狭い範囲を無文とし、以下 2 段 LR の横位施文による単節斜縄文を施す。胎土は白色粒子・砂粒を含む。焼成は良好で、色調は表面がにぶい灰褐色、裏面が灰褐色である。SK-5025 出土。61 は、肥厚させた口縁部下に沈線を巡らし、狭い無文帯を挟んでキザミを加えた隆帯を巡らし、その両側に沈線を沿わせる。62 は、帯状区画文風の沈線がみられるが、2 段 RL による単節縄文はその内外にみられる。61・62 の胎土は黒雲母・粗粒の砂を含む。焼成は概ね良好で、色調は 61 の表面がにぶい黄橙色、裏面が褐灰色、62 の表面が明赤褐色、裏面が灰褐色である。出土位置は 61 が L-44 グリッド、62 が SE-5086 である。63・64 は無文地に沈線による簡素なモチーフがみられる。胎土は黒色・白色粒子を含む。焼成は良好で、色調は 63 の表裏面ともに褐灰色、64 の表面が黒褐色、裏面が灰黄褐色である。出土位置は 63 が SD-5001、64 が SE-5086 である。なお 62～64 は称名寺式かもしれない。

2 類 縄文のみがみられる破片（第 28 図 71～74）

71 は 2 段 RL の縄を縦位、横位に施文した異方向縄文、72～74 は 2 段 RL の縄の縦位施文による単節斜縄文を施している。71～73 の胎土は黒雲母・粗粒の砂をやや多量に含むが、74 は少ない。焼成は概ね良好で、色調は 71 の表面が灰黄褐色、裏面がオリーブ黒色、72 の表面がにぶい黄橙色、裏面が褐灰色、73 の表面がにぶい黄橙色、裏面が橙色、74 の表面が橙色、裏面がにぶい黄橙色である。出土位置は 71 が SA-5008P6、72 が SA-5002、73 が SE-5080、74 が SE-5032 である。

3 類 櫛歯状工具による縦位の条線文がみられる破片（第 28 図 65～68）

65・66・68 は全面に縦位の条線文が施されたと思われる。胎土は 71～73 に酷似する。焼成は良好で、色調は 65・66 の表面が黄灰色、裏面がにぶい黄橙色、68 は表裏面ともににぶい黄橙色である。65 は S K -5081、66 は SE-5086、68 は L -45 グリッド出土。67 は斜位の条線を縦方向に配している。色調は表面がにぶい黄橙色、裏面が灰黄褐色である。L -64 グリッド出土。

4 類 櫛歯状工具による曲線的な条線文がみられる破片（第 28 図 69・70）

69 は、体部下位の破片と思われ、条線文の下端がみられる。胎土は黒雲母・白色粒子・砂粒を含む。焼成はやや良好で、色調は表面がにぶい橙色、裏面がにぶい黄褐色である。S K -5061 出土。70 は、ずらした対弧状の条線がみられるが、全体の構成は不明である。胎土は砂粒と微量の黒雲母・石英粒子が含まれる。焼成はやや良好で、色調は表面が灰黄褐色、裏面が黒色である。S K -5081 出土。

5 類 無文の破片（第 28 図 75～77）

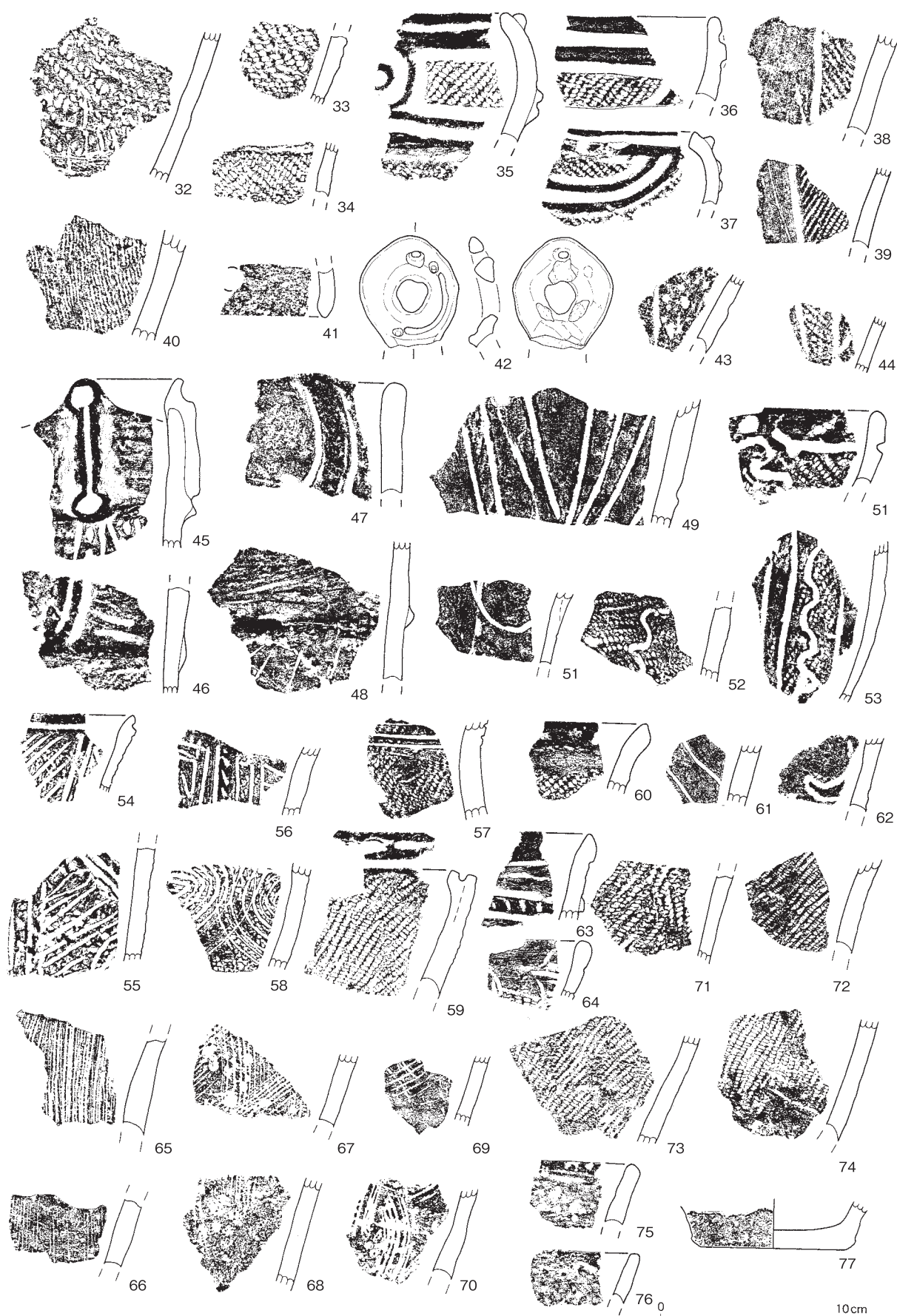
75・76 は無文の口縁部破片である。75 は口部断面形がやや外削ぎ状を呈し、網取式系土器の口縁部無文帯の破片かもしれない。胎土は黒雲母・白色粒子・砂粒を含む。焼成はやや良好で、色調は 75 の表面がにぶい黄橙色、裏面がにぶい橙色、76 の表面がにぶい黄橙色、裏面が褐灰色である。出土地点は 75 は S K -5081、76 は SE-5086 である。

77 は底部破片である。底面に圧痕等はみられない。胎土は白色粒子・粗粒の砂をやや多量に含む。焼成は良好で、色調は表面がにぶい赤褐色、裏面が灰黄褐色である。SE-5064 出土。

第 7 群 加曽利 B 式土器

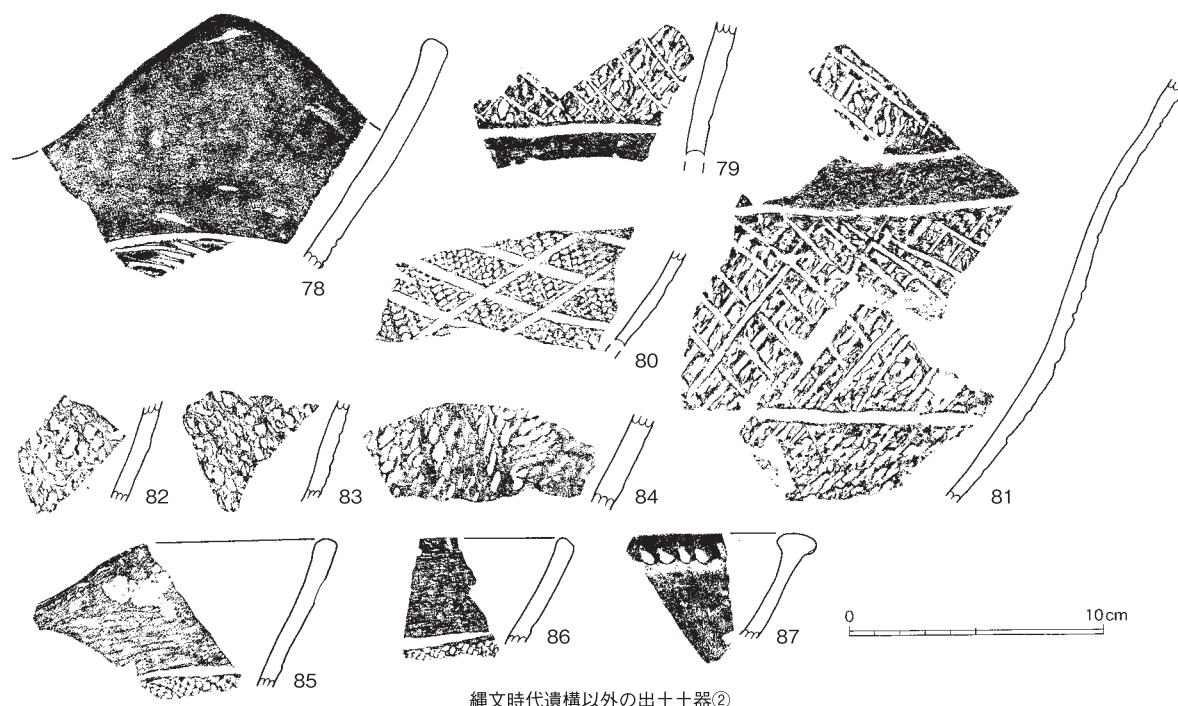
1 類 横位の綾杉状沈線がみられる土器（第 29 図 78）

大きく花卉状に外反する無文の口縁部下に横位の綾杉状沈線を施す。加曽利 B2 式に比定される。78 の胎



縄文時代遺構以外の出土土器①

第 28 図 縄文土器③ (1/3)



第 29 図 縄文土器④ (1/3)

土は緻密で、細かい黒雲母・石英・白色粒子が含まれる。焼成は良好で、色調は表面が黒褐色、裏面が暗灰黄色である。SE-5086 出土。

2 類 縄文地に格子目文がみられる土器（遠部第 4 類土器）（第 29 図 79～81）

79・81 は、無文帯と上下を沈線で画した斜格子目文帯を横位に配す土器である。地文は、2 段 LR の横位施文による節の粗い単節斜縄文である。80 は、2 段 RL の横位施文による単節斜縄文で、79・81 より浅い沈線で斜格子目文を描いている。いずれも加曾利 B2 式に比定される。胎土は 78 に酷似する。焼成は良好で、色調は 79 の表面が暗灰黄色、裏面が黄灰色、80 の表面が黒褐色、裏面が暗灰黄色、81 の表面が黒褐色、裏面が黒褐色である。SE-5086 出土。

3 類 広い無文帯下に縄文帯がみられる口縁部破片（第 29 図 85・86）

85・86 は、波状の口縁を無文とし、以下水平方向に縄文帯を配している。縄文は 2 段 RL の横位施文による単節斜縄文で、沈線より前に施文している。胎土は 78 に酷似する。焼成は良好で、色調は 85 の表面が灰黄褐色、裏面がにぶい黄褐色、86 の表面がにぶい褐灰色、裏面がにぶい黄褐色である。SE-5086 出土。

4 類 口端にキザミ目をもち、以下無文帯とする土器（第 29 図 87）

87 は、口端が内外に突出し、外側にはキザミを加える。以下の無文部は入念に整形している。胎土は 78 に酷似する。焼成は良好で、色調は表裏面ともに黒褐色である。SE-5086 出土。

5 類 節の粗い単節斜縄文がみられる破片（粗製土器の体部）（第 29 図 82～84）

いずれも本群に特徴的な節の粗い単節斜縄文がみられる。2 段 LR の縄を横位施文している。胎土は 78 に酷似するが、白色粒子・砂粒の混入量が若干多い。焼成は良好で、82 の表面がにぶい褐色、裏面が明赤褐色、83 の表面がにぶい褐色、裏面が褐色、84 の表面がにぶい黄褐色、裏面が黄灰色である。SE-5086 出土。

〔2〕平安時代以降の遺物

本遺跡から出土した遺物としては土師器、土師質土器小皿、内耳土器、播り鉢、瓦質土器壺、瓦質土器獣脚（火鉢？）須恵質土器鉢類、古瀬戸窯産陶器、美濃窯産陶器（志野皿類）、青磁（鎗蓮弁文碗小片、折縁皿小片）、砥石、石鉢、石臼、古銭（至大通寶？）がある。

なお遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

土器・陶磁器（小型品）1/3 土器（大型品）1/4 砥石1/3 石臼1/4 古銭1/1

遺物観察表の視点（第30～33図。第7～10表）

- ① 大きさの項目に記してある略号は次の通りである。

口：口径 底：底径 高：器高または現存高

なお（ ）で示した数値は推定値または残存値である。計測不能の時は—とした。

- ② 遺物の遺存率は、図示した部分の推定円周に対する割合である。

- ③ 胎土に含まれる好物等の略記法は以下のとおりである。

鉱物

A：白色粒子 B：黒色粒子 C：灰色粒子 D：灰白色粒子 E：灰黒色粒子 F：赤褐色粒子

G：橙色粒子 H：石英粒子 I：白色雲母粒 J：金色雲母粒 K：小礫

含有量

1：多い 2：やや多い 3：やや少量 4：少量

（例）A 1、J 4 白色粒子多い、金色雲母粒少量

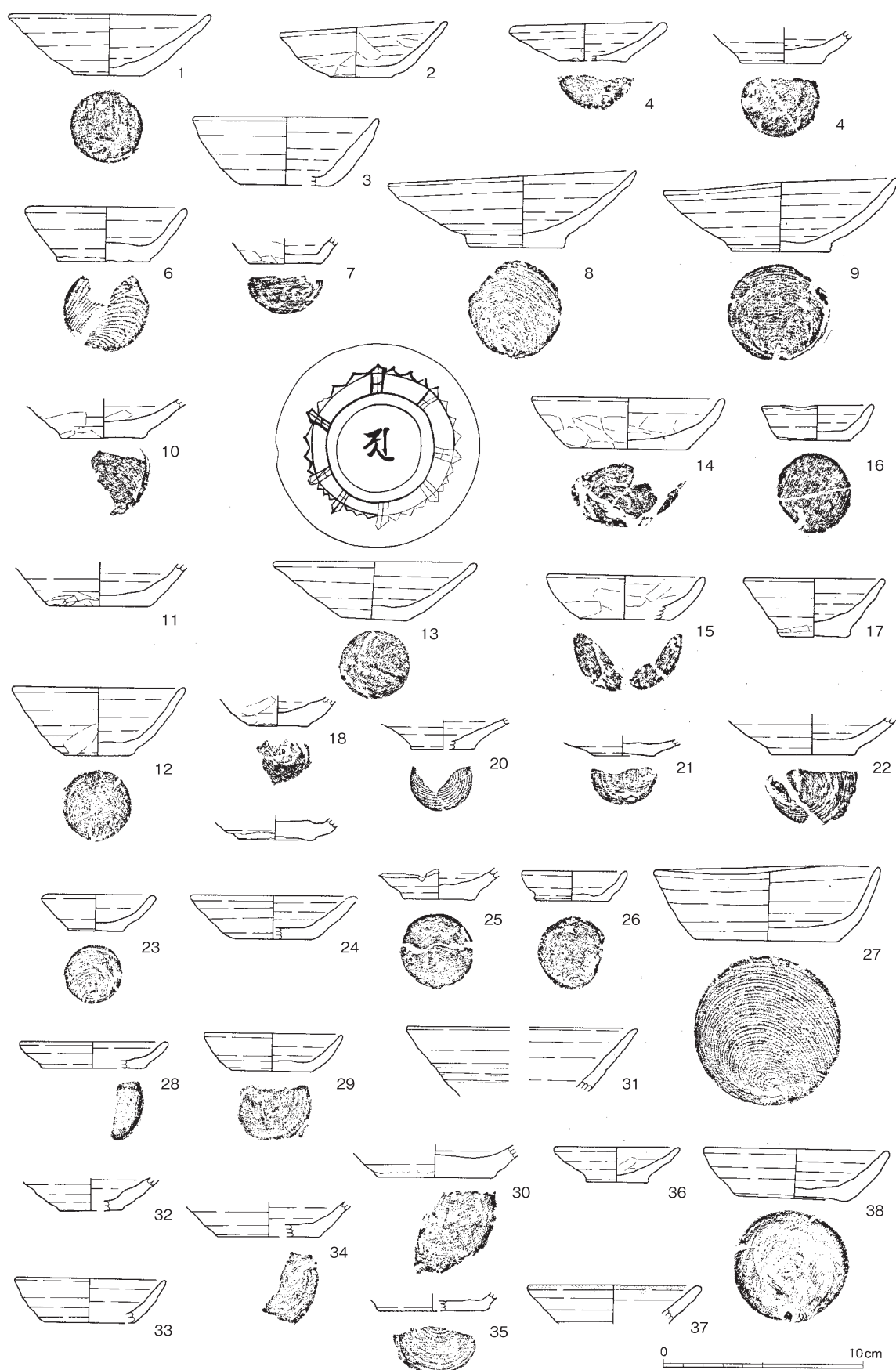
- ④ 色調・焼成の項目は、上から色調・焼成について記述してある。

- ⑤ 焼成は、硬質・やや硬質・やや軟質・軟質の4ランクに分けた。

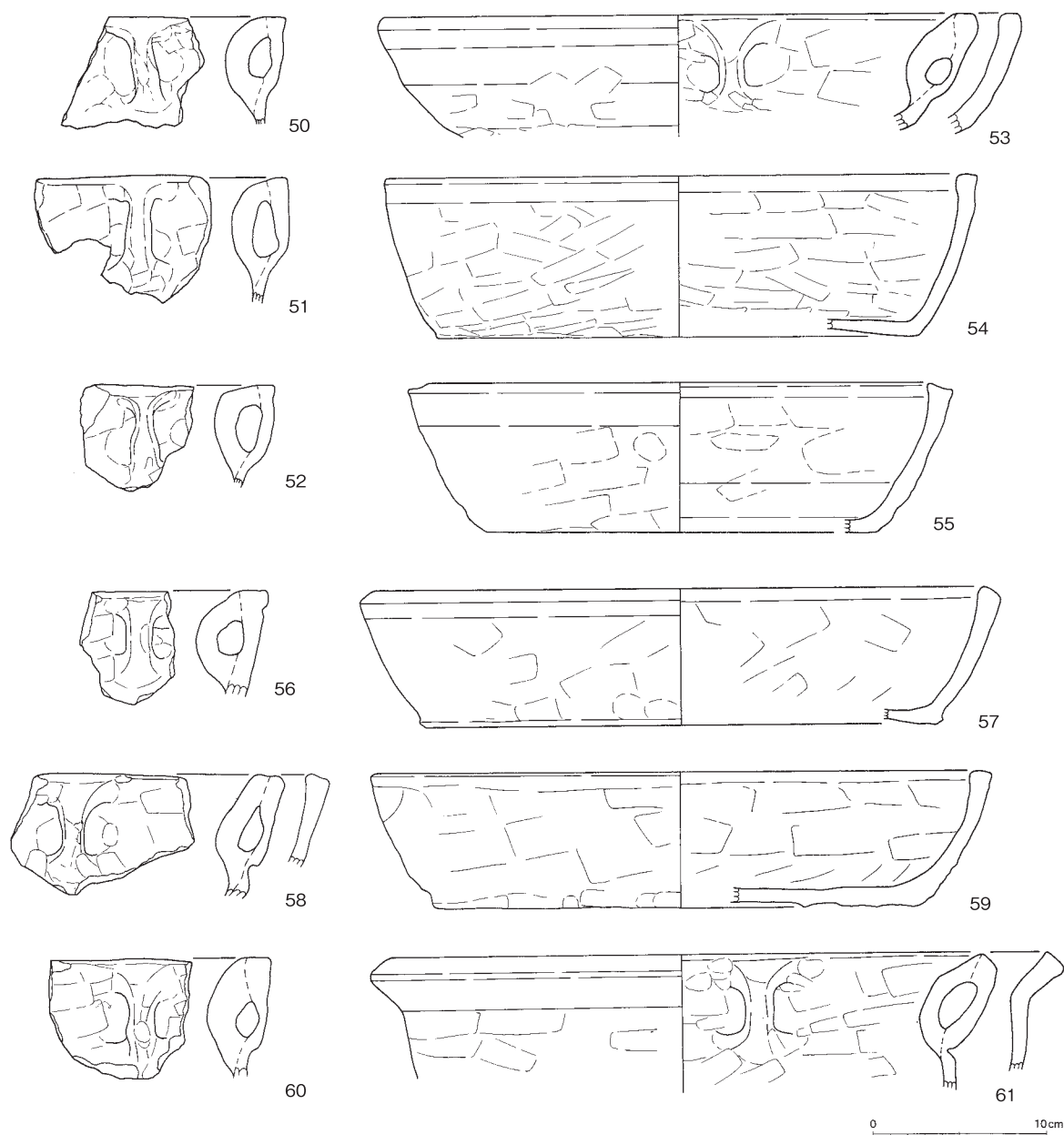
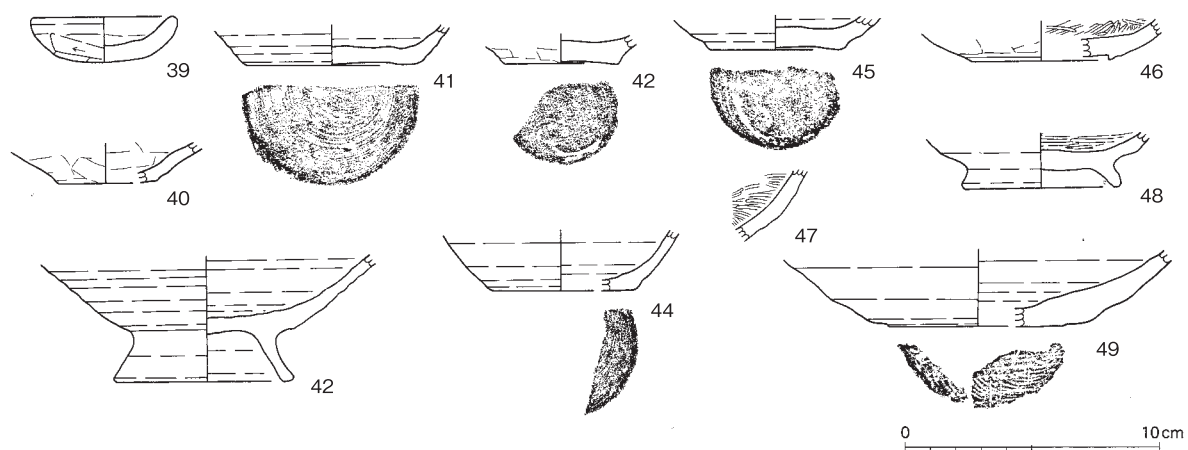
- ⑥ 色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1994年）による。

- ⑦ 遺物出土位置は「備考」の項目に記入したが、その出土位置が明らかなものは各住居跡の平面図中に示した。なお平面図中の遺物番号は遺物観察表に記した遺物番号に対応する。

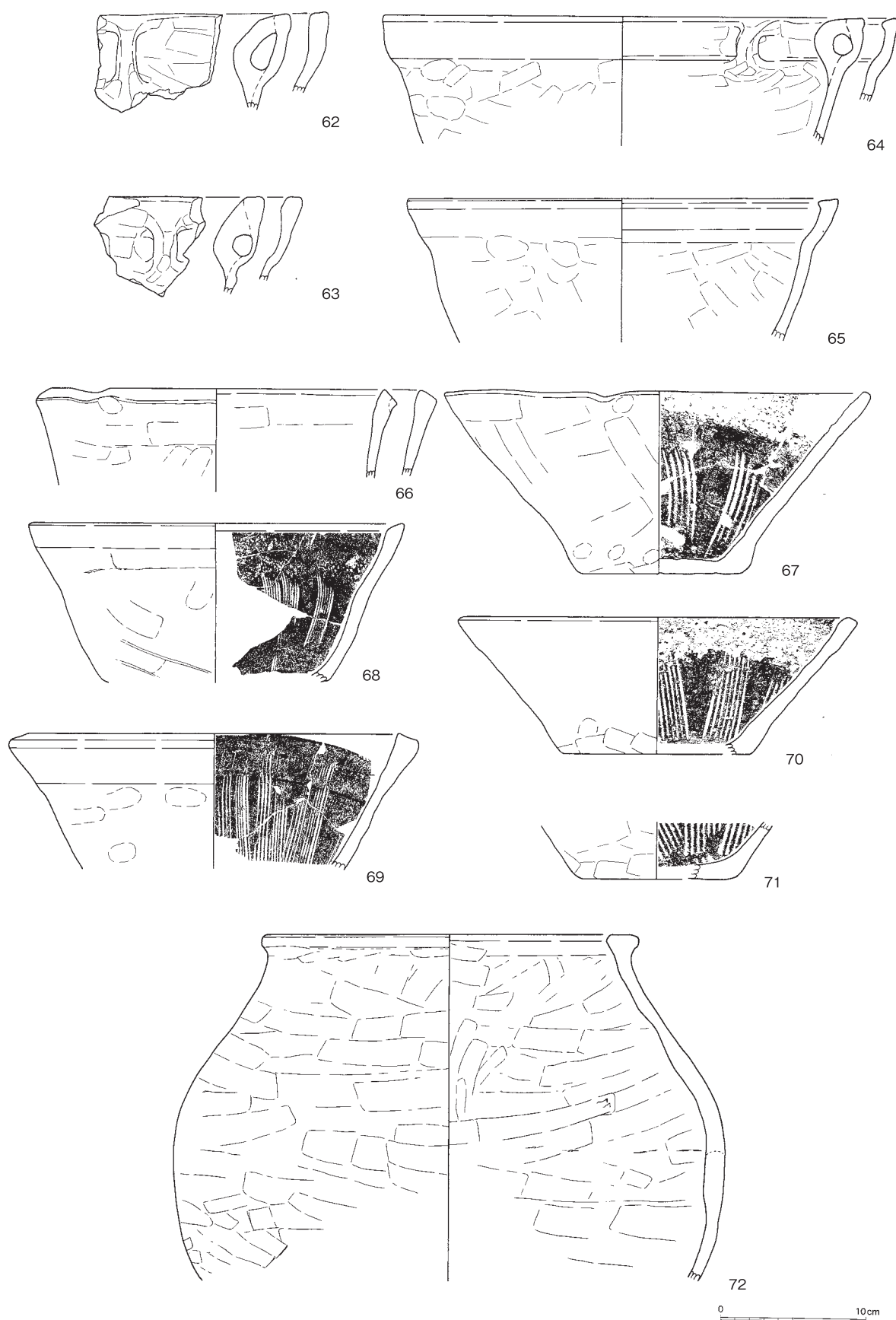
本書では、遺物のうち、砥石、石臼、古銭（至大通寶？）については観察表形式を用いず文章により遺物の特徴を記述する。



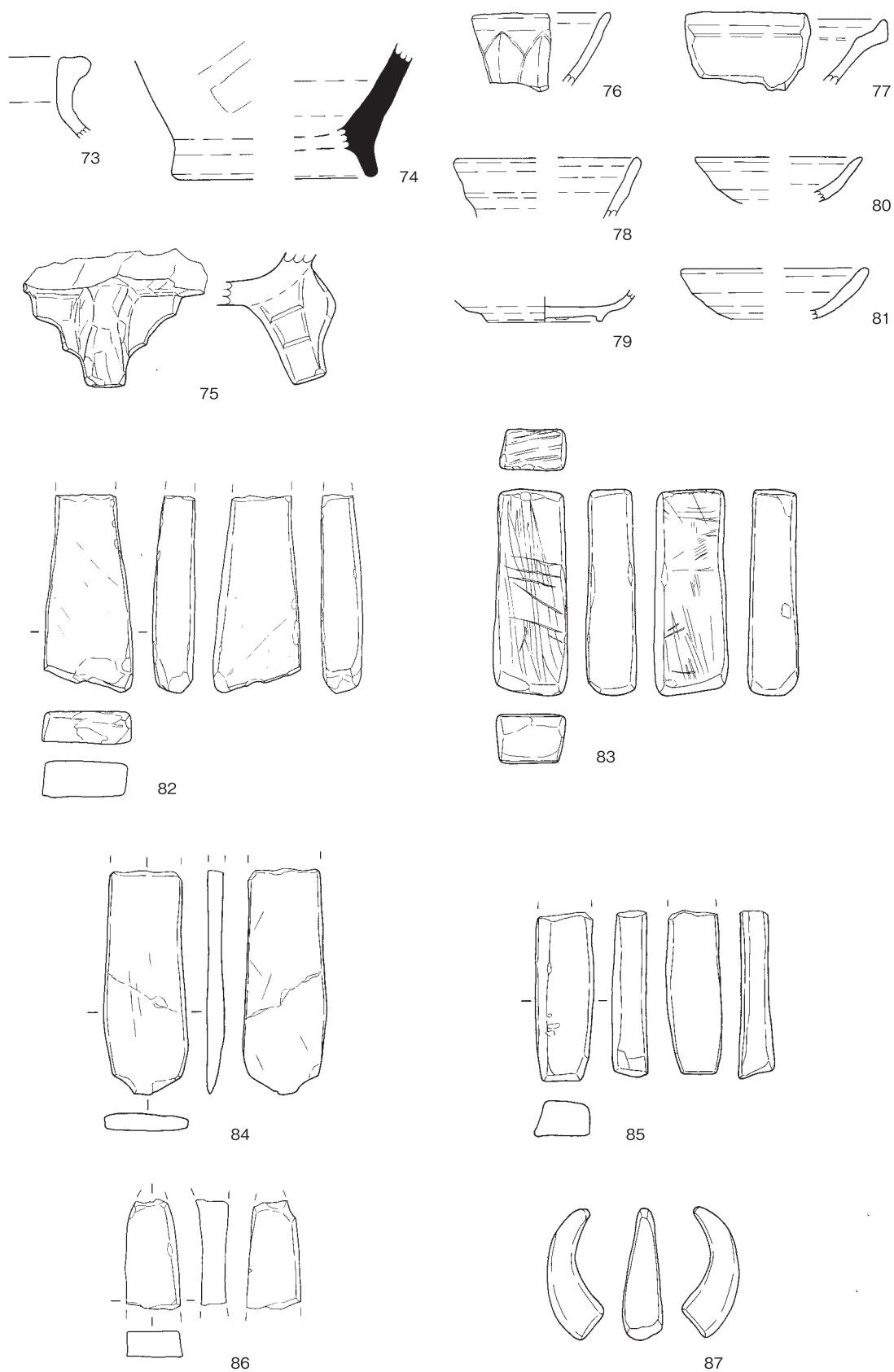
第30図 中世遺物① (1/3)



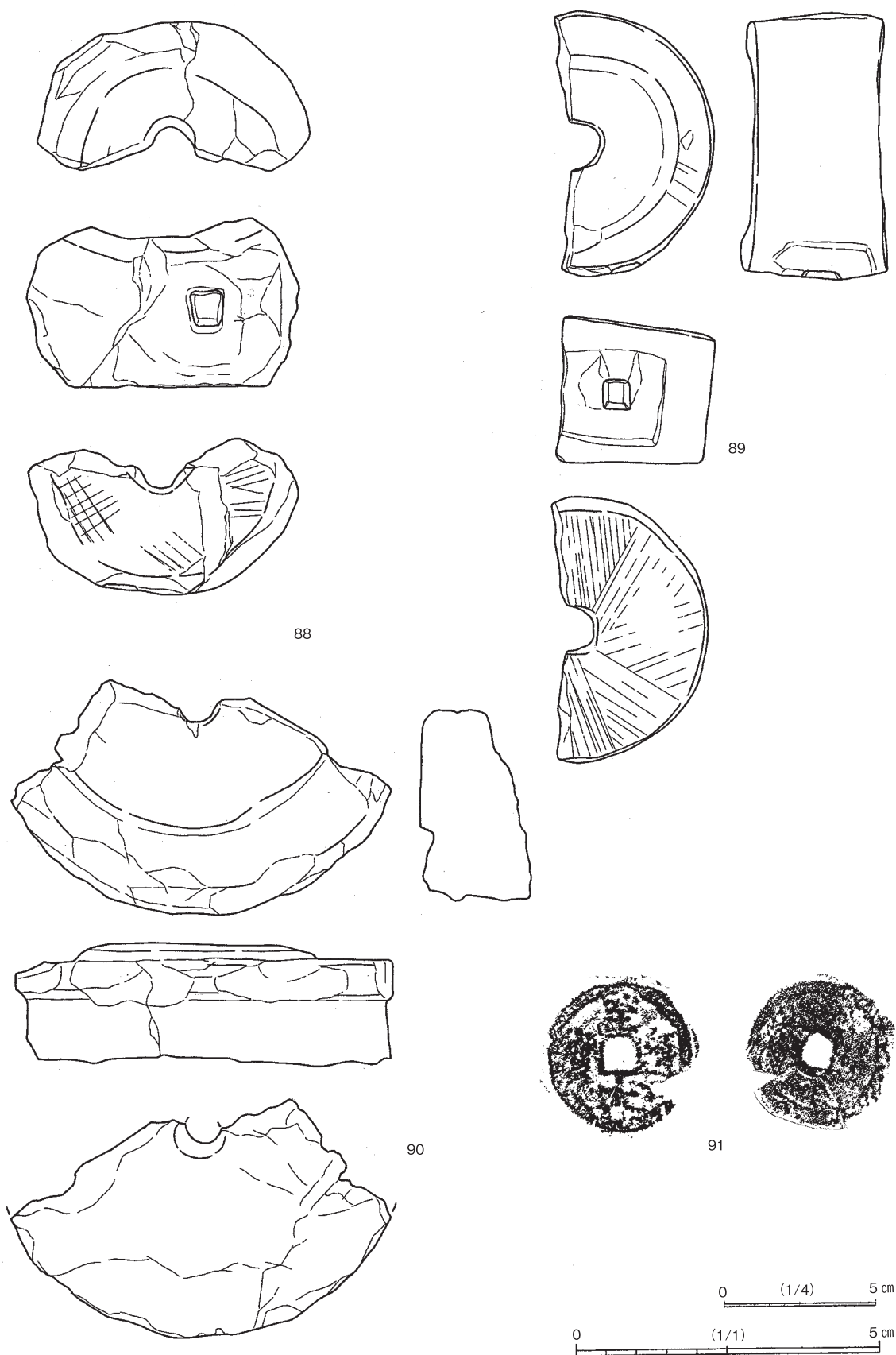
第 31 図 中世遺物② (1/3・1/4)



第 32 図 中世遺物③ (1/4)



第 33 図 中世遺物④ (1/3)



第 34 図 中世遺物⑤ (1/4・1/1)

第7表 遺物観察表（1）

	器 種	大きさ	特 徴	胎 土	色調・焼成	備 考
1	土師質土器 小皿	口 11.4 高 3.0 底 3.4	内・外面口口口成形。底部外面一方向ナデ（回転ヘラ切り痕がすかに残る）。口縁部～体部3/4。底部完周。	ややきめ細かい B3,E3	内・にぶい黄橙色 外・にぶい黄橙色 やや硬質	SD-5001出土
2	土師質土器 小皿	口 (8.0) 高 2.9 底 3.6	内・外面口口口成形。体部・底部外面ナデ。口縁部～底部1/2残存。	きめ細かい B3,E3,F4	内・にぶい橙色 外・にぶい橙色 やや硬質	SD-5002出土。内・外面に被熱痕(特に内面被熱目立つ)。
3	土師質土器 小皿	口 (9.4) 高 3.4 底 (4.7)	内・外面口口口成形。底部外面ナデ。口縁部～底部1/4。	きめ細かい A4,B3	内・淡黄色 外・浅黄橙色 やや硬質	SD-5002出土
4	土師質土器 小皿	口 (8.6) 高 1.9 底 (4.0)	内・外面口口口成形。底部回転糸切り。口縁部～底部1/2。	ややきめ細かい A3,B2,H3	内・にぶい黄橙色 外・灰白色 やや軟質	SD-5004出土
5	土師質土器 小皿	口 - 高 (1.8) 底 3.8	内・外面口口口成形。底部回転糸切り後、周縁ナデ。内面スス付着。体部1/4、底部3/4。	きめ細かい E2,F4	内・灰白色 外・淡黄色 やや軟質	SK-5005出土
6	土師質土器 小皿	口 (8.3) 高 2.8 底 4.7	内・外面口口口成形。底部回転糸切り未調整。口縁部～体部1/4、底部4/5。	きめ細かい A2,B2,F4	内・橙色 外・橙色 やや硬質	SA-5008 P3(a)出土
7	土師質土器 小皿	口 - 高 (1.4) 底 (3.6)	内面口口口成形。外面ナデ。底部外面多方向手持ちヘラケズリ。体部～底部1/2残存。	ややきめ細かい E2,F4	内・浅黄橙色 外・にぶい黄橙色 やや軟質	SK-5010出土
8	土師質土器 小皿	口 12.7 高 4.0 底 4.8	内・外面口口口成形。底部回転糸切り未調整。口縁部～体部3/4。底部完周。	ややきめ細かい C3.E2.H3	内・灰白色 外・灰白色 やや軟質	SK-5014出土
9	土師質土器 小皿	口 11.4 高 3.8 底 4.9	内・外面口口口成形。底部回転糸切り未調整。口縁部～底部3/4残存。底部完周。	ややきめ細かい A4.E2.F2	内・橙色 外・橙色 やや軟質	SK-5012出土
10	土師器 坏	口 - 高 (1.9) 底 (4.0)	内・外面口口口成形。底部回転糸切り未調整。底部2/3残存。	ややきめ細かい A4.B2.H4	内・橙色 外・明黄褐色 やや硬質	SK-5021出土
11	土師質土器 小皿	口 - 高 2.4 底 5.6	内・外面口口口成形。底部回転糸切り未調整。口縁部～底部1/2残存。	ややきめ細かい A3.B2.F4	内・灰白色 外・にぶい黄橙色 やや軟質	SK-5025出土
12	土師質土器 小皿	口 8.9 高 3.5 底 3.5	内・外面口口口成形。体部外面下端ナデ。底部回転糸切り未調整。口縁部～体部1/4残存。底部完周。	ややきめ細かい A2.B2.F4	内・淡黄色 外・淡黄色 やや硬質	SK-5028出土
13	土師質土器 小皿	口 10.4 高 3.1 底 3.5	内・外面口口口成形。底部回転糸切り未調整。完形。	ややきめ細かい A2.B2.E4	内・灰白色 外・灰白色 やや軟質	SK-5027出土。輪宝墨書土器(八鋒輪宝+種子「ア」)
14	土師器 坏	口 (9.8) 高 2.6 底 (6.2)	内・外面ナデ。底部回転糸切り未調整。口縁部～底部1/3残存。	きめ細かい A4.F4	内・黄灰色 外・灰白色 やや硬質	SK-5027周辺出土
15	土師質土器 小皿	口 (8.1) 高 2.2 底 (4.8)	内・外面ナデ。底部回転糸切り未調整。口縁部～底部1/3残存。	きめ細かい A4.B4	内・淡黄色 外・浅黄色 やや硬質	SK-5057周辺出土
16	土師質土器 小皿	口 6.2 高 1.9 底 3.9	内・外面口口口成形。底部外面手持ちヘラナデ。周縁回転ヘラケズリ? 口縁部～体部4/5残存。底部完周。	ややきめ細かい B3.F4.I3	内・灰白色 外・灰白色 やや軟質	SE-5031出土
17	土師質土器 小皿	口 (7.2) 高 (3.0) 底 (3.2)	内・外面口口口成形。底部外面ナデ。口縁部～底部1/6残存。	きめ細かい A3.B3	内・灰黄褐色 外・灰黄褐色 やや硬質	SE-5032出土
18	土師質土器 小皿	口 - 高 (1.3) 底 (3.0)	内面口口口成形。外面ナデ。底部回転糸切り後ナデ(糸切り痕がすかに残る)。体部～底部1/4残存。	きめ細かい B4.E4	内・浅黄色 外・にぶい黄橙色 やや硬質	SE-5033出土
19	土師質土器 小皿	口 - 高 (1.2) 底 (3.8)	内・外面口口口成形。底部回転糸切り後ナデ。(糸切り痕がすかに残る)。底部2/3残存。	ややきめ細かい A4.B2.J4	内・浅黄色 外・灰黄色 やや硬質	SE-5034出土
20	土師質土器 小皿	口 - 高 (1.6) 底 3.2	内・外面口口口成形。底部回転糸切り未調整。体部～底部3/4残存。	きめ細かい A4.E4	内・にぶい黄色 外・にぶい黄橙色 硬質	SE-5034出土
21	土師質土器 小皿	口 - 高 (0.8) 底 3.2	内・外面口口口成形。底部回転糸切り未調整。底部1/2残存。	きめ細かい B4.E4	内・浅黄橙色 外・浅黄橙色 やや硬質	SE-5034出土

Ⅲ 調査成果

第8表 遺物観察表（2）

	器 種	大きさ	特 徴	胎 土	色調・焼成	備 考
22	土師器 罎	口 - 高 (2.0) 底 4.2	内・外面ロクロ成形。底部回転系切り未調整。 体部～底部1/2残存。	きめ細かい A4.B2.E2.F4	内・浅黄橙色 外・橙色 やや硬質	SE-5034出土
23	土師質土器 小皿	口 5.9 高 1.9 底 2.9	内・外面ロクロ成形。底部回転系切り未調整。 口縁部～体部2/3残存。底部完周。	きめ細かい A4.B3.E4.F4	内・にぶい橙色 外・にぶい橙色 やや硬質	SE-5035出土。口縁端部に タール付着。
24	土師質土器 小皿	口 (8.4) 高 (2.1) 底 4.0	内・外面ロクロ成形。底部外面多方向ナデ。 口縁部～底部1/4残存。	ややきめ細かい B1.D4.G4	内・浅黄橙色 外・淡黄色 やや硬質	SK-5044 P20出土
25	土師質土器 小皿	口 - 高 (1.7) 底 3.8	内・外面ロクロ成形。底部回転系切り未調整。 体部に径3mm程の小孔を穿つ。底部完周。	きめ細かい B3	内・浅黄橙色 外・浅黄橙色 やや硬質	SE-5064・5086出土
26	土師質土器 小皿	口 5.4 高 1.4 底 3.8	内・外面ロクロ成形。底部回転系切り未調整。 完形。	きめ細かい B3.E3	内・浅黄橙色 外・浅黄橙色 やや硬質	SE-5086出土
27	土師質土器 小皿	口 11.8 高 3.8 底 7.6	内・外面ロクロ成形。底部回転系切り未調整。 ほぼ完形(口縁部一部のみ欠損)。	きめ細かい A3.B3.C3.H4	内・淡黄色 外・浅黄橙色 やや硬質	SK-5059 (No.1) 出土
28	土師質土器 小皿	口 7.6 高 1.3 底 (5.0)	内・外面ロクロ成形。底部回転系切り未調整。 口縁部～底部1/3残存。	ややきめ細かい A3.B2.E3	内・にぶい黄橙色 外・にぶい黄橙色 やや軟質	SK-5061出土
29	土師質土器 小皿	口 (7.0) 高 1.9 底 4.1	内・外面ロクロ成形。底部外面多方向ヘラナ デ。口縁部～体部1/6、底部4/5。	きめ細かい E3.F4.I3	内・にぶい橙色 外・にぶい橙色 やや軟質	SE-5064出土
30	土師質土器 小皿	口 - 高 (1.7) 底 6.0	内面ナデ。外面ロクロ成形。底部回転系切り 未調整。底部1/4残存。	ややきめ細かい A2.B2.E2.H4	内・にぶい褐色 外・にぶい橙色 やや軟質	SE-5064出土。古代のロクロ 土師器の可能性も否定しきれ ない。
31	土師質土器 小皿	口 - 高 3.3 底 -	内・外面ロクロ成形。 口縁部1/8以下残存。	きめ細かい B3.E3.F4.I4	内・橙色 外・橙色 やや硬質	SE-5064出土
32	土師質土器 小皿	口 - 高 (1.6) 底 3.0	内・外面ロクロ成形。底部外面ナデ。 体部～底部1/4残存。	ややきめ細かい B2.E2	内・浅黄橙色 外・浅黄橙色 やや硬質	SE-5064出土
33	土師質土器 小皿	口 (7.7) 高 (2.2) 底 (4.5)	内・外面ロクロ成形。 口縁部～体部1/6残存。	きめ細かい B3.E4.F4	内・橙色 外・橙色 やや硬質	SE-5086出土
34	土師質土器 小皿	口 - 高 (1.8) 底 (5.4)	内・外面ロクロ成形。底部回転系切り未調整。 体部～底部1/4残存。	きめ細かい B3.E3.I4	内・にぶい黄橙色 外・にぶい黄橙色 やや軟質	SE-5086出土
35	土師質土器 小皿	口 - 高 (1.9) 底 (5.7)	内・外面ロクロ成形。底部回転系切り未調整。 底部1/2残存。	ややきめ細かい B2.E2.F4.I4	内・橙色 外・橙色 やや硬質	SE-5086出土
36	土師器 罎	口 (6.5) 高 1.8 底 3.0	内・外面ロクロ成形。底部外面ナデ。 口縁部～底部1/3残存。	きめ細かい A4.B3.F3	内・淡黄色 外・浅黄色 やや硬質	SK-5130出土
37	土師質土器 小皿	口 (8.8) 高 (1.8) 底 -	内・外面ロクロ成形。 口縁部～体部1/4残存。	きめ細かい B4.F4	内・淡黄色 外・淡黄色 やや硬質	SK-5167 P67出土。口縁部に タール付着。
38	土師質土器 小皿	口 9.5 高 2.6 底 5.8	内・外面ロクロ成形。底部回転系切り後、周縁 手持ちヘラナデ。 口縁部5/6残存。底部完存。	ややきめ細かい B2.E2	内・にぶい黄橙色 外・にぶい黄橙色 やや硬質	SK-5167出土
39	土師質土器 小皿	口 (5.8) 高 (1.8) 底 -	内・外面ナデ。体部外面手持ちヘラケズリ。 口縁部～底部1/4残存。	きめ細かい A2.B2.D4	内・にぶい黄橙色 外・灰黄褐色 やや硬質	SE-5064出土。非ロクロ成形
40	土師質土器 小皿	口 - 高 (1.6) 底 (3.4)	内・外面ナデ。 体部～底部1/3残存。	ややきめ細かい A3.E3.F4	内・橙色 外・橙色 やや軟質	SK-5091出土。非ロクロ成形
41	土師器 小皿	口 - 高 (1.4) 底 6.8	内・外面ロクロ成形。底部回転系切り未調整。 体部～底部1/2残存。	ややきめ細かい B2.E2.F4.H4	内・橙色 外・橙色 やや軟質	SE-5064出土。古代のロクロ 土師器の可能性あり。
42	土師器? 罎	口 - 高 (1.1) 底 (4.4)	内・外面ロクロ成形。底部回転系切り未調整。 底部1/2残存。	ややきめ細かい A3.B2.E3.H3	内・灰黄色 外・にぶい黄橙色 やや軟質	SE-5064出土。古代のロクロ 土師器の可能性あり。

第9表 遺物観察表（3）

	器 種	大 き さ	特 徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
43	土師器? 坏	口 ー 高 (2.3) 底 (5.6)	内・外面ロクロ成形。底部回転系切り未調整。 体部～底部1/4残存。	ややきめ細かい A4.B2.E2.F4	内・橙色 外・橙色 やや軟質	SE-5064出土。古代のロクロ土師器の可能性あり。
44	土師器 高台付坏	口 ー 高 (5.0) 底 7.2	内・外面ロクロ成形。 体部1/8以下。底部完周。	ややきめ細かい A2.B2.I2	内・にぶい橙色 外・橙色 やや軟質	SE-5064出土。古代の土師器（常陸系ロクロ土師器）と思われる。
45	土師器 坏	口 ー 高 (1.3) 底 (5.2)	内・外面ロクロ成形。底部ヘラナデ、回転ヘラ切り痕がすかに残る。底部1/2残存。	ややきめ細かい A3.B2.E2.F3	内・橙色 外・橙色 やや軟質	SE-5086出土。古代のロクロ土師器坏と思われる。
46	土師器 高台付坏	口 ー 高 (1.6) 底 5.4	内面ヘラミガキ。外面ロクロ成形後ナデ。底部外面ナデ。 体部～底部1/3残存。	ややきめ細かい A4.E2	内・橙色 外・明黄褐色 やや硬質	SE-5086出土。古代のロクロ土師器坏と思われる。
47	土師器 坏類	口 ー 高 (2.8) 底 ー	内面ヘラミガキ後黒色処理。外面ロクロ成形。 体部1/8以下残存。	ややきめ細かい A3.B2.E2	内・オリーブ黒色 外・黄褐色 やや軟質	SE-5086出土。古代のロクロ土師器。
48	土師器 高台付坏	口 ー 高 (2.2) 底 6.3	内面ヘラミガキ後黒色処理。外面ロクロ成形。 底部5/6残存。	ややきめ細かい A2.B2	内・オリーブ黒色 外・橙色 やや軟質	遺構外出土。古代の土師器（常陸系ロクロ土師器）。
49	土師器 小皿	口 ー 高 (2.9) 底 6.8	内・外面ロクロ成形。底部回転系切り未調整。 体部～底部1/3残存。	ややきめ細かい A3.B2	内・にぶい黄褐色 外・灰黄褐色 やや硬質	SE-5086出土
50	内耳土器	口 ー 高 (6.3) 底 ー	内・外面ヨコナデ。内耳接合部に指頭痕残る。 口縁部1/8以下残存。	やや粗い A2.E2.J1	内・明赤褐色 外・褐灰色	SK-5010出土
51	内耳土器	口 ー 高 (7.4) 底 ー	内面ヘラナデ。外面ナデ。 内耳接合部の内外面に指頭痕残る。 口縁部1/8以下。	やや粗い D2.H2.J1	内・暗赤褐色 外・にぶい赤褐色 やや硬質	SK-5010出土
52	内耳土器	口 ー 高 (6.0) 底 ー	内・外面ヨコナデ。内耳接合部に指頭痕残る。 口縁部1/8以下残存。	やや粗い A2.C4.H4J1	内・赤褐色 外・にぶい赤褐色 やや硬質	SK-5025出土
53	内耳土器	口 (35.0) 高 (6.7) 底 (27.0)	内・外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部ヘラケズリ。口縁部～底部1/6残存。	やや粗い A2.B3.H2.J2	内・明褐色 外・褐色 やや硬質	SK-5025出土
54	内耳土器	口 (34.0) 高 9.4 底 (28.0)	口縁部ヨコナデ。体部・底部ヘラナデ。 口縁部～底部1/8残存。	やや粗い A2.J1.K2	内・暗赤褐色 外・黒色 やや硬質	SD-5002出土
55	内耳土器	口 (31.6) 高 8.7 底 (22.6)	口縁部ヨコナデ。体部・底部ナデ。外面の所々に指頭痕残る。口縁部～底部1/8以下残存。	やや粗い A1.B2.F3.J1.K2	内・暗赤褐色 外・黒色 やや硬質	SE-5033出土
56	内耳土器	口 ー 高 (6.4) 底 ー	内面ヘラナデ。外面ヨコナデ。内耳接合部に指頭痕残る。口縁部1/8以下残存。	やや粗い A2.H2.J1	内・にぶい褐色 外・黒色 やや硬質	SE-5034出土
57	内耳土器	口 (37.4) 高 8.0 底 (30.4)	内・外面ヨコナデ。体部外面ナデ、下位に指頭痕残る。 口縁部～体部1/2。底部1/8以下。	粗い A2.F4.J1.K2	内・明赤褐色 外・黒褐色 やや硬質	SE-5034・5035出土
58	内耳土器	口 ー 高 (7.1) 底 ー	内・外面ヨコナデ。内耳接合部に指頭痕残る。 口縁部1/8以下残存。	やや粗い A2.E3.H3.J2	内・にぶい赤褐色 外・黒色 やや硬質	SE-5035出土
59	内耳土器	口 (36.0) 高 7.9 底 (27.4)	内・外面ヨコナデ。底部内面ナデ。体部外面ナデ・鉄分(タカシソウ)付着。 口縁部～底部1/4残存。	やや粗い A2.E3.J1.K3	内・にぶい褐色 外・褐色 やや硬質	SE-5035出土
60	内耳土器	口 ー 高 (7.0) 底 ー	内面ヘラナデ。外面ヨコナデ。内耳接合部に指頭痕残る。口縁部1/8以下残存。	やや粗い A2.B3.E3.H2.J1	内・赤色 外・赤色 やや硬質	SE-5036出土
61	内耳土器	口 (36.2) 高 (7.9) 底 ー	内・外面ヨコナデ。内耳接合部に指頭痕残る。 口縁部～体部1/8以下残存。	やや粗い A1.B1.J1	内・にぶい褐色 外・にぶい赤褐色 やや硬質	SE-5036出土
62	内耳土器	口 ー 高 (4.3) 底 ー	内・外面ヨコナデ。内耳接合部に指頭痕残る。 口縁部1/8以下残存。	やや粗い A2.E2.H2.J1	内・にぶい赤褐色 外・黒褐色 やや硬質	SE-5086出土
63	内耳土器	口 ー 高 (5.7) 底 ー	内面ヘラナデ。外面ヨコナデ。内耳接合部に指頭痕残る。口縁部1/8以下。	やや粗い A2.H2.J1	内・にぶい黄褐色 外・黒褐色 やや硬質	SE-5086出土

Ⅲ 調査成果

第10表 遺物観察表（4）

	器 種	大きさ	特 徴	胎 土	色調・焼成	備 考
64	内耳土器	口 (3.2) 高 (9.8) 底 -	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。内耳接合部に指頭痕残る。 口縁部～体部1/8以下残存。	やや粗い A2.H4.J2.K4	内・明褐色 外・黒褐色 やや硬質	SE-5086出土
65	内耳土器	口 (30.0) 高 (4.9) 底 -	口縁部ヨコナデ。体部内面ナデ、外面ヨコナデ後に緩い指ナデ。 口縁部～体部1/8以下残存。	ややきめ細かい A2.E3.H2.J2	内・にぶい橙色 外・黒褐色 やや硬質	SE-5086出土
66	土師器 片口鉢	口 (29.8) 高 (6.1) 底 -	内・外面ヨコナデ。体部外面ナデ。 口縁部1/6残存。	粗い A2.B2.H2.J1.K2	内・明赤褐色 外・明赤褐色 やや軟質	SD-5002出土
67	瓦質土器 すり鉢	口 29.5 高 12.7 底 11.9	口縁部内面摩耗著しい、外面ヨコナデ。体部・底部内面5条を1単位とする揃り目を疎らに施す、外面ナデ・下位に指頭痕残る。 口縁部～体部2/3残存。底部ほぼ完周。	やや粗い A2.B2.E3.F2	内・明赤褐色 外・にぶい赤褐色 やや軟質	SD-5001・5002出土
68	瓦質土器 すり鉢	口 (26.0) 高 (11.0) 底 -	口縁部ヨコナデ。体部・底部内面7条を1単位とする揃り目を疎らに施す、外面ロクロ形成後、ヘラナデ。口縁部1/8以下残存。	きめ細かい A2.B4.J2	内・暗灰黄色 外・暗灰黄色 やや硬質	SE-5034出土。ロクロ成形土器(還元焰焼成に仕上がる)。
69	瓦質土器 すり鉢	口 28.4 高 (9.2) 底 -	口縁部ヨコナデ。体部・底部内面8条を1単位とする揃り目を疎らに施す、外面ナデ・所々に指頭痕残る。1/8以下。	やや粗い A2.B2.J1.K2	内・明赤褐色 外・明赤褐色 やや硬質	SE-5036出土
70	瓦質土器 すり鉢	口 (27.6) 高 9.5 底 (13.2)	内面7条を1単位とする揃り目を疎らに施す。外面ヘラナデ。口縁部内面～体部外面中位にかけて土器表面の剥離著しい。1/6残存。	粗い A1.J3.K1	内・赤灰色 外・褐灰色 やや軟質	SE-5086出土
71	瓦質土器 すり鉢	口 - 高 (4.0) 底 (11.2)	内面7条を1単位とする揃り目を疎らに施す。外面ヘラナデ。底部1/4残存。	やや粗い A2.H2.J2	内・明赤褐色 外・暗赤褐色 やや軟質	SE-5086出土
72	瓦質土器 壺	口 (26.0) 高 (24.1) 底 -	口縁部ヨコナデ。体部内面ナデ、外面横方向の緩いナデ。口縁部～体部1/6残存。	やや粗い A1.B2.E2.J1.K	内・褐色 外・褐色 やや硬質	SD-5002出土
73	瓦質土器 壺?	口 - 高 (4.1) 底 -	内・外面ロクロ成形。 口縁部1/8以下残存。	ややきめ細かい A3.D3.J1	内・褐灰色 外・黒褐色 やや硬質	SE-5033(最下層)出土
74	須恵質土器 鉢類	口 - 高 (6.5) 底 (10.0)	内・外面ロクロ成形。体部下端内面に自然釉?付着、外面ヘラナデ。 底部1/8以下残存。	やや粗い A1	内・灰色 外・灰色 やや硬質	SK-5059出土。内面に使用痕(研磨痕)あり。こね鉢?
75	瓦質土器 火舎獸脚	口 - 高 (6.4) 底 -	脚部両側面にヒレ状に粘土板を付す。	きめ細かい A4.E2.F4	内・橙色 外・橙色 硬質	SD-5001出土
76	青磁 鎚蓮弁文 碗類	口 - 高 (3.4) 底 -	内・外面ロクロ成形。内面無地。外面鎚蓮弁文を施す。口縁部1/8以下残存。	緻密	内・オリーブ褐色 外・オリーブ褐色 硬質(堅緻)	SD-5001出土 非龍泉窯系製品?
77	青磁 折縁皿	口 - 高 (3.2) 底 -	内・外面ロクロ成形。 口縁部1/8以下残存。	緻密 混入物微量 A4	内・灰オリーブ色 外・灰オリーブ色 硬質(堅緻)	SD-5001出土 龍泉窯系製品?
78	陶器 碗形鉢? 花瓶類?	口 - 高 ? 底 -	内・外面ロクロ成形。 口縁部1/8以下残存。	緻密 B4	内・オリーブ黄色 外・浅黄色 硬質	SE-5086出土 美濃窯製品?
79	陶器 皿類	口 - 高 (2.0) 底 (5.8)	内・外面ロクロ成形。全面に施釉。外面底部中央は重ね焼き痕(釉剥ぎ痕)残る。 底部1/2残存。	緻密 A4.B4	内・浅黄色 外・浅黄色 硬質	SE-5072・5073(No2)出土 古瀬戸窯産(大窯期?)丸皿と思われる。
80	陶器 皿類	口 - 高 (2.1) 底 -	内・外面ロクロ成形、乳白色の釉薬(長石釉)を掛ける。口縁部1/8以下残存。	きめ細かい B4	内・灰白色 外・灰白色 硬質	SK-5021出土 美濃窯製品(志野焼)
81	陶器 皿類	口 - 高 (2.5) 底 -	内・外面ロクロ成形、乳白色の釉薬(長石釉)を掛ける。口縁部1/8以下残存。	ややきめ細かい B4.K4	内・灰白色 外・灰白色 硬質	SE-5034出土 美濃窯製品(志野焼)

b. 砥石（第 33 図。図版 18）

82 は平面が撥形状を呈する。広・狭両端面を欠損。残存長 9.5 cm、幅 4.4 cm、厚さ 1.6 ～ 2.0 cm、重量 123.85 g。表・裏・左右両側面と広端面の五面を使用する。粘板岩製。SD-5001 出土。

83 は平面が長方形、断面が台形状を呈する。完形。全長 9.9 cm、幅 3.6 cm、厚さ 2.2 ～ 3.5 cm、重量 163.35 g。表・裏、左・右両側面、広・狭端面の六面すべてを使用する。粘板岩製。SK-5014 出土。

84 は平面が隅丸長方形形状を呈する。一部を欠損。残存長 11.8 cm、幅 4.0 cm、厚さ 0.4 ～ 0.9 cm、重量 69.12 g。表・裏、左・右両側面を使用。表・裏とも先端が摩耗する。SE-5034 出土。

85 は平面が長方形、断面が台形状を呈する。広端面を欠損。残存長 8.2 cm、幅 2.8 cm、厚さ 1.5 ～ 1.8 cm、重量 69.12 g。表・裏、左・右両側面と狭端面の五面を使用する。表・裏とも先端が摩耗する。SE-5033 出土。

86 は平面が隅丸長方形形状を呈する。広・狭両端面を欠損。残存長 5.2 cm、幅 2.7 cm、厚さ 1.2 ～ 1.4 cm、重量 33.8 g。表・裏、左・右両側面の四面を使用する。粘板岩製。SD-5001 出土。

c. 爪形状石製品（第 33 図。図版 18）

87 は爪形状を呈す。残存長 6.5 cm、幅 2.3 cm、厚さ 0.4 ～ 2.2 cm、重量 34.1 g。砂岩製。SK-5054 出土。

d. 石臼（第 34 図。図版 18）

88 は径 18.1 cm、厚さ 2.7 cm、重量 19.58 kg。安山岩製。SE-5034 出土。

89 は径 17.7 cm、厚さ 9.8 cm、重量 20.88 kg。安山岩製。SE-5034 出土。

90 は推定径 28 cm、厚さ 6.6 cm、重量 25.39 kg。安山岩製。SE-5034 出土。

e. 古銭（第 34 図。図版 18）

91 は径 2.4 cm。重量 2.05 g。腐食が進んでおり、下端部の一部を欠損する。SK-5027 出土。

〔備考〕表面下端部の文字は「大」か。であるならば、「至大通寶」（中国・元時代 1308 年初鑄）の可能性が考えられる。

第11表 中世土器破片(不掲載資料)一覧(1)

	土師環			土師甕			土師質 小皿			内耳			插鉢			瓦質蓋			須恵環	須恵甕	須恵桶	常滑甕	陶器碗			その他
	口	体	底	口	胴	底	口	体	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	体	胴	胴	胴	口	体	底	底
SD-5001							1			10	11	1														
SD-5002					2		5	3	6	12	23	35														
SD-5004					1		1		5		3															
SK-5005					2		2			1	2															
SA-5007P1											1															
SA-5008P3a							1																			
SA-5008P5									1																	
SA-5009											1															
SA-5009P3a									2																	
SK-5010									1	2	9															
SK-5012					1				1		1															
SK-5014									1																	
SK-5016									1	1																
SK-5018										1																
SK-5019										2																
SK-5020	1				1							1														
SK-5021					3				2	1		1														
SK-5025							2		1	5	4	2		1					1							
SK-5027							1																			
SK-5028					2					2	1										1					
SK-5030					1																					
SE-5031					4		1	1		9	6	3											1			
SE-5032							1	1	1	4	8	1														
SE-5033							1		2	2	5	3														
SE-5034					2		2		1	3	4	8	1	11	1						1					
SE-5035					3		3	1		1	5	17		1												
SE-5036									1																	
SK-5037								2																		
SK-5040											2															
SK-5041																										
SK-5042							1		1		2															
SK-5043																										
SK-5044					1					1	1															
SK-5045																										

第12表 中世土器破片(不掲載資料)一覽(2)

[illegible]

Ⅲ 調査成果

第13表 縄文土器片（不掲載資料）一覧

SK-5027	掲載個体数	不掲載 破片点数
中期～後期初頭	5	2
堀之内1	2	0
加曽利B	9	2
小破片のため文様構成不明	0	10
縄文のみの破片	4	14
無文の土器	5	24

SX-5082	掲載個体数	不掲載 破片点数
後期初頭の土器	6	5

そのほかの遺構	掲載個体数	不掲載 破片点数
1.黒浜式土器	3	0
2.加曽利E式土器		
(1)口縁部破片	3	2
(2)体部破片	3	2
3.器台形式土器	1	0
4.後期初頭の土器		
(1)捻転状突起	1	0
(2)帯状区画文を持つ称名寺式土器	6	0
(3)口縁部無文帯下に隆体を巡らす網取式系土器	0	5
(4)無文地に沈線を施す土器	2	0
5.後期前葉の土器		
(1)縄文地に沈線を施す堀之内1式土器	7	8
(2)縄文地に櫛歯状工具による曲線文を施す破片	1	0
6.中期中葉から後期後葉と思われる土器		
(1)有文の土器	6	1
(2)縄文のみが見られる破片	4	24
(3)櫛歯状工具による縦位の条線文がみられる破片	4	5
(4)櫛歯状工具による曲線的な条線文がみられる破片	2	0
(5)無文の破片		
・口縁部破片	1	0
・体部破片	0	18
・底部破片	1	2
7.加曽利B式土器		
(1)横位の綾杉状沈線が見られる土器	1	0
(2)縄文地に格子目文がみられる土器(遠部4類)	3	1
(3)節の粗い単節斜縄文がみられる破片(粗製土器の体部)	3	0
(4)広い無文帯下に縄文帯がみられる破片	2	0
(5)口端にキザミ目を持ち以下無文帯とする破片	1	0
8.摩耗・破損のため文様構成不明のもの	0	44

1. 中世以前の遺構・遺物について
2. 中世の遺構について

IV. まとめ

1. 中世以前の遺構・遺物について

今回調査区（Ⅵ－2（東）区）において、確認できた縄文時代遺構は加曽利B式を主体とする土器群を出土したSK-5015と後期初頭土器群を出土したSX-5082のみである。しかしⅥ－2（東）区から縄文土器破片が比較的多く出土していることを考慮すると、近辺に縄文時代遺構が存在した可能性＝縄文時代遺構が中世遺構掘り込みにより湮滅、土器のみが中世遺構覆土中に混入していった可能性を考えてみたい。なおⅥ－2（東）区における時期別出土傾向をまとめると（第13表）、後期初頭期～後期中葉の土器群が主体をなすことが窺える（塚本師也氏、御教示。註1）。

次に縄文時代以外であるが、10世紀代に比定できる土師器破片〔例. 42・46など〕が中世遺構に少量混入している（第11・12表）。本遺跡Ⅰ区・Ⅳ区では平安時代遺構（竪穴建物跡、粘土採掘土坑など）が確認されていることをふまえると（財）とちぎ生涯学習文化財埋蔵文化財センター 2002・2003）、今回調査区にも少数ながら平安時代遺構が存在したと思われる。

2. 中世の遺構について

〔a〕溝 跡

SD-5001・5002は、いずれも南北方向（若干、北北東－南南西に傾く）に走る直線溝で区画施設（溝）として捉えておきたい。なお両遺構とも覆土最上層は人為堆積層で、この層位から今平2001編年5期（15世紀中葉から後葉）～6期（15世紀末から16世紀前半）に相当する土師質土器小皿〔1～3〕が出土している。このことから、15世紀末～16世紀前半代頃の機能停止が考えられそうである。

〔b〕井戸跡

検出された11基のうち、7基がSD-5001・5002付近に位置する〔SE-5031～5036及び5088が該当する〕。これらの井戸跡は並行した二列の線上にあることから、何らかの方向軸をもって造営・廃絶を繰り返したと推察される。いずれの遺構覆土も自然堆積のち、最上位に人為堆積層が認められる。遺物の多くはこの人為堆積層からの出土で、今平編年5期（15世紀中葉から後葉）～6期（15世紀末から16世紀前半）に相当する土師質土器小皿、両角1996編年の石那田遺跡段階（16世紀中葉）、服部1997編年の御城田遺跡段階（16世紀後半）の内耳土器〔53～55・57・59〕が出土している。このことから、遺構の機能停止時期を16世紀中葉前後に想定できそうである。ただし中には遺構群が17世紀前葉まで存続したことを示す資料もある（SE-5034は井戸跡間の新旧関係から比較的新しいと思われるうえ、覆土中から志野小皿破片〔81〕が出土している。なお志野小皿については後述）。この点についても、次回報告（『下陰遺跡Ⅱ』）で再検証してみたい。

〔c〕土 坑

本調査区において検出された土坑は、1群（円形もしくは楕円（状）形を呈し、断面が垂直に立ち上がるもの〔例. SK-5005〕）、2群（小型で形状が楕円、底面が長方形のもの〔例. SK-5010〕）、3群（長方形のもの。ただし長・短辺が直線的なもの〔例. SK-5077〕、長辺直線・短辺やや丸まるもの〔例. SK-5046〕）に大別できる。なお1群は断面形状や覆土の堆積状況から井戸跡の可能性が考えられる。2群・3群は長軸が区画施設〔SD-5001・5002〕とほぼ平行・直交関係にあり、これらの溝を意識して掘り込まれた可能性が考

IV まとめ

えられる。覆土中から今平編年 5 期（15 世紀中葉から後葉）～6 期（15 世紀末から 16 世紀前半）の土師質土器小皿が出土していることから、SD-5001・5002 と同様に 16 世紀前半頃までに埋没したと推定される。なお区画施設〔SD-5001・5002〕と平行・直交関係にある SK-5027 より輪宝墨書土器〔13〕が出土したことは、特筆できよう（後述）。

〔d〕ピット群

ピット群の検出地点は R-48・49 グリッド付近と M-45・46 グリッド付近に比較的集中する。今回は、発掘調査の所見に基づいて、3 列のピット列を想定した。しかし、それぞれのグリッドにおいて検出されたピット群は覆土も近似するものであり、別配列も充分に考えられそうである。中世城館跡や集落跡等の遺跡からは区画の溝跡や道路跡に沿って、一帯的にピット群や土坑群が濃密度で検出される傾向がみられる。次回報告（『下陰遺跡Ⅱ』）時の検討課題の一つとしてあげておきたい。

3. 中世遺物について

〔1〕土器の位置付け

〔a〕土師質土器

今平利幸氏は、下野中央部の「土師器皿」（土師質土器小皿）編年を公にしている（今平 2001）。これをもとに今回調査区出土土師質土器小皿を照合してみると、B 類（ロクロ成形）が主体であること、器高の低いものと器高の高いものの両者があることから、今平編年 5 期（15 世紀中葉から後葉）～6 期（15 世紀末から 16 世紀前半）に比定できそうである。

ただし中には今平編年 4 期（15 世紀前葉）以前に考えられそうなもの〔14・15 など非ロクロ土器〕や、今平編年 7 期（16 世紀後半）と覚しきもの〔23 など小型化著しい土器〕も存在する。加えて常陸地域からの搬入品と考えられる土器もある〔8・12・28 など。註 2〕こと、覚書として記しておく。

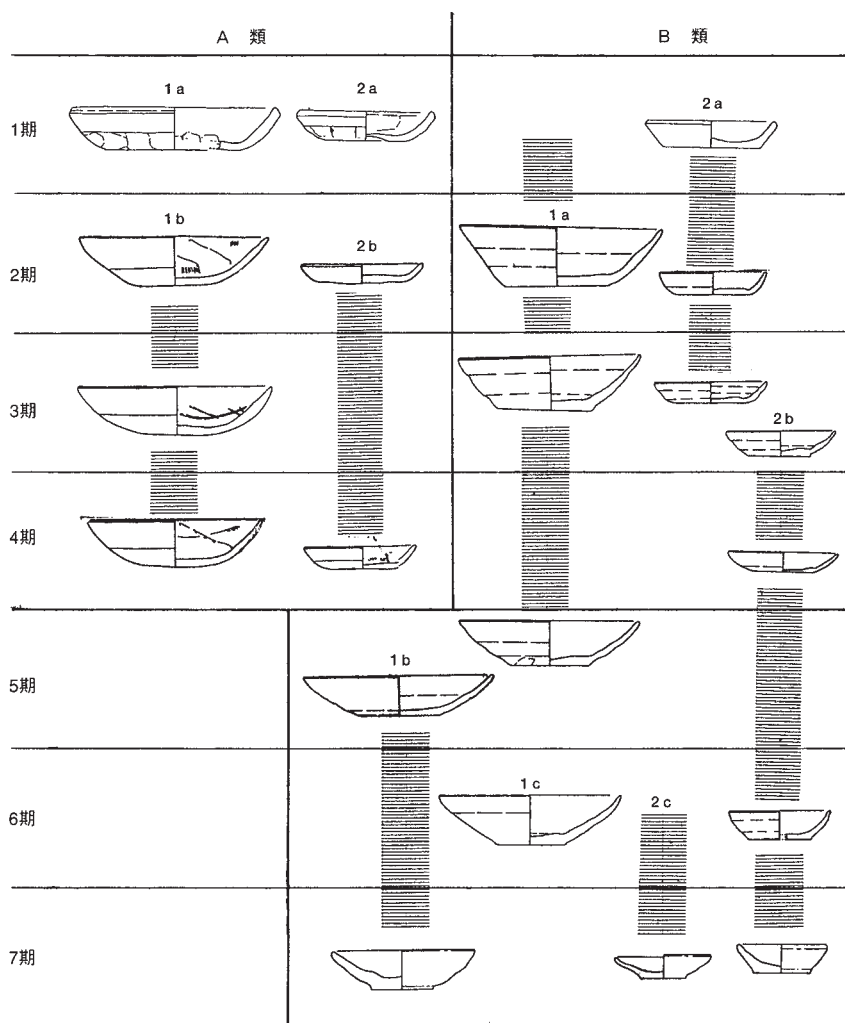
〔b〕内耳土器

今回調査区出土内耳土器のうち比較的全体形状がわかるものを先学編年に照らしてみる。53～55・57・59 は口径・器高・底径比が 4：1：3 である点、耳の張り付け位置が口縁部上端から体部中位にある点から両角 1996 編年の石那田遺跡段階（16 世紀中葉）、服部 1997 編年の御城田遺跡段階（16 世紀後半）に比定できよう。また 64・65 は器高が 53～55・57・59 などより深いことを考慮すると、両角 1996 編年の稲荷森遺跡段階（15 世紀から 16 世紀前葉）、服部 1997 編年の大町遺跡段階（15 世紀後半から 16 世紀前半）以前に位置付け可能と思われる（塩谷慎介氏、御教示）。

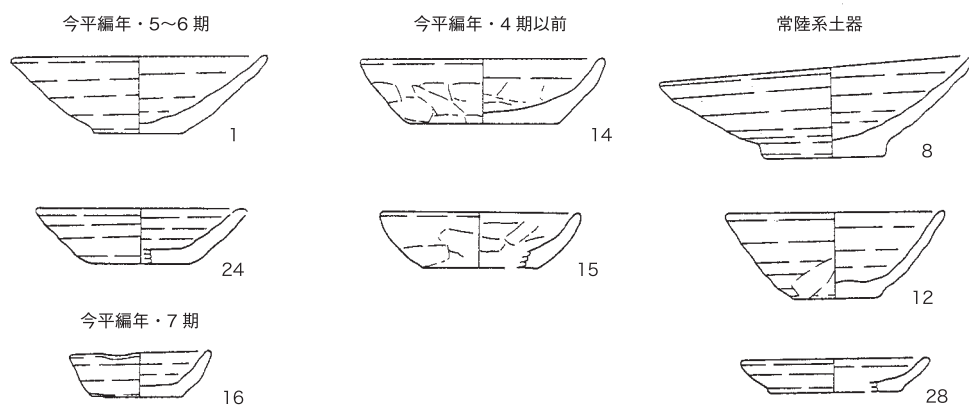
〔c〕瓦質土器壺

SD-5002 出土の 72 は、縁帯部は形骸化し口縁部を L 次状に突出させている。また肩部は丸みをもつ。常滑甕 19 型式（1500 年から 1550 年）～20 型式（1550 年から 1600 年）（中野 2005）の在地産模倣壺（胎土に金色雲母粒を多量に含むことから常陸南部産製品）と捉えてみたい。

SK-5021・SE-5034 から志野小皿破片〔80・81〕が出土している。志野の存続期間は天正 13〔1587〕年から 17 世紀前葉とする説と、慶長 3〔1598〕年から 17 世紀前葉とする説が存在しているが（加藤 2007）、いずれにせよ 80・81 の釉薬（長石釉）掛が濃い点をふまえると志野後半期＝17 世紀前葉頃のもののようである（梁瀬裕一氏、御教示）。



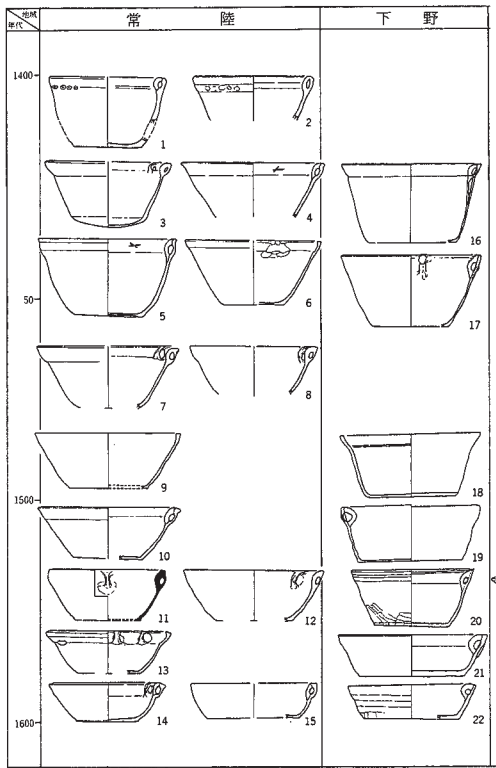
栃木県中部の土師質土器小皿編年表（今平 2001）



今回調査区出土土師質土器小皿（1/3）

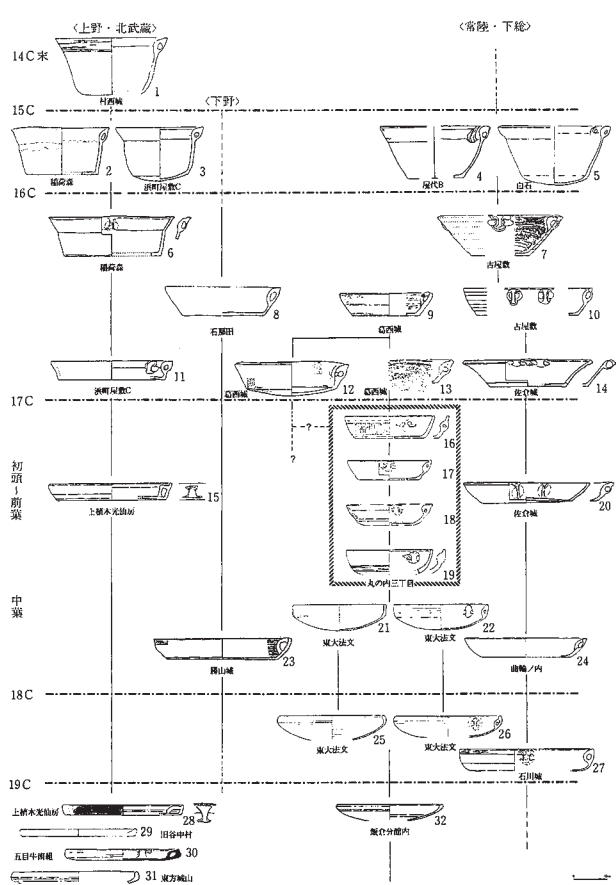
第 35 図 土師質土器小皿関係

IV まとめ

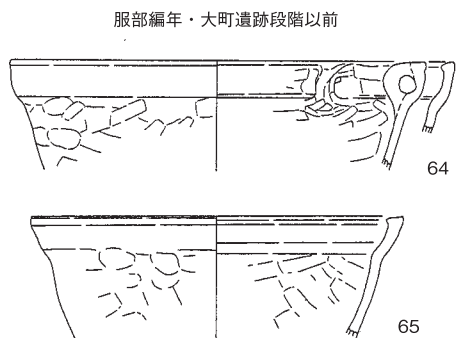
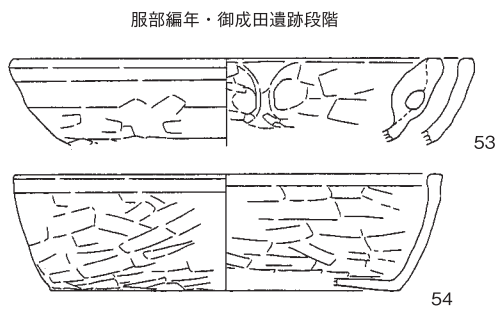


常陸 1・2小泉館 3白石館 4～8屋代B 9鹿島城 10屋代B
11鹿島城 12～15屋代B
下野 16上芝 17横倉宮ノ内 18・19大町 20赤塚 21御城田 22赤塚

常陸・下野の内耳土器編年表（服部 1997 一部改変）



関東地方における内耳土器・焙烙の編年表（両角 1996）



今回調査区出土内耳土器（1/6）

第 36 図 内耳土器関係

〔2〕輪宝墨書土器

〔輪宝墨書土器概説〕 密教法具・輪宝（地鎮・鎮壇に用いられる）を土師質土器内面に墨描きし、金属製輪宝と同様の効果を意図して用いられたのが輪宝墨書土器である（註3）。輪宝墨書土器に描かれている輪宝は、鋒の先端を外輪から突出させた八鋒輪宝で、中央の轂には種子「ア」を記すものが多い。現在、34 遺跡 38 例があるが（第 14・15 表）、ほとんどが中世後半から近世にかけてである。

出土状況を見てみると、土師質土器 2 枚 1 組の合口状態で土坑から出土する事例が多く、いずれも輪宝墨書土器は身に使用されている（出土状態は正位）のが特徴である。一方、蓋を見てみると、内面に植物（大聖歓喜天を表象する違い大根）文を記すもの〔西方下館遺跡〕、魚骨状の掛法早九字・法華經句を記すもの〔東福寺境内〕、方位を記すもの〔西方下館遺跡、伊富岐神社〕等がある。共伴遺物は古銭を伴うもの〔高崎城跡など〕、土師質土器を伴うもの〔奥谷遺跡など〕が存する。また木箱内部に納められたうえで輪宝土器埋設土坑に納めている事例もある〔東福寺境内〕。

〔Ⅵ－2 区（東）SK-5027 出土輪宝墨書土器〕 今回調査区出土輪宝墨書土器〔13〕について整理してみたい。輪宝墨書土器〔13〕は内外面ともロクロ成形で、口径 10.4 cm、器高 3.1 cm、底径 3.5 cm、底部外面は回転糸切り未調整である。土器内面に八鋒輪宝と、その中央（轂部分）に種子「ア」を墨書する（種子は児玉義隆氏、御教示）。時期的には今平 2001 編年 6 期～7 期に位置付けられよう。

次に輪宝墨書土器〔13〕の出土状況を見てみる。SK-5027 からは輪宝墨書土器〔13〕1 点と古銭 1 枚（「至大通宝」か。土器〔13〕から 5 cm 程、離れた位置から出土）、土師質土器小皿口縁部小片 1 点が出土するのみで、他遺跡例〔高崎城跡・西方下館遺跡など〕と共通しよう。しかし問題なのは輪宝墨書土器〔13〕が SK-5027 覆土中位から逆位（種子を描いた面を下）の状態 で 1 点のみ出土している点である。土器 2 枚 1 組の合口埋納方法〔鹿島城跡・伊富岐神社など〕とは異なる儀礼的意味がもたされていたのであろうか。

なお、これについては後日、稿を改めて検討を加えたいと思っている（註4）。

〈註〉

註1 真岡市 1984 文献「13 於宮遺跡」の項には「遺物は南向きの緩斜面の畑地に点々と散在しており、（略）五行川に近い南側の低い土地を開田した際には多量の遺物が出土した」という聞き取り成果が記載されている（同。p 175）。

この「五行川に近い南側の低い土地」とは本遺跡Ⅳ区～Ⅵ区をさす可能性が高いのではなかろうか。今回成果もふまえ、『下陰遺跡Ⅱ』ではこの問題を検証していく必要があろう。

註2 これについては斎藤 弘氏と筆者（池田）の意見交換をもとにした見解である。

註3 輪宝墨書土器に関する先行研究としては水野 1984 論文、井上 1992・1996 論文、鈴木 2001・2002・2006 論文、間宮 2003 論文などがある。

註4 古代・中世の仏教系遺物が第一義的機能とは異なる第 2 義的機能をもたされた事例は、複数存在する（例、祇園城跡関連遺跡出土板碑〔方形竪穴遺構廃絶に伴う送り儀礼に転用。池田 2005〕、石造塔を城の石垣に転用することで城に靈的防御機能が付加される等）。本例は、これらと近い関係にあるのか、それとも地鎮め儀礼の典拠が異なるゆえなのか、更なる検証の必要を感じている（輪宝墨書土器 2 枚 1 組の合口埋納方法は「地鎮祭法」〔『修験常用秘法集』〕による。だが、これ以外にも多々地鎮め作法は存する〔「土公供作法」「地鎮鎮壇法」など〕。なお、地鎮め儀礼関連文献の入手にあたり小林和美、高橋典子、村上弘子、各氏の御協力を得た）。

第14表 輪宝墨書土器出土地 (1)

遺 跡 名	所 在 地	種 別	埋納位置	出土点数	輪宝形式	梵 字 (種 子)	共存遺物	時 期	文 献・備 考
1 高崎遺跡	宮城県多賀城市	屋敷地	庇北側	身・蓋 2	八鋒輪宝	ア	寛永通宝7	18c	井上1996。鈴木2001・2002
2 仙台城二の丸北方武家屋敷	宮城県仙台市青葉区	屋敷跡	土坑	身・蓋	詳細不明	詳細不明	土師質土器10、 寛永通宝7	江戸時代	宮城県考古学会2007
3 西方下館遺跡	福島県三島町	城館跡	郭内	身・蓋 1	八鋒輪宝	ア	至大通宝1	16c末	井上1996。
4 大信地区民家	福島県白河市(旧大信村)	民家	床下	身 3	八鋒輪宝	なし	至大通宝2 大定通宝1	江戸時代?	井上1996。蓋(小皿)内面に植物(違い大根)文あり。種子不明。
5 屋敷前遺跡	福島県いわき市	屋敷地	攪乱層	身・蓋 2	八鋒輪宝	ア	なし	17c後～18c	水野1984。井上1996
6 堀ノ内遺跡	茨城県大野村	館跡	堀の東側土坑	身 1	八鋒輪宝	なし	なし	(15c頃か)	いわき市教委1988。井上1996
7 高岡下館遺跡	茨城県茨城町	神社	詳細不明	身・蓋 1	八鋒輪宝	ア	なし	(中世か)	鈴木2001・2002。間宮2003
8 奥谷遺跡	茨城県茨城町	館跡か	土坑	身 1	八鋒輪宝	ア?	土師質土器小皿4 内耳鍋1	(15c頃か)	郡司1972。水野1984。井上1996
9 鹿島城跡	茨城県鹿嶋市	城跡	土坑	身・蓋 1	八鋒輪宝	ア	なし	16c前～中	間宮2003
			堀跡	身 1	八鋒輪宝	ア	なし	16c前～中	井上1996。鈴木2002。間宮2003。
10 祝詞遺跡	茨城県鹿嶋市	神社	不明	不明	不明	不明	不明	中世後半?	鹿島町遺跡保護調査会1990。井上1996
11 真壁城跡	茨城県桜川市(旧真壁町)	城跡	不明	身 1	八鋒輪宝	ラ	不明	16c	井上1996
12 野高谷薬師堂遺跡	栃木県宇都宮市	集団墓	不明	身 1	八鋒輪宝	ア	不明	16c	井上1996。間宮2003
13 下摩遺跡	栃木県真岡市	城館関連	土坑	身 1	八鋒輪宝	ア	至大通宝?1	15～16c	栃木県博2006
14 足利学校跡	栃木県足利市	学問所	方丈下	身 1	八鋒輪宝	なし	なし	17c後半頃	今回報告
15 丹生東城跡	群馬県富岡市	城館跡	本郭内土坑	身 4	八鋒輪宝	ア・バン	土師質土器	16c前半	足利市教委1992。井上1996。鈴木2001。截部分種子なし 鈴木2006。
16 杣瀬城跡	群馬県下仁田町	城館跡	曲輪内土坑	身 4	八鋒輪宝	ア	かわらけ24	(15～16cか)	山武考古学研究所1994。間宮2003。鈴木2006
17 上野国分寺跡	群馬県前橋市+高崎市	寺院跡	12トレンチ 15トレンチ	身 1	八鋒輪宝	ア	なし	中世後半頃	群馬県教委1988。井上1996。鈴木2001
18 阿左美遺跡	群馬県みどり市(旧笠懸町)	城館跡	元屋敷地区	身 1	八鋒輪宝	ア?	ア?	16c代	鈴木2006
19 山上城跡	群馬県桐生市(旧新里村)	城館跡	馬出し西虎口	身 1	八鋒輪宝	キリーク	なし	16c末～17c初	鈴木2006
20 彦部家住宅	群馬県桐生市	民家	床下	身 1	八鋒輪宝	判読できず	なし	17c末～18c初	鈴木2002
21 山去遺跡	群馬県太田市	-	トレンチ	身・蓋 1	八鋒輪宝	アクもしくはアークか	ア?	14c後～15c前	井上1996。鈴木2001
22 金山城跡	群馬県太田市	城館跡	馬場下曲輪	不明 1	八鋒輪宝	ア?	ア?	(15～16cか)	井上1996。鈴木2006
23 金山城跡	群馬県太田市	城館跡	日ノ池	身 1	判読できず	判読できず	なし	(15～16cか)	鈴木2006
24 青島城跡	埼玉県東松山市	城跡	二の郭内	身・蓋 1	八鋒輪宝	ア	なし	16c代	水野1984。井上1996。鈴木2001。間宮2003
25 東大病院	東京都文京区	屋敷跡	大型地下式坑	身 1	八鋒輪宝	ア	なし	18c初頃	東大遺跡調査室1990。井上1996。鈴木2001
26 小石川牛天神下遺跡	東京都文京区	屋敷跡	土坑+柱基礎	身 1	八鋒輪宝	ア	なし	18c前半	都内遺跡調査会2000
27 小金城跡	千葉県松戸市	城跡	遺構外	身 1	八鋒輪宝	ア?	なし	16c代	松戸市遺跡調査会1997。間宮2003。
				身 1	八鋒輪宝	不明	なし		
				身・蓋 1	八鋒輪宝	ア	陶製経筒2、蓋付壺		
28 伊富岐神社	岐阜県垂井町	神社	本殿下	身・蓋 1	八鋒輪宝	ア	1.青磁 白磁皿破片、和鏡3	14～15c	水野1984。井上1996。鈴木2001 蓋(小皿)底部外面に各々「東」「西」「北」「中央」の墨書記す。
				身・蓋 1	八鋒輪宝	ア	なし		
29 小谷城跡	滋賀県湖北町	城跡	清水谷	身 1	八鋒輪宝	ア	なし	16c	水野1984。井上1996

第15表 輪宝墨書土器出土地 (2)

遺跡名	所在地	種別	埋納位置	出土点数	輪宝形式	梵字(種子)	共伴遺物	時期	文献・備考
30 東福寺	京都府京都市	寺院	境内西隣地	身・蓋 1	八鋒輪宝	ア	木箱内に合わせ蓋で 收納蓋に掛法・法華 経句	18c	水野1984。井上1996。久世1998。蓋に掛法早九字。
31 平安京左京北辺三坊五町	京都府京都市	不明	不明	身 1	不明	不明		不明	井上1996
32 長岡宮跡北辺(415次調査)	京都府向日市	屋敷跡	小土坑	身・蓋 1	八鋒輪宝	アーンク ウン・ワン・カー ン・ワン・キリーク		19c後葉	向日市教委2003。アーンクは五点具足阿字。
33 四天王寺	大阪府大阪市	寺院	東門跡	身・蓋 1	不明	不明		詳細不明	水野1984・井上1996
34 米子城跡21遺跡	鳥取県米子市	城跡	B区A10(グ)小ド	身・蓋 1	八鋒輪宝	なし		江戸時代	(財)鳥取県1998。鈴木2001。截部分は文字「十九歳 女 水性」

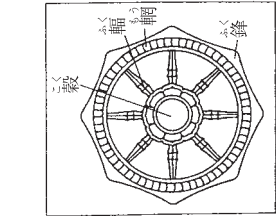
【参考-羯磨墨書土器出土地】

遺跡名	所在地	種別	埋納位置	出土点数	輪宝・羯磨形式	梵字(種子)	共伴遺物	時期	文献・備考
1 米野遺跡	埼玉県寄居町	屋敷跡	ビ・小	身・蓋 1	三鉈羯磨	ア	なし	16c	鈴木1996・2001。(財)埼玉県埋文事業団1999
2 金剛寺遺跡	大阪府阪南市(旧阪南町)	寺院跡	包含層	身?	三鉈羯磨	なし	なし	14c	(財)大阪府埋文協1987。井上1996・鈴木2001

【参考-輪宝羯磨墨書石出土地】

遺跡名	所在地	種別	埋納位置	出土点数	輪宝・羯磨形式	梵字(種子)	共伴遺物	時期	文献・備考
1 大釜館遺跡	岩手県滝沢村	城館跡	道路跡?	1	八鋒輪宝・羯磨	ア・パン	寛永通宝7	17c後半-18c前半	井上2003。滝沢村埋文センター2003。輪宝・羯磨墨書石
2 江上館跡	新潟県北蒲原郡中条町	居館跡	包含層	1	八鋒輪宝か	ア?		15c	鈴木2001。中条町教委1995。輪宝墨書石

※ 本表作成にあたって青木敬、井上雅孝、桐生直彦、小林謙一、斎藤弘、鈴木芳英、水野正好、各氏より出土事例を御教示いただいた。
※※ 梵字(種子)の釈読は筆者(池田)が行った。なお児玉義隆、小林義隆、向井隆健、各氏より梵字悉曇文献について御教示を得た。



大日如来等
宝輪如来等
ア a
※ 諸仏の通種子

不動明王
カーン
hām

開敷華王如来等
アー ā
ウーン
hūm

無量寿如来等
アン am
ウン
hūm

天鼓雷音如来等
阿克 ah
キリーク
hriḥ

(胎藏界)
大日如来
アーク ah
※ 三點具足阿字

金剛夜叉明王等
ウーン
hūm

(胎藏界)
大日如来
アーンク aūmṇ
※ 五點具足阿字

ラ ra

(金剛界)
大日如来
バン vam

輪宝部位 (井上 1996)

梵字・種子 (児玉 1991)

第 37 図 輪宝部位と主な梵字・種子

IV まとめ

〔参考文献〕

- 足利市教育委員会 1992『史跡足利学校跡保存整備報告書－経過・発掘調査報告書編－』
- 池田敏宏 2005「Ⅳ．まとめ」『祇園城跡関連遺跡』栃木県教育委員会・**（財）とちぎ生涯学習文化財団**
- 井上雅孝 1992「輪宝墨書土器覚書」『いわき地方史研究』第29号 いわき地方史研究会
- 井上雅孝 1996「地鎮め具としての輪宝」『標葉文化論究』小野田禮常先生頌寿記念論集刊行会
- いわき市教育委員会 1988『屋敷前遺跡』
- 鹿島町遺跡保護調査会 1990『鹿島城跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 加藤真司 2007「志野と織部の生産について」『志野と織部』出光美術館
- 川崎市民ミュージアム 2001『企画展解説図録 呪いと占い』
- 久世康弘 1998「京都市域における埋納（祭祀）遺構の集成」『研究紀要』第5号 **（財）京都市埋蔵文化財研究所**
- 群馬県教育委員会 1988『史跡上野国分寺跡』
- 郡司良一 1972「梵字を描く墨書土器」『考古学ジャーナル』No.71 ニュー・サイエンス社
- 児玉義隆 1991『梵字必携－書写と解説－』**朱鷺書房**
- 児玉義隆 2005『梵字の書法－真言密教・ほとけの文字－』大法輪閣
- 今平利幸 2001「下野における中世土師器皿について」『栃木県考古学会誌』第22集
- 齋藤彦松著 Saito Print 研究会編 2004『悉曇要軌』摂河泉文庫
- （財）大阪府埋蔵文化財協会** 1987『金剛寺遺跡』
- （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団** 1999『城見上／末野Ⅲ／花園城跡／箱石』
- （財）鳥取県教育文化財団** 1998『米子城跡21遺跡』
- 種智院大学密教学会編 1984『梵字大鑑』名著普及会
- 鈴木孝之 2001・2002・2006「中世～近世の地鎮について（上・中・下）」『埼玉考古』第36・37号（埼玉考古学会）・『研究紀要』第21号 **（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団**
- 東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 栃木県立博物館 2006『企画展 今よみがえる中世の東国』
- 都内遺跡調査会 2000『小石川牛天神下－都立文京盲学校地点における発掘調査報告書－』
- 鳥羽正剛 2000「天野山金剛寺遺跡検出「土釜埋納遺構」における修復元論－『土公供作法次第』および口伝からのアプローチ－」『天野山金剛寺遺跡』河内長野市教育委会・河内長野市遺跡調査会
- 中野晴久 2005「常滑・渥美系」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相－生産技術の展開と編年－』発表要旨集
- 中条町教育委員会 1995『江上館跡Ⅲ』
- 服部敬史 1997・1998「内耳土鍋の研究（上・下）」『土曜考古』第21・22号 土曜考古学研究会
- 松戸市遺跡調査会 1997『小金城跡（第4地点）』
- 間宮正光 2003「輪宝墨書土器に見る城館の“地鎮め”」『研究紀要』第5号 山武考古学研究所
- 宮城県考古学会 2007『平成19年度 宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨』
- 向日市教育委員会・**（財）向日市埋蔵文化財センター** 2003『埋蔵文化財調査報告第59集 長岡京跡ほか』
- 真岡市 1984『真岡市史』第1巻 考古資料編
- 水野正好 1984「近世の地鎮・鎮壇」『古代研究』28・29 特集 地鎮・鎮壇 **（財）元興寺文化財研究所**
- 森 郁夫 1972「密教による地鎮・鎮壇具の埋納について」『佛教藝術』84 佛教藝術学会編 毎日新聞社
- 両角まり 1996「内耳鍋から焙烙へ」『考古学研究』第42巻42号 考古学研究会
- 山武考古学研究所 1994『杣瀬Ⅰ遺跡 杣瀬Ⅱ遺跡 杣瀬Ⅲ遺跡』

版 圖



1. 下陰遺跡遠景及び周辺状況（北西上空から）



2. 下陰遺跡（VI-2区）全景（上空から）



1. 調査区Ⅵ-2(東)区全景(南東から)



2. SD-5001・5002周辺(南西から)



3. SA-5009周辺(南西から)



4. SK-5025周辺(南から)



5. Ⅵ-2(東)区南東部全景(北西から)



6. SE-5064・5086・SK-5027周辺(西から)



7. SK-5075周辺(南西から)



8. SK-5091周辺(南西から)



1. VI-2 (東) 区南半分全景 (北西から)



2. 調査区VI-2 (東) 区全景 (北西から)



3. SD-5001 完掘 (北東から)



4. SD-5001 遺物 (1) 出土状況 (南西から)



5. SD-5001 遺物 (75) 出土状況 (北東から)



6. SD-5002 完掘 (北東から)



7. SD-5002 遺物出土状況 (南西から)



8. SD-5002 遺物 (2・67) 出土状況 (北東から)



1. SE - 5031・5032・5033 完掘（東から）



2. SE - 5034・5035 完掘（北東から）



3. SE - 5036 遺物（60・61）出土状況（南西から）



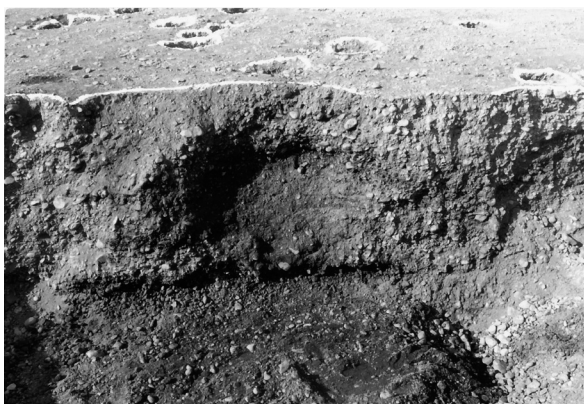
4. SE - 5036 完掘状況（南西から）



5. SE - 5031～5036 完掘（SE - 5088 断ち割り前）（北東から）



6. SE - 5088 断ち割りセクション（南東から）



7. SE - 5088 断ち割り完掘（南東から）



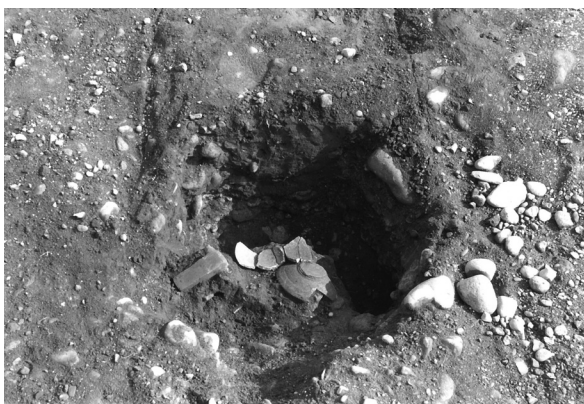
8. SE - 5031～5036・5088 完掘（南西から）



1. SA - 5007・5008 完掘 (東から)



2. SA - 5009 完掘 (南西から)



3. SK - 5014 遺物 (8・9・83) 出土状況 (南西から)



4. SK - 5014 完掘 (南西から)



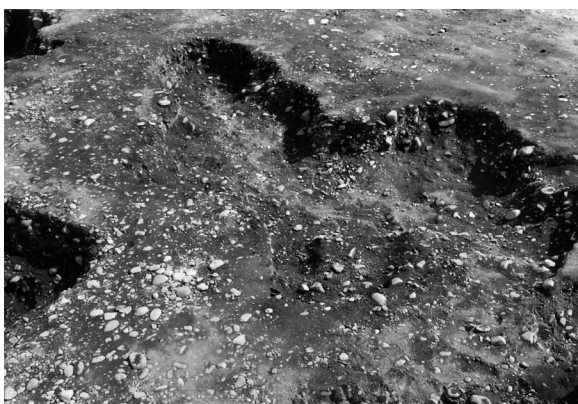
5. SD - 5004 完掘 (北東から)



6. SK - 5005 完掘 (南西から)



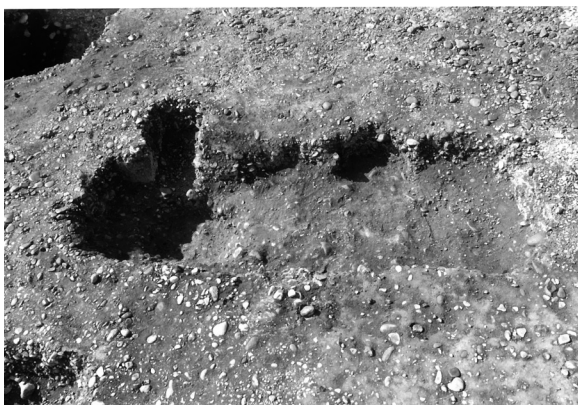
7. SK - 5010 完掘 (南から)



8. SK - 5016 ~ 5020 完掘 (西から)



1. SK - 5021 完掘 (南から)



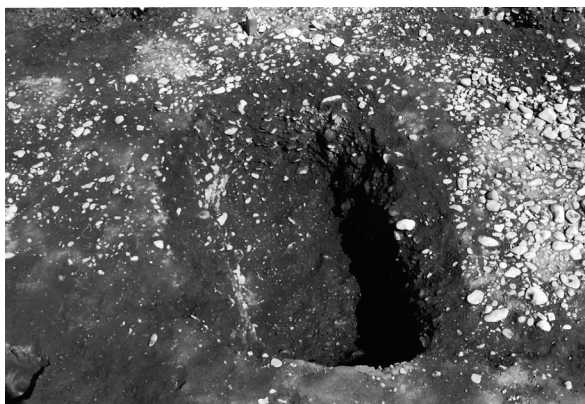
2. SK - 5025 完掘 (南東から)



3. SK - 5028 完掘 (北東から)



4. SK - 5029 完掘 (南西から)



5. SK - 5040 完掘 (南から)



6. SK - 5044・5120～5123 完掘 (北西から)



7. SE - 5064・5086 遺物 (26・70) 出土状況 (西から)



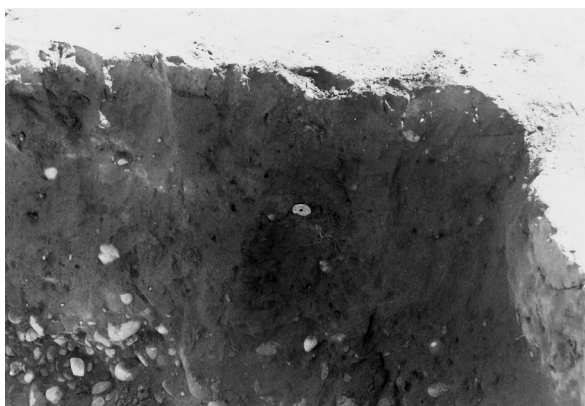
8. SE - 5064・5086 完掘 (南東から)



1. SK - 5015・5027 遺物出土状況（南西から）



2. SK - 5027 遺物 (13) 出土状況（北西から）



3. SK - 5027 遺物（古銭）出土状況（北西から）



4. SK - 5015・5024・5027・5046 完掘（西から）



5. SK - 5059 遺物 (27) 出土状況（南西から）



6. SK - 5059 完掘（南西から）



7. SK - 5054～5058・S - 5130 完掘（北東から）



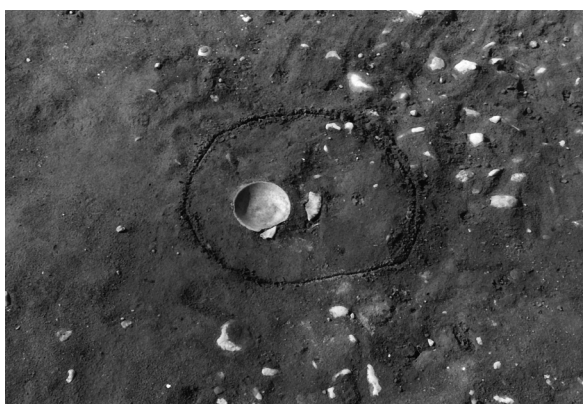
8. SK - 5130 遺物 (36) 出土状況（北西から）



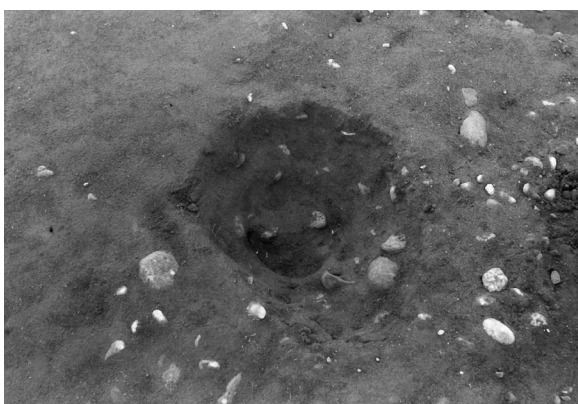
1. SK - 5061 遺物出土状況（南西から）



2. SK - 5061 完掘（南東から）



3. SK - 5167 遺物 (38) 出土状況（南西から）



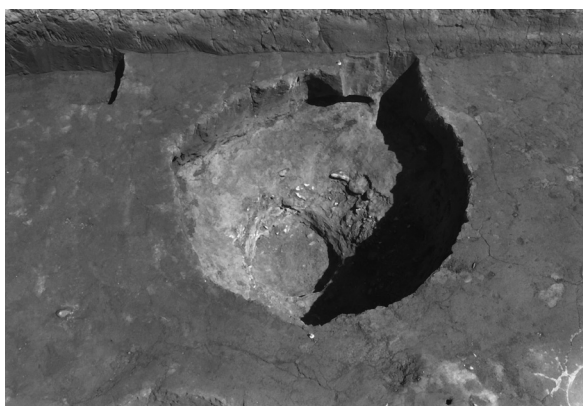
4. SK - 5167 完掘（南から）



5. SK - 5168 完掘（北東から）



6. SK - 5170 完掘（南西から）



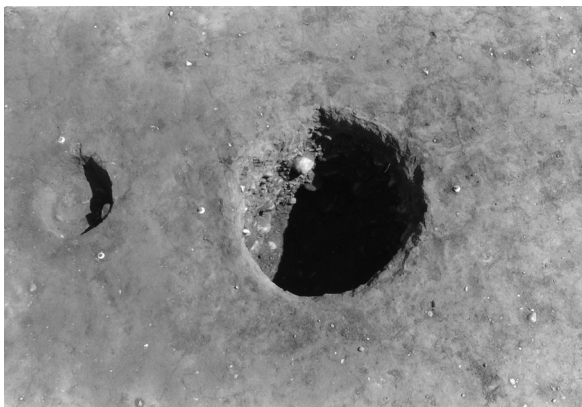
7. SE - 5080 完掘（南西から）



8. SE - 5092・SK - 5093 完掘（南から）



1. SK - 5065 完掘 (南東から)



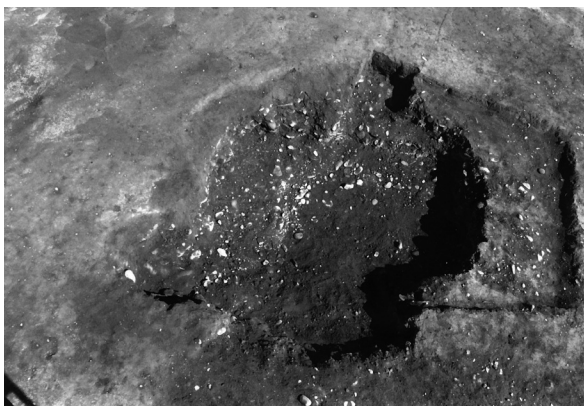
2. SK - 5066 完掘 (南東から)



3. SK - 5067・5068 完掘 (南西から)



4. SK - 5075・5090 完掘 (南西から)



5. SK - 5072・5073 完掘 (南西から)



6. SK - 5076～5078 完掘 (南東から)



7. SK - 5081 完掘 (南西から)



8. SK - 5091 完掘 (南東から)



SK - 5015 出土縄文土器①



SK - 5015 出土縄文土器②



SK - 5015 出土縄文土器③



S X - 5082 出土縄文土器①



S X - 5082 出土縄文土器②



調査区出土縄文土器①



調査区出土縄文土器②



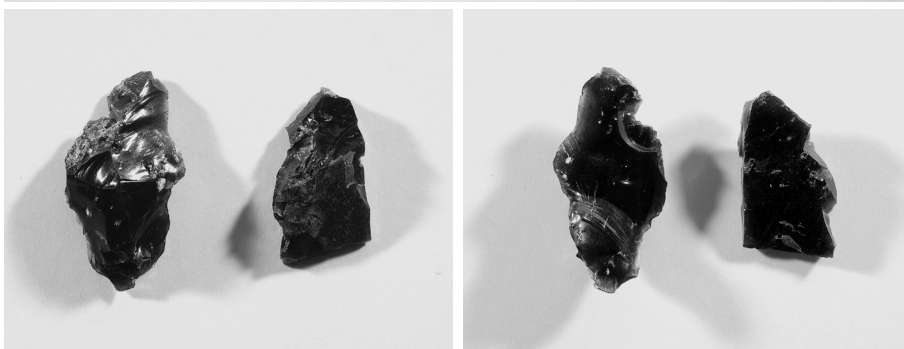
調査区出土縄文土器③



調査区出土縄文土器④



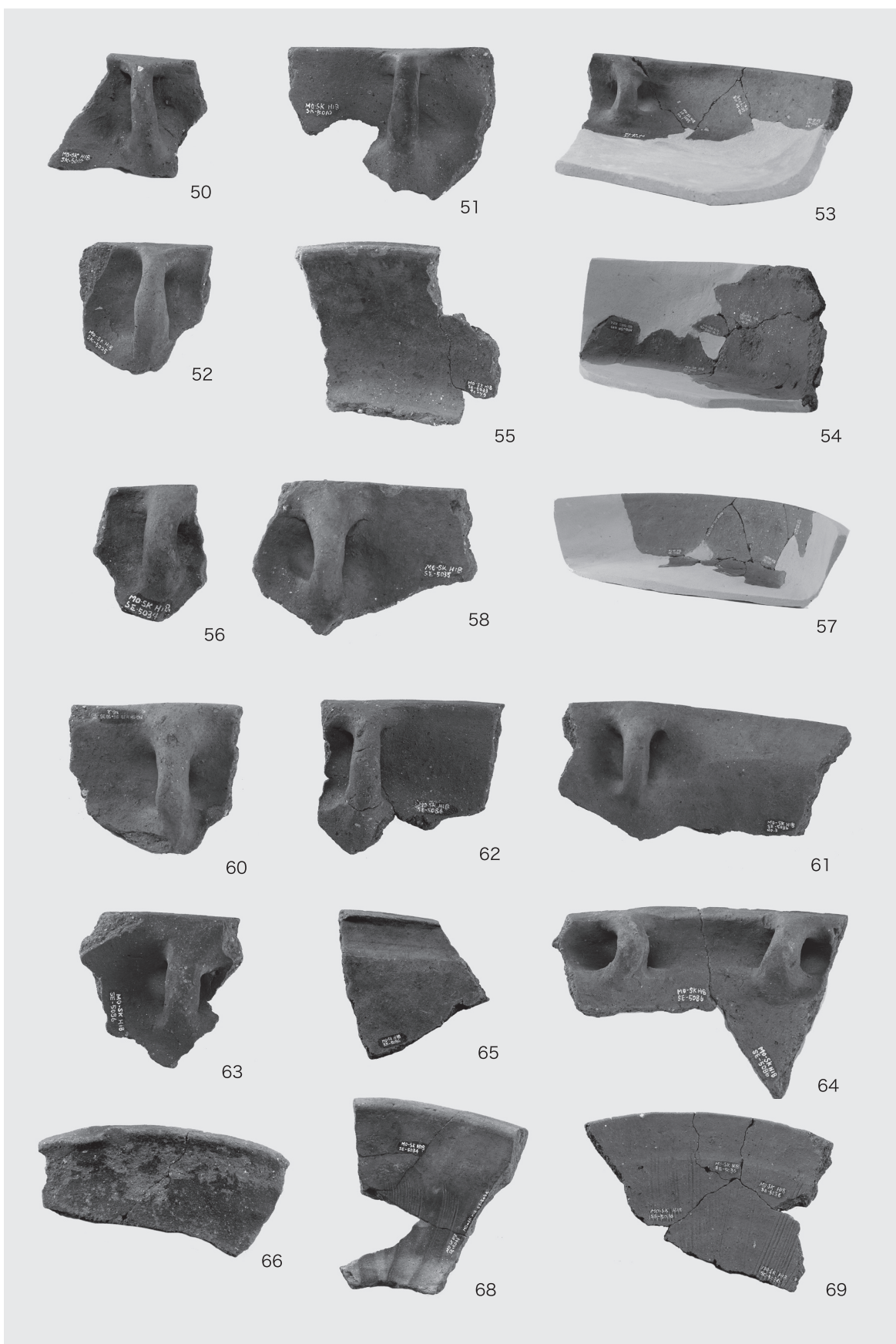
調査区出土縄文土器⑤

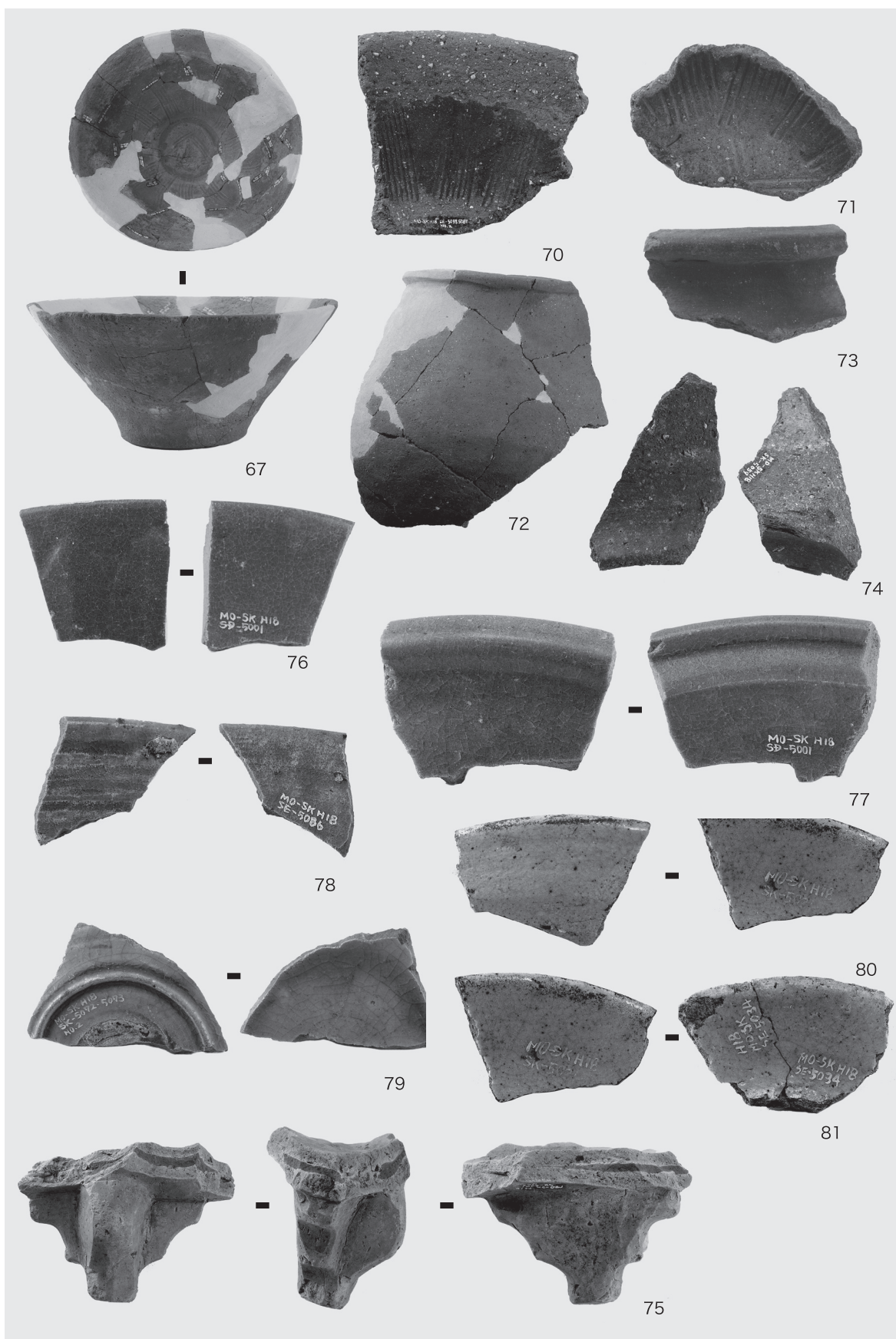


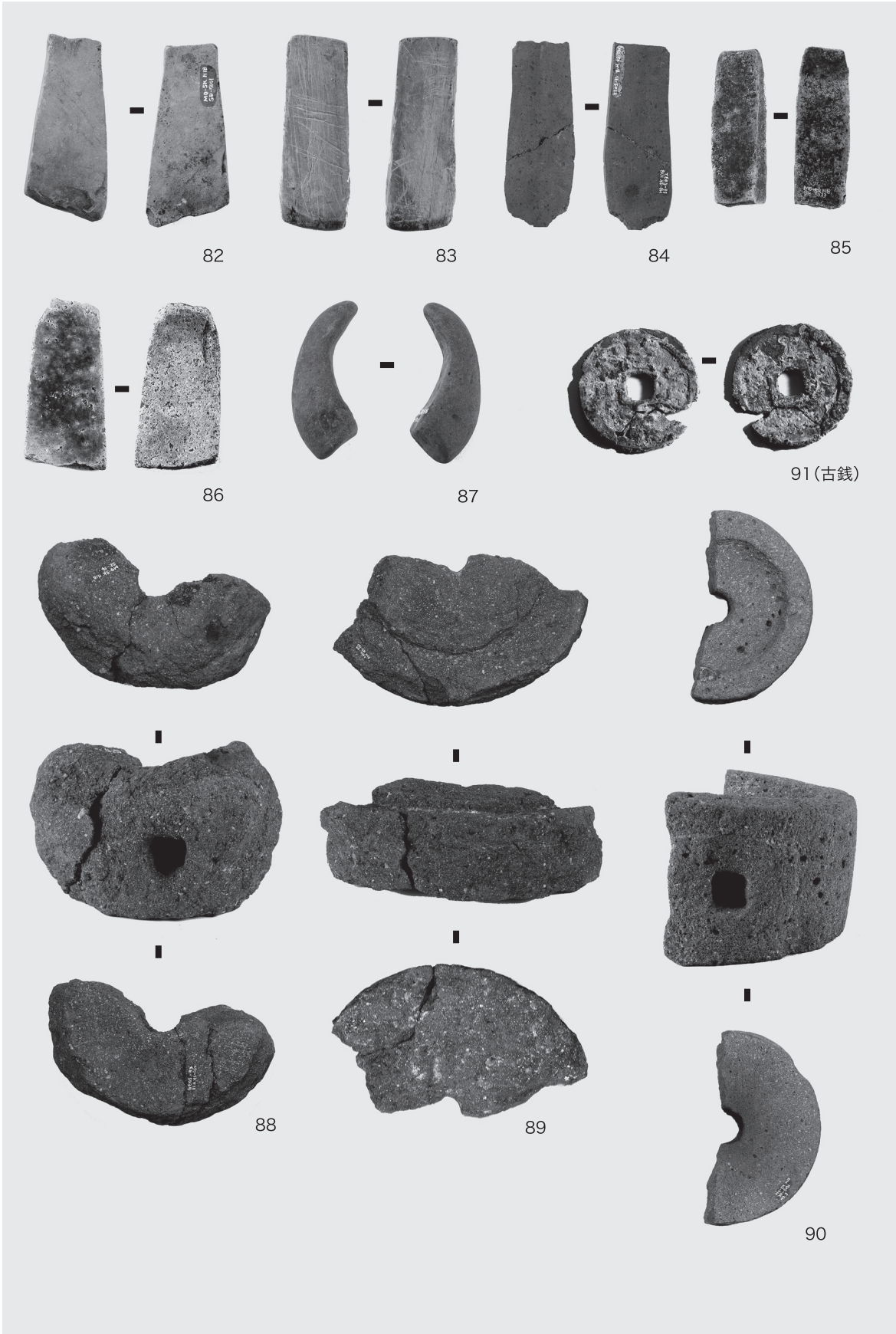
調査区出土黒曜石剥片

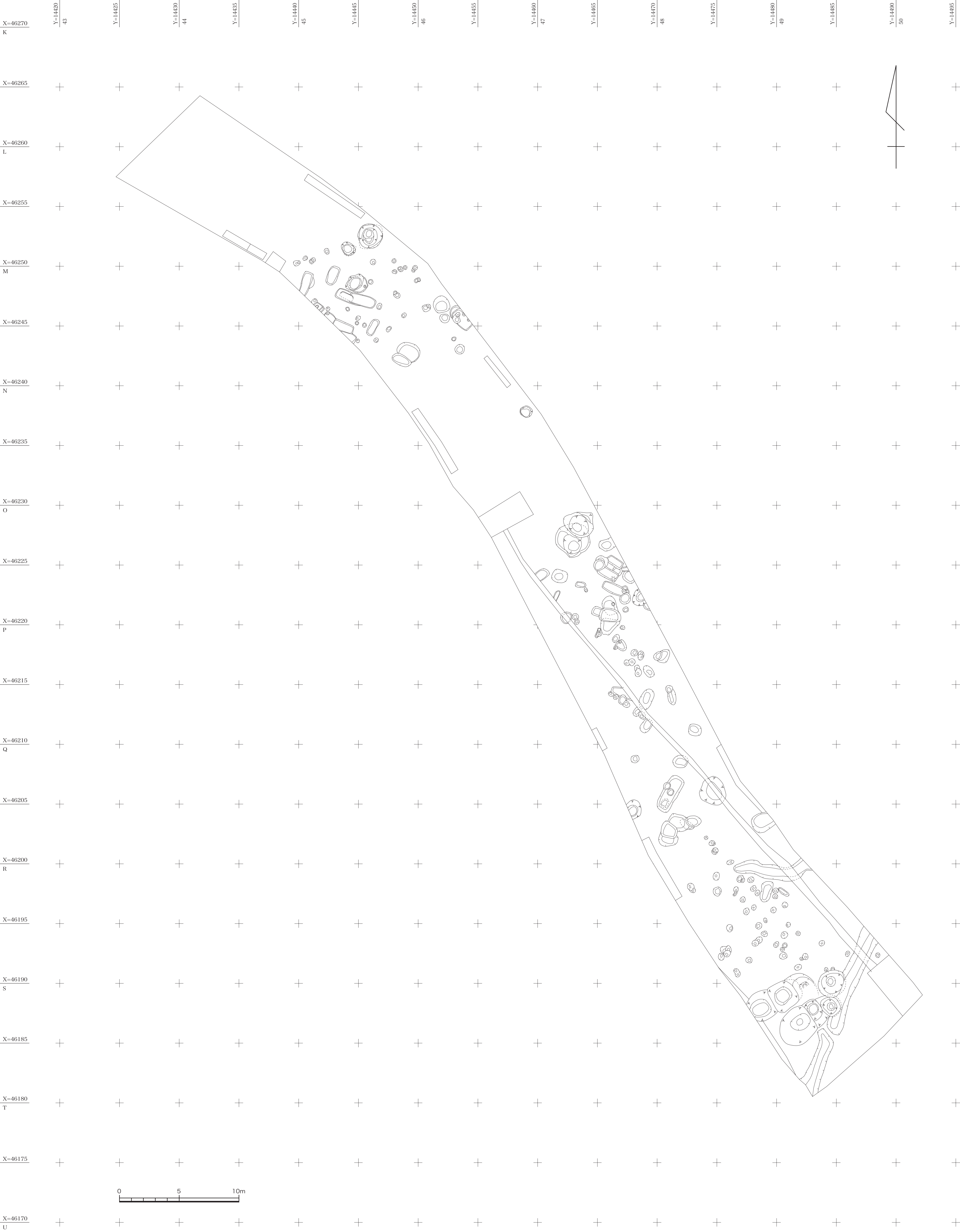












付図 下陰遺跡 (VI - 2 東区) 全体図 (S=1/140)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しもかげいせき
書 名	下陰遺跡 I
副 書 名	北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 X
巻 次	10
シ リ ー ズ 名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第310集
編 著 者 名	池田敏宏、田村雅樹
編 集 機 関	財団法人とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター
所 在 地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441
発 行 機 関	栃木県教育委員会 財団法人とちぎ生涯学習文化財団
発 行 年 月 日	西暦 2008年3月31日 (平成20年3月31日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもかげいせき 下 陰 遺 跡	もおかし 真岡市 やぎおか 八木岡地内	09209		36° 25' 11" (世界測地)	139° 59' 30" (世界測地)	2007.01.05 ～ 2007.03.30	1,530	道路(北関東自動車道)建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
下陰遺跡	集落 城館跡 関連	縄文時代 中 世	土坑 2基 柵列跡 3列 溝跡 3条 井戸跡 11条 土坑・小土坑 151基 不明遺構 1基	縄文土器(中期後葉～後期中葉) 土師器・土器小皿、内耳土器、 播り鉢、瓦質土器壺、瓦質獣脚(火鉢)、 古瀬戸産陶器、美濃産陶器(志野皿類)、青磁、古銭	15c後半～16c前半頃に位置付けられる輪宝墨書土器(地鎮具)が出土している。

要 約	<p>下陰遺跡は真岡台地が五行川に向かって落ちる緩斜面に広がる。標高は約56～58mである。発掘調査は平成13・14・17・18年度に実施されている。今回は平成18年度分(Ⅳ-2区。1,530㎡)の報告である。Ⅵ-2区調査で検出された遺構はピット列3列、溝跡3条、井戸跡11基、土杭群151基である。出土遺跡は15世紀～16世紀の土師質土器小皿、内耳土器、播鉢などが主体をなす。ただし、なかにはこの前後の時期の土器も含まれており、遺跡存続期間については検討を要する。なおSK-5027からは輪宝墨書土器1点と古銭(至大通宝?)1枚が出土しており、地鎮めに関係した遺構・遺物の可能性が高い。</p>
-----	--

栃木県埋蔵文化財調査報告第 310 集

下 陰 遺 跡 I

－北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 X－

発行 栃 木 県 教 育 委 員 会

宇都宮市塙田 1－1－20

T E L 028 (623) 3425

財団法人とちぎ生涯学習文化財団

宇都宮市本町 1－8

T E L 028 (643) 1011

平成 20 年 3 月 31 日発行

編集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団

埋蔵文化財センター

下野市紫 474 番地

T E L 0285 (44) 8441

印刷 下野印刷株式会社
